の語に依て豁然大悟することもあるのである、着語に鍛錬れども斗を出でず斗の中へ小蝦を入れるピン〳〵と跳りはねるけれども到底斗外へ飛び出すことは出來ないも同樣師弟に替つて徧身を通身と言ふて見てもヤハリ同じことよ、寧ろ此時に全く同じ語を以てヤハリ徧身是手眼と言ふてあつたならば、後學の理窟を免がれしめてあつたかも知れぬが、亦た其の語の一字かはつた爲めに一疑團を引く材料ともなつて工夫參究の力を得させる邊もあらう、畢竟は備の眼睛を換却し舌頭を移却す要はこゝに在るのである、徧身と云へば徧身に滯ふり通身と云へば通身に滯ふる、そこで其を轉却せしむるのが接化の尤も肝要とする手段である、還て十成を得てんや也た未だしや他を咎めて只八成と言ふたのであつたが、此れが十成と云ふのであるのかと拶着した、結局は八の十のといふ數量に渉るべきことでは無い、只々爹を喚て爺と作したのみのことよ、爹も爺も同く父を呼ぶの稱である、カヽさまと云ふもオツカと云ふもオターサマと云ふも同く母親のことよと兩人の間に優劣勝敗を認めないのである。

頌

徧身是通身是四肢八節○未二有半邊一○猶在二窠窟一○踏不レ可二拈來一猶較十萬里

展翅崩騰六合雲豎子境界○將謂天下人不二奈レ何一○搏レ風鼓蕩四溟水豎子摩挲○吹散○君不レ見又恁去

何埃壒兮忽生重叠○斬釘截鐵○拈起著那裏一○那箇毫釐兮未レ止別別了也○

網珠垂範影重重大小交羅可惜許依レ舊打成一片○

此の頌は觀世音の大悲を主として頌せられた、雲巖の徧身是れ手眼と言ふたも是てある道吾の通身是れ手眼と言ふたも是てある、是は是てあるが之を拈じ來つて大悲の當體當用を見やうとしたならば、猶ほ十萬里に較る遠いぞ、着語に四肢八節何も事々しく徧身の滿身のと言ふには及ばない、人々各自父母所生の四肢八節て何の不足があると此れが圓悟の大悲てある、徧身是れ手眼と言ふたのが惡いては無いけれども、未だ是れ祇管極則の處にあらずと抑へて、學人の此邊に滯ふるのを誡める、通身是れ手眼が惡いては無いが、頂門上に半邊あるまでのことて尙ほ半邊があらうぞ猶ほ窠窟裡に在り鞠もすれば知解分別に落ち入りそうてある、瞎一漢に何を見やうとて眼の穿鑿などをするのてあるか我は眼に用が無い盲目

てあるぞ、十萬里の隔たりに滯ふる者などを放過しては則ち不可てある、決して許しては成らぬ況や何ぞ止た十萬里のみならんや若し偏身通身に滯ふるは無量阿僧祇の隔たりとなるてあらう、先づ之を置へて見やうならば雲巖の偏身是れ手眼と言ふたのは、彼の九萬里に羽うつと云ふ所の大鵬が翅を展べて崩騰す六合の雲と云ふ勢ひて、天地四方の雲も霞も一羽ばたきに攪き散らすやうなものてあると大に稱揚を極められた、圓悟は些子の境界其ればかりの事かと抑へ將に謂へり奇特とモッと何ぞ豪いことがあるかと思ふたにと言ひつゝ更に點と點破して打ち消してしまふた、又道吾が通身是れ手眼と言たは瞥へば其の大鵬が風に搏つて鼓蕩させる力があるやうなものじや、圓悟は同と想ふた効も無くサテ〳〵つまらぬと罵しり、更に過イヤハヤ大層な行き違ひてあつたナゼ斯う抑へ罵しるかと云ふに次に謂ふ所の大悲の功德を廣大ならしめんが爲めの抑揚てある、即ち雪竇自から前の二句を打ち消して是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず彼の大鵬の六合四溟を動かすは廣大なやうなものてはあるが、之を大悲

菩薩の千手千眼に比べて見れば一點の塵埃がチラ〳〵と虛空に飛ぶやうなものてあるぞ、着語に重ねて禪人の爲めに注脚を下す雪竇あまりに講釋が過ぎる其のやうに言はんても好いに斬と其の注脚を截りすてゝしまへ、其の塵埃を拈却し來つて那裡にか著けん何處へやるつもりじや、那箇の毫釐ぞ未だ止まざる毫釐は極めて微細なる形容今は即ち偏身とか通身とか言ふのを大悲の願海に比ぶれば眞に微細のことてあるに、何時までも其れに住着して居たならば決して大悲の手眼を見ることが出來ぬに依て、其れを離れよと捨てよと警誡するために何ぞ未だ止まざると叱る意てある、着語に別々何うも雪竇の機鋒は亦た格別てあると讃歎し、イヤモー此の二句て何も彼も皆吹き散し了れり截すべて斷滅してしまふた、サー斯うなつてきては愈々大悲願海の風光を示さなければならぬことに成たに依て君見ずや網珠垂範影重々と華嚴經の入法界品を引き出してきた、網珠と云ふことを委く話せば大層に面倒なことになるが、極めて俗に極めて略して言へば、天上界の帝釋天の居らるゝ善法堂と云ふ所の前に、摩尼珠といふ玉を繋いだ網が懸けてある、其玉が幾千百と云ふ限りなく多くあるのが、互に光と光とが照り合ひ影と影と

が映り合ふ有樣、一つの玉の中に百千の玉を含み、百千の玉が一つの玉に收まる交映重々主伴無盡て美しいとも奇麗とも言ひやうの無い景光、其れを此十方法界に有りと有らゆる一切衆生一切諸法の互ひに圓融交參して一つが百千萬億て百千萬億が一つてあり、百千萬億とも一つとも言ふに言はれぬ作用に譬へたのてある垂範といふは其の網珠の垂れ下れる姿、サー斯うなつてきては通身の偏身のといふ一個人の話では無い、十方法界を全提して始めて大悲の幾分を言ひ詮はしたのてある、圓悟は例の如く之をも抑へて大小大の雪竇這箇の去就を作す、雪竇とも言はれる者が其のやうな譬喩などを引き出してくるとは、何といふ取り亂しやうかと罵しる可、惜許、舊に依て葛藤を打す、左右に雪竇は文才に任せて色々なことを言ふて人を惑はせる惡い癖と抑へる、棒頭の手眼何よりか起る、彼の德山禪師の如き人を接すれは直に棒を振つて打着したと云ふ、其の險峻孤危なる機鋒の如きは畢竟何處から起つたのてあらうぞ、皆只此の廣大圓滿なる大悲の手眼が時として棒となり喝ともなり乃至拈鎚竪拂種々百端の活動をするのては無いかと云ふ、其れは何も禪僧の棒喝に限つたことては無い、農夫の鍬鎌も商人の十呂盤も乃至朝子をかぶるも草鞋をはくも皆此の大悲の千手千眼に外ならぬのてあるが、如何にせん寸毫も人情を加へ分別に落つれば皆千里萬里の隔たりとなるのてある、著語に先づ咄と叱りつけて、更に賊過後の張弓最初から其の棒を持ち出せば好いに今ごろになつて何の用に立つと罵じる、你を放すこと得ず雪竇貴公の罪は輕くないぞよ、然かし盡大地の人氣を出たす處なからん斯う棒頭の手眼何よりか起ると問はれては誰ても答へは出來まい、放得すれは又須く棒を喫すべし、けれども若し雪竇が此處て手緩いことをして居たならは自から其の棒を喫することになるてあらう、サー圓悟は斯うじやと便ち打て云く且く道へ山僧底が是か雪竇底が是か此の着語は次の句の下に在るべきてあると云ふことてある、即ち雪竇は愈々結局に至りて咄と都べて從上の葛藤を咄破して痕迹をのこさない、そこて圓悟が便ち打てサー何うじや雪竇の一咄と我が一棒と孰れが是か勘辨して見ろと門下後學への挨拶着てある、此の咄の字を喝に作つた本がある咄ても喝ても好いが、此次の三喝四喝の後作麼生とある着語から喝の方てあつたかも知れぬ、即ち雪竇が一喝に喝散したが其の喝を更に幾喝もつゝけた所て其れから何うすると云ふのじやと此に

至りては喝と云ふも咄と云ふも亦た只賊後の張弓に過ぎぬのである、

第九十則　智門般若體

本則 擧僧問智門如何是般若體（通身無影象○坐斷天下人舌頭○用體作什麼）門云蚌含明月（光呑萬象即且止棒頭正眼事如何○曲不藏直○雪上加霜又一重）僧云。如何是般若用（倒退三千里○要用作什麼）門云。兎子懷胎（嶮○苦瓠連根苦甜瓜徹蔕甜○向光影中作活計不出智門窠窟○若有箇出來且道是般若體是般若用○且要土上加泥）

他本には此の則に垂示のあるのもあるが、其の垂示は後の第九十四則の垂示と同じであつて、そうして少し文句が足らない、故に此れは何かの間違ひて第九十四則の垂示の一半が此へ混じたのであらうと云ふことである、仍て種電抄の本にも除いてあるから今も其れに從がつて垂示は除く、サテ本則に僧あり智門に問ふ、智門のことは前の第二十一則にもあつた如く、雲門大師の嫡孫であつて此の碧巖集の頌を作つた雪竇禪師の本師である、此の間端は般若の體と用とを二つに分けたので、先づ如何なるか是れ般若の體とある、般若といふことは今さら申すまでも無いが梵語の般若を漢譯すれば智慧であるが、支那で通常に仁義禮智などと云ふ時の智とは、字が同じでも意味の程度が違ふに依て、殊更に慧の字を加へて智慧と云ふたものである、サテ此の般若といふことを說明するに就ては實相般若と觀照般若と文字般若との三つに分けて講釋するやうなこともあるが、今は其のやうに面倒なことはお預りにして置て、約る所は吾人の心の靈光を般若と謂ふので、常に諸佛の光明と云ふのも此の般若すなはち吾人の心の靈光のことである、此の心の靈光は不可思議にして十方法界に遍滿する、譬へば鏡の光の如きもので無念無心にして而も明煌々たるものである其れを即ち般若の體と謂ふ、着語に通身影像なしとあるは徹頭徹尾光明ばかりぞと云ふこと天下人の舌頭を坐斷す、般若の體は決して言語を以て說明することの出來るものでは無い、體を用ひて什麼をか作さん一體に般若を體だの用だのと分けて何うするぞ若し分けられるやうなものならば般若であるまいと問者を抑へる、門云く蚌明月を含む此れは支那の俗說に廉州の合浦と云ふ所の蚌蛤に眞珠の多いのは、八月十五日の夜に蚌蛤が明月の精を含んで其れが眞珠になるのであると云ふことを言ふのである、其れを借りてきて答話にあてたのである、蚌蛤に用は無い只その明月の光が無念無心にして照さゞる所

なき姿を言ふのである、故行誡上人が般若波羅蜜多といふ題で、何をかは照せるものと冬の夜の嵐のあとの月に問はばや」と詠ぜられたのも全く此處の味ひと見える、着語に光の萬象を含むは且く止く棒頭正眼の事如何と圜悟特色の棒を持ち出した、言ふこゝろは蚌蛤が明月を含んだと云ふやうな詩的なことはお預りにして。今こゝて七尺の烏藤を振りかざしてドシンと打ちなぐると云ふ端的は何うじやナ、其れは般若の體か將た用かと智門に向ひつゝ吾人への警誡である、曲は直を藏せず此れは智門の答の公明無私にして體の用のと云ふ度合を通りぬけて居る姿、雪上に霜を加ふ又一重蚌蛤ならば蚌蛤て何の不足もあるまいに明月を含むなどゝは餘計なことよと抑へる、僧云く如何なるか是れ般若の用、吾人朝夕喫茶喫飯、屙尿放尿起居振舞何事か亦た般若の用ならざらん、前に譬へた鏡の光が能く萬物を照して花がくれは花のまゝに、紅葉がくれは紅葉のまゝに、思量分別に渉らず歴々分明其影を映じつゝ厭ひもせねば欣びもせぬやうにさへ往ければ吾人の日用皆悉く般若の用の現成である、般若の用は常に利劒に譬へられ又は大火聚に比せられる、觸るれば斬れる當れば焼ける、實に活動息む時なき功用を表したものである、

そこて着語にも倒退三千里イヤモー般若の用は畏しいものぞ觸れざるに如かず逃げるに如くは無いとしやれた、用を要して什麽をか作さん十方法界一枚の大光明を體だの用だのと分けて何の詮があるとじやうな支那の俗說で兎は八月十五夜の月に向て口を開いて居れば懐姙して、兒を口から生むのであるから兎は月の精てあると云ふのである、今は其の兎には用は無い只其の月の光が無念無心にして一切の物を照す姿を借りて、般若の用の無礙自在なるに比するまてのことてある、問ふ方では體と用と二つに分けての問ひてあるが智門の答は蚌と兎と相手は違ふても同じ中秋の月の光のみてある、一体に月を以て法に譬ふることは佛教家の常習て、眞如の月と云ひ法性の月と云ひ心月と云ひ其他色々に言ふけれども、尤も人口に膾炙して人の知て居るのは、盤山道積禪師の心月の偈てある「心月孤圓、光呑萬象、光非照境、境亦非存、光境俱亡、復是何物」又永嘉玄覺大師の「一性圓通一切性、一法徧含一切法、一月普現一切水、一切水月一月攝」とあるのなどが尤も今の問題に親く思はれる、然かし斯の邊て知解分別したのては此の公案と全く沒交渉てある、圜悟は先づ喝と言ふた、サスガは雲門下の知識

だけに智門の機鋒は嶮峻であるとほめ、苦瓠は根に連つて苦く甜瓜は蔕に徹して甜し、山は高く海は深いと云ふも火は燒き水は濡らすと云ふも皆同じことで、其れが即ち般若の用よ、光影中に向て活計を作さば智門の窠窟を出でじ智門が體にも用にも一貫して只月光を以て答へたからと云ふて、若しも其の光の影のと云ふ所につきまはつて居つたならば、何時までも智門の語下を脱出することが出來まいぞと學人への注意、若し箇の出で來ることあらば且く道へ是れ般若の體か是れ般若の用かと云ひ又且く土上に泥を加へんことを要すと云ふ二語は古本に無い、風外老人は取らぬと言はれてある。

頌 一片虚凝絶謂情（擬心即差動念即隔○佛眼也覷不見）人天從此見空生（須菩提好與三十棒○用這老漢作什麼○殷使須菩提也倒退三千里）蚌含玄兎滚滚意（也須是當人始得○有什麼意○何須更用深深意）曾與禪家作戰爭（干戈已息天下太平○還會麼○打云闍黎喫得多少）

一片虚凝謂情を絶すと般若の體用を頌し盡された、虚は虚明の義で吾人本心の靈光が無礙自在に物を照す有樣、凝は凝寂の義で吾人本心の靈光が常住不變にして決して動搖しない姿、謂情は謂言情識で心で彼れの此れのと思量分別するのが情口で彼れのと此れのと論辨說示するのが謂である、常には情謂と熟する字であるが韵字の都合で謂情と云ふたものと見える、今は其の本心の靈光が虚明凝寂なる有樣を思量することもならねば言說するとも出來ぬ、謂ゆる不可思議不可說の境界其れが即ち般若の當躰であると言ふ、着語に心を擬すれば即ち差ひ念を動すれば即ち隔つ苟くも心念を動轉すればハヤ情謂に落ちて虚凝の般若に遠くなるぞ、佛眼も也た覷れども見えず此の虚凝にして謂情を絶したる所は三世の諸佛も窺ふことはならぬ、人天此れより空生を見る元來一片虚凝の靈光は己に謂情を絶したるものであるけれども此に於て眞實に會する所ありさへすれば、或は人間もしくは天上界の衆生も皆此の點に於て空生に相見することが出來るぞと言ふ、空生の故事は前の第六則の頌で一わたり話して置いたが、釋尊十六弟子の隨一たる須菩提尊者のことで、原語の須菩提を漢譯して空生と曰ふのであるそうな、此の人が空理三昧に入て坐禪して居るのを、帝釋天が花を雨ふらして供養し尊者が能く般若を說くを讃歎すると言ふた、空生は我未だ曾て一字の般若を說かず汝何をか讃歎すると言ふた時に、帝釋が尊者無說にして我乃ち無聞なり、無說無聞是れ眞の般

若と言ふたとある、今は其無說無聞是れ眞の般若と云ふ所を取て、眞の般若に契ふと云ふ意味を故事に依て空生を見ると言ふのである、着語に須菩提好し三十棒を與ふるに空生を見て何にする偏空耽寂の痴漢打てやれと罵る、這の老漢を用ひても、什麽か作さんと云ひ、設使須菩提なるも、也た倒退三千里と云ふ此の二つの着語は皆前の着語の注に過ぎぬ無くとも好いと思ふ、蚌玄兎を含む深々たる意、智門の二つの茶話を一句に作りて如何にも其の意味が深いと讃歎した、玄兎といふは月の異名てあるから此の二字を以て月と兎とを兼ねて其れに蚌を加へたは誠に面白い句の作りかたてある、着語に也た須く是れ當人にして始て得べし其の深々たる意は決して他に憑て語り得べきては無い、人々各自に脚下を照顧して自知自得すべきてあると云ひ、更に元來謂情を絶してあるに什麽の意かあらんと抑へた、其次に何ぞ須く更に深々たる意を用ゆべきとあるは、例の注釋的てある、曾て禪家に與へて戰爭を作さしむ其の深々たる意味を自知自得させるには坐觀究理二三十年幾びか蒼龍窟に下るの苦辛を要するのてあるぞと云ふ、着語に般若は元來安穩無事の境界、譬へば于戈已に息て天下太平てあるやうなもの、然るに何の戰爭をか要せんとの意、還て會すやと門下に一拶して、打て云く閻黎多少を喫し得たる雪竇は戰爭させると云ふが諸子はどれほど鐵砲玉を受けたかと學人の脚下を點檢する。

第九十一則　鹽官犀牛扇子

垂示。超情離見。去縛解粘。提起向上宗乘。扶竪正法眼藏。也須十方齊應。八面玲瓏。直到恁麽田地。且道。還有同得同證。同死同生底麽。試擧看。

情を超ゑ見を離ると云ふは佛法修行の常てあつて、廣く言へば八萬四千の煩惱、約めて言へば貪瞋痴の三毒、皆只情識の千變萬化てある、先づ其れを離れて感情の支配を受けないやうにせんければならぬ、又見と云ふは廣く言へば六十二見とも云ふが約めて言へば斷見と常見てあるが都べての見ることにつけ聞くことにつけ、喜怒哀樂貪瞋痴慢等の情識に追ひ廻されないだけの稽古は出來ても宇宙萬象に對して此の體性が斷無てあると思ふ所の

斷見か、又は其の體性が常住恒有てあると思ふ所の常見か、此の二つの中の一つに片寄るものが多數である、我見と云ふ時の我の字は當節の人の謂ふ所の靈魂の意味て、此の五尺の肉體の內に別して靈妙なる所の魂魄が有て、此の肉體が死て斷滅してしまふた後にも其の靈魂だけは常恆不滅であつて、其れが地獄へても天國へても往くやうに思ふて居るのは、肉體に斷見を立てゝ精神に常見を持て居るのであるから、其れは斷常の二見兼帶の外道てあると古人も誡められてある、左に右に凡夫の情識を超えた上に更に此の學者の見識を離なれなければならぬのてある、サテ又縛を去り粘を解くと云ふは更に其上の佛法に束縛せられ祖道に粘着して居る所の尤も高尙なる迷ひ、前には金鎖玄關とも言はれ又病の愈えた後の藥毒に譬へられるのを常に佛祖の粘縛とも謂ふのてある、然るに此の病は中々に除き難いもので、如何なる名僧高德の人てても佛法ほど尊いものは無いと思ふ所から都べての他宗教は一も二もなく輕蔑したり、又は自分の宗旨の勝れた所を信ずるあまりに他の宗派は都べて何の利益も無いやうに言ふたりする癖は容易に脫けないものてある尤も初心の者を濟度する方便として自家の信仰を強く勸めるために、他教他宗と比較評論するやうなことのあるのは、廢立の法門と申して萬已むを得ぬ場合もあり、又他の邪見邪解に陷入て居るのを救ふために彈呵叱責することも亦た止むを得ぬのてあるが、其れとても胸中には毫厘の粘縛の氣などは絕え果てゝ居て、其れから後の濟度方便には如何なる處分に出てやうとも其れは却て粘縛を離れた上の働きと云ふものてある、サテ其の働きぶりはと云へば向上の宗乘を提起し正法眼藏を扶竪する、此の向上と云ふ言葉を近頃は世間て頻りに使ふやうてあるが、從來禪宗て使つて居るのとは大に程度が違ふかと思はれるから注意して置きたいものてある、從前禪宗て向上と云ふのは高尙なる目的即ち理想に向て進んて往くと云ふことては無い、已に宇宙の本體を掌中に握つて自ら萬物の主宰となり、基督教などて謂ふ所の神をも奴婢として自由に逐ひ使ひ、佛教て謂ふ所の佛陀を牛馬の如くに使役する地位に立ち、謂ゆる孤峰頂上に獨坐する姿を向上宗乘と謂ふのてある、此れは固より提起して人に示すべきものては無い、又他人の示しを受くべきことても無いが、今は且らく初心のために其の幾分を或は言句または動作の上に示して見せるまてのこと

である、正法眼藏と云ふことも常に言ふことではあるが、早く言はゞ佛の悟りと云ふことで其れを歷代の祖師が嫡々相承すると云ふので或ひは佛心印を傳ふるとか宗脈を承けるとか傳燈とか瀉瓶とか色々と有り難そうに言ふやうなものゝ、其の實は天地日月山川草木宇宙萬象ありのまゝに歷々分明悉く正法の實現ならぬものは無い、其れを今は扶竪すると云ふも畢竟吾人鈍根の學人のために已むを得ざる手段である、けれども也た須らく十方齊く應じ八面玲瓏と如何なる場合に於て如何なる事情に出あふとも自在無礙に而も淨躶々赤灑々丸はだかになつて毫末ばかりも虛僞に涉らず、猶豫せず假借せず、直に恁麼の田地に到るべし、恁麼の田地といふは即ち前の向上宗乘を提起し正法眼藏を扶竪することを指すのである、田地といふは俗に立脚の地とか又は立ち場とでも云ふやうな意味、且く道へサー還て同得同證同死同生底ありや、這の事は三世の諸佛も歷代の祖師も皆同じ軌道を同じ樣に歩いて居ることは昔の火も今の火も、西洋の水も、東洋の水も必ず物を燒く必ず物を濡らすと云ふことに於て異轍のあるべきでは無いと同じやうなわけであるが其れに就て古人の間に適當な證據とも謂ふべきは鹽官と投子と石霜と保福と雪竇との四大老に面白い逸話があるぞと云ふので、試みに擧す看よ。

本則 擧鹽官一日喚侍者。與我將犀牛扇子來（打葛藤不少○何似這箇好箇消息）侍者云。扇子破也（可惜許○好箇消息○道什麼）官云。扇子既破。還我犀牛兒來（漏逗不少○幽州猶自可最苦）侍者無對（果然是箇無孔鐵鎚○可惜許）投子云。不辭將出。恐頭角不全（似則是新羅○和尚用犀牛兒作什麼）雪竇拈云。我要不全底頭角（堪作何用○將錯就錯）石霜云。若還和尚即無也（道什麼○撞着鼻孔）雪竇拈云。犀牛兒猶在（嶮○泊乎錯認○收頭去）資福畫一圓相。於中書一牛字（草裏不分拈出○弄影漢）雪竇拈云。適來爲什麼不將出（金鍮不辨○也是草裏漢）保福云。和尚年尊。別請人好（辭地裏罵官人○辭辛道苦作什麼）雪竇拈云。可惜勞而無功（兼身在內○也好與三十棒○灼然）

鹽官といふは抗州鹽官の海昌院齊安國師と申して馬祖大師の法嗣である、我が嵯峨天皇の皇后橘嘉智子の君は此人を我が國に請待せられたのであつたが、老衰したからと云ふので弟子の義空禪師と云ふ人を日本へ寄來された、皇后は特に檀

林寺と云ふ寺を建て其の義空に參禪の功を積まれて見性悟道の境に達せられ、檀林寺に御隱居なされたと云ふので、檀林皇后とも申しあげる此れが我が國に於て全く禪宗の始まりてある、皇后の悟りのお歌として傳へられてあるのに「もろこしの山のあなたに立つ雲は此處に燒く火の烟なりけり」とあつて、法性の大海には遠近の隔てなきことを詠ぜられてある。此のお歌は空間的におよみなされたのてあるけれども、其中におのづから時間の無限なることを含まれてあるから、唐山に今朝たつ雲は日の本の神代に燒きし烟なりけり」と云ふ意味にも見なければならぬのてある、サテ話が橫道へはいつたが元へ戻つて、其の鹽官の齊安國師が一日侍者を喚び我がために犀牛の扇子を將ち來れと言はれた犀牛の扇子と云ふのは犀牛の角て骨を作つた扇子のことてあるとも云ひ、又は犀牛玩月の圖の書いてあつた扇子のことてあるとも云ふ、其れは何ても宜いが鹽官は侍者の僧が寢ても起きても怠たらず參禪三昧になつて居るやら居ないやらを試むるために、突然にコレコレあの犀牛の扇子を持てきてくれと言はれたものと見える、着語に葛藤を打すること、少なからず扇子を持ち來れなどゝ手綴いことを言ふて居る、其れよりは何ぞ

這箇の好箇消息に似かんやと抑へる、這箇といふは即ち向上宗乘の事てある、然るに此の侍者の僧は茫然として居たのか又は正直一片なのか侍者云く扇子破れぬハイ彼の扇子は疾に破れてしまふて御用に立ちません、此れも謂ゆる這箇を拈起して言を扇子の破れたのに寄せたのてあつたならば多少の味ひがあつたてあらうけれども、何うも此の侍者には其れだけの識見は無かつたものと見える、着語に可惜許ナニ扇子が破れたと言ふか其れは惜いことをしたと冷かし、イヤ好箇の消息本統に破れたとすれば其れも面白いと揶揄し、けれども一躰に這箇の扇子が破れるものてあるかナ妙なことを聞くことよと答めて什麼と道ふぞと一拶した、官云く扇子既に破れなば我に犀牛兒を還へし來れ此れを且らく理致を以て義解して見れば、既に其の相が破れ其の用が絶えたとしたならは其の本體本性は何うなつた、其れを一つ穿鑿して見ろと言はれたものとも見らるべく、極めて俗に言へは肉體は死だとした時に其の精神は何うなるぞとも聞えるのてある、着語に漏逗少からず餘りに慈悲が過ぎて醜いぞと抑へる、幽州は猶ほ自ら可なり最も苦きは是れ新羅、幽州は今の北京の地て新羅は今の韓國てある、此の語は支那の當時の俗に

其れは未だしも此れには困つたと云ふ意味の諺語であるそうな、即ち前の扇子を持てこいは未だしものこと今度の犀牛兒を遣し來れとは侍者も困つたらうと冷かすのであるけれども和尚犀牛兒を用ひて什麽か作さん其の樣なものを求める必要がないでは無いかと鹽官の機を奪ふ、侍者無對元來茫然の侍者和尚こゝに至りて閉口してしまふた、圓悟は果然、として無孔の鐵鎚到頭何の役にも立たないと罵しり、可惜許と殘念がる、風外老人は若しこれ當時鹽官の侍者であつたならば、國師が我に犀牛兒を還へし來れと言ふた途端に、何なりとも其處にあり合せた物を取て國師にわたす、國師が其れは犀牛兒で無いと言ふたならば、和尚眼花することなれ寢とぼけなさるなと言ふのであつたにと言はれた、サテ此鹽官と侍者との問答は此れまでのことであるが、後に投子の大同禪師が侍者に代りて謂ゆる代語を附けられた、即ち投子云く將ち出るを辭せず恐くは頭角全たからざらん犀牛兒を持てこいと仰せられるならば持てもまゐりましやうが、若し之を持ち出したならば頭角が欠けて畸形になつてしまいましやうよと云ふのである、ナゼかと云ふに今こゝて犀牛兒に譬へられるのは謂ゆる眞如法性とも涅槃妙心とも稱せられる所の眞理であるが、其れは人に持てこいと云ふべきものでも無けれは、又た人に持て往てわたすべきものでも無い、其れを強て受取り渡しすると云ふことになつたならは、其れはハヤ眞理の全分では無いことになるからである、着語に似たるとは似たり兩頭三面なるを爭奈せん全いとか全くないとか言ふだけハヤ本分に疵がつく也た是れ道理を說く作家の衲僧のやうて無いと抑へる、更に其後に至りて雪竇禪師が此の投子の代語に對して、雪竇拈して云く我は全からざる底の頭角を要す。投子は頭角の全たからざらんを恐ると言ふたが我は却て其の全たからぬ頭角が必要てある、何うぞ其れを持てきてくれと言はれたならば更に何うするぞと投子を抑へる一躰に這箇の犀牛兒は持ち出さるべきもので無い、其れを頭角全からざらんなどと言ふて人を誑らかすのが宜くない、若しも頭角不全の犀牛兒即ち不完全の本躰と云ふものがあるならば其れを持てきて見せろと、此れは中々強い掛け合かたてある、更に投子に代りて吾々お互ひも此れに對する答をなさねばなるまい、圓悟は何の用を作すにか堪えん千里の馬ても骨になつては用にも立つまいと言ひ、又將錯就錯賣り言葉に買ひ言葉と云ふ有樣ぞと言ふ、又石霜慶諸禪師も之

に代語を附けられた、石霜は前の八十九則にあつた道吾の弟子て門下に二十六員の龍象を打出したる名匠てある、其の石霜が彼の侍者に代りて云く若し和尚に還さば即ち無からん人々具足の犀牛兒を何うして貰方へお渡し申すことが出來やうぞ元來やりとりの無いものては無いかと云ふのてある、着語に什麼と道ふぞ有るの無いのと云ふも甚だ不都合ぞと抑へる然かし此の無の一字が鼻孔に撞着す本來無一物の祖意に契ふと贊嘆する雪竇拈して云く犀牛兒猶ほ在り其の無いと言はれたので始めて犀牛兒が今尚ほ健在てあることが分つた、着語に瞼その犀牛兒に觸れたならば頭角て突き殺されるてあらう危險なことよ、泊んど錯て認む然かし雪竇も其の犀牛兒を見そこなふたのてはないか、ナゼかと云ふにヤハリ在るの無いのと言ふて居るから、頭を收め去れ其の犀牛兒の頭角を出させないやうにして置くが好い、頭角を出せばハヤ第二第三に落つるてあらう、資福一圓相を畫して中に於て一の牛の字を書す此の資福如資禪師のことは前の第三十三則に出てあつた通り溈仰宗の嫡流の人てあつて常に輒もすれば一圓相を畫する癖のある人てある、一圓相といふは一つの眞ん丸な輪の形を書いて其中へ一つの牛の字を

書いた、此れが即ち國師の求める犀牛兒てあるぞと云ふのてあるが、前に風外老人が何たりとも其處に有り合せた物を取て國師に渡せと言はれたのも此の機合てある、結局道理を以て思量分別すべきことてはない、只今その機合一つに在るのてある着語に草藁拈出するを勞せず其のやうな古る臭い書の下書のやうなものを持ち出すには及ばぬぞと云ひ、又影を弄するの漢書にかいた牛ては役に立たぬと云ふ雪竇拈して云く適來什麼としてか將ち出さゞる其のやうな好い牛が居るならばナゼ先刻から早く出さなかつたと言ふ、其の實は雪竇全く資福に大贊成なのてある圓悟は金鍮辨せず眞金てあるやら眞鍮てあるやら分らないのてあらうと、雪竇の資福に贊成するのを抑へ、也た是れ草裡の漢ヤハリ本分の立ち場ては無いと何處までも抑へる、保福云く保福從展禪師のことは前の第二十三則にも出てあつた通り雪峰和尚の弟子てある、和尚年尊別に人を請せは好しと代語した、鹽官が侍者に向て我に犀牛兒を還し來れと言つた時に、ハイ尊師は御老年のことて何か老惫して御座る樣子てありますから、モー拙僧には侍者の役が勤まりませんから誰ぞ他の者を侍者になされて、其れから扇子なり犀牛兒なり御求めなるが宜しい

と、斯う言へば好かつたにと云ふのである、ナゼかといふに這箇元來他に隨て求むべきものでは無いからである、着語に僻地裡に官人を罵しる物蔭に居て高官の人を罵しるやうに、鹽官國師を痛く抑へつけたナと言ふ、着語に辛を辭し苦を道ふて什麼をか作さん侍者の役が勤まらないなどと骨を惜んで何うするつもりぞと叱る雪竇拈して云く惜む可し勞して功なしイヤハヤ永々の御苦勞も其れてお暇乞ては骨折の効もあるまい、這の事元來修行だの證果だのと云ふ勞苦を以て得らるべきては無い、人々分上無始劫來ゆたかに具つて居ることぞと云ふ意を示すのてある着語に身を兼て內に在り其う云ふ雪竇御前も餘計な御苦勞よ、乃至三世の諸佛も歷代の祖師も也た好し三十棒を與ふるに其の御褒美に打てやらう灼然實に雪竇の言ふ通りのことよと結局大贊成を表した

頌　犀牛扇子用多時（遇夏則涼遇冬則峻○人人具足爲甚不知○阿誰不會用）問着元來總不知（知則知合突鞠人好怪別人不得○也）無限清風與頭角（在什麼處○合向什麼處會○不向自己上合向什麼處會○天上天下○頭角重生○是什麼○無風起浪）盡同雲雨去難追（著天著天○也是失錢遭罰）雪竇復云。若要清風再復頭角重生（人人有箇犀牛扇子不用多時）問云扇子既破（破不壞付後店）還我犀牛兒來（也有二箇牛二箇○也好推倒禪床）時有僧出云。大衆參堂去（喊過後張弓○被衆笑知禍○前）雪竇喝云。拋鉤釣鯨鯨（遇道得三轉了問着總不知遇道得底）請禪客各下一轉語（遇道得鹽官猶在）問云扇子既破（破不壞）還我犀牛兒來（也有二箇牛二箇○也好推倒禪床）時有僧出云。大衆參堂去（喊過後張弓○被衆笑知禍○前）雪竇喝云。拋鉤釣鯨鯨（遇道得三轉了問着總不知遇道得底）請禪客各下一轉語（遇道得鹽官猶在）問云扇子既破（破不壞付後店）

犀牛の扇子用ふること多時人々具足個々圓成の犀牛扇子無始劫來朝な夕なに君と呼ばるれは應と答へるのも此の扇子、念佛まをして往生したいと云ふのも此の扇子、腹が空いたと云ふて飯を食ふのも此の扇子、佛を罵しり祖を呵するのも此の扇子、寢ても起ても此の扇子が休んだことは無い、朝々扇子を抱いて起き夜々扇子を抱いて眠つて居るのてある、圓悟は夏に遇ふては則ち涼く冬に遇ふては則ち暖かと云ふ、人々具足甚としてか知らざる此の語は次の句の下に在るが好いと思ふ、阿誰か會て用ひざる斯んな着語は無くても好い、問着すれは元來總に知らず其の扇子の體相および其の功如何と問はるれは元來總べて知らず、此の總の字の中には三世の諸佛も歷代の祖師も皆こもつて居る、只々鹽官の侍者が無對てあつたばかりては無い、維摩は默然、釋尊は拈華迦葉は微笑、其れもハヤ第二第三じや、是に至

りては田舍の念佛三昧て居る老媼と同じく只々不思議と信ずるより外は無い、其れを利口そうに科學てあるとか哲學てあるとか云て、知つたらしく言ふたり悟つたらしく言ふたりするのは、皆其の實は僅に一部分を知覺したまてのものてある、東坡居士は此の間の消息をもらして廬山の眞面目を識らざるは只身の此の山中に在るに緣ると言ふた圓悟は知ること、は則ち知る會すること、は則ち會せずと雪竇が知らずと言ふた語脈を截斷してナニ知れぬことがあるものか只會することが出來ないのよと要する所は其語句に轉ぜられないやうにと云ふまてのことてある人を瞞ずること莫くんは好し總に知らずと他人の事のやうに言ふが其う言ふ御自分は如何て御座る人を馬鹿にしなさるなと言ふたやうなアンバイ也た別人を怪むこと得ず他人の事ばかり言ふはけには往くまいと此の語も贅言てある、此れて本則の問答は頌し了つて、あとは投子石霜等の代語の頌てある、限り無き清風と頭角と此れは扇子と云ふに因みて清風と云ひ、犀牛と云ふに因みて頭角と云ひ、投子石霜資福保福の四大老が思ひ〳〵に宗乘を擧揚せられ、蘭菊梅竹各々其の美を擅まゝにする有樣を無限の二字を以て稱讃して、少しも其間に褒貶を加へな

い、着語に什麼の處にか在る其の清風とか頭角とか云ふのは其れは何てある了々として見るに一物なしと云ふ境界てあるに其のやうものが何處に在る自己の上に向て會せずんは什麼の處に向ては會せんと此れは門下後學に向ての警誡天上天下其の清風も頭角も宇宙に偏滿して居るぞ頭角重ねて生ず投子は頭角の全からざるを恐ると言ふてあつたが此の雪竇の論證て見れば頭角が全くなつたと見えるとしやれ是れ什麼ぞと拶着し風なきに浪を起すと雪竇の葛藤を抑へる盡く雲雨の去て追ひ難きに同じ彼の四大老が限り無き清風を起し頭角を現はしたけれども其れが皆思量分別に涉るとの出來ない沒蹤跡の消息てあることは恰かも朝雲暮雨の忽ち生じて忽ち散ずるやうなもので亦た只不思議と仰ぎ見るの外は無い圓悟が蒼天蒼天それはハヤ手のつけやうの無い悲いよと讃歎する也た是れ失錢遭罪四大老の代語大きに御苦勞てあつたが其の効もなく雲雨の去て追ひ難きに同じなどと言はれては御氣の毒なよと此れも本分の風光を讃歎の言葉てある此れて全たく頭は濟んだのてあるが以下は或時雪竇が上堂の因みに此の公案及び自作の頌を拈提せられて門下の衲子に參究せしめられた話を附錄せら

れたのである、雪竇復た云く若し清風再び生じ頭角重ねて生せんとを要せば、請ふ禪客各々一轉語を下せ、彼の四大老が此の公案に就て限り無き清風を起し頭角を現はしてあつたのを、今日現在こゝにて復た其通りの景況を見やうと云ふには諸禪客一同に各々彼の侍者に代りて一轉語を下して見ろ、諸人は果して能く清風頭角を實現させるとが出來るかと一同に拶問せられた、圓悟は還て道ひ得て三轉し了る一轉語のみか雪竇はハヤ三轉し了つたては無いかと言ふ、三轉と云ふは初めに此話を提起したのと次に此話を頌したのと又今此話を拈弄するのとの三段である、鹽官猶ほ在り今また此處で拈弄する樣子は鹽官國師が出て來たやうてあるぞと言ふのてある、そこて雪竇が鹽官に代りて大衆に問て云く扇子既に破れなば我に犀牛兒を還し來れ、着語に也た一箇半箇あらん斯う問ふたならば雪竇門下にも一人か二人か此公案を捌き得る者が無いてもあるまいと言ひつゝ、更に咄と言て雪竇の此の提唱を根本から咄散してしまふた、也た好し禪床を推倒するに誰ぞ一入摯直に雪竇の椅子を引くり反す者がありそうなものじや、時に僧あり出て云く大衆參堂し去れ、此の參堂し去れと云ふことは人々自分の部屋へ皈れと云ふほどのことて、上堂說法などの濟だ時に主人から一同に申しわたす言葉てあるから、今日の主人公たる雪竇が言ふのならは當然てあるけれども其れを門下の一人が飛び出してサー〳〵一同に參堂してしまへと言ふのは全たく主客顚倒したので雪竇は一同に各々一轉語を下せと云ふのを打ち消してモー用は濟んだと云ふたアンバイてあるが、此れが果して如何なる機鋒てあらうぞ、圓悟は賊過て後の張弓と云ふ、前に雪竇が清風再び生し頭角重ねて生ぜんことを要せばと云ふた途端に、其のやうな要は無いと云ふのて直に其の禪床を推倒してやれば好かつたに、今頃になつて參堂し去れなどと云ふてもモー遲いと抑へるのてある、けれども是れて雪竇は舘を奪却せらる主人の位地を引くりかへされた、然かし前は村に構せず、後は店に迭せず互ひに主ともつかず客ともつかず双方不具になつた、然るに雪竇喝して云く鉤を拋ちて鯤鯨を釣る箇の蝦蟆を釣り得たりと言ひつゝ便ち下座してしまうた、此の公案を香餌にして鯤鯨の如き大魚を釣らうと思ふたに、斯のやうな主人の椅子を奪ふやうな蝦蟆一つ釣つた、サテ〳〵笑止なことよと言ふて上堂の席を下られたと云ふのてある、此れは雪竇が此の僧を褒めたのてあらうか叱

つたのであらうか、更に參せよ三十年である、先づ第一に鹿錦と蝦蟆と是れ同か是れ別かとも參して見ねばなるまい、圜悟は他の悉慶地なるとを招き得たり一躰に雪竇が除計なとを言ひ出したから斯のやうなとになつたのである、今頃になつて蝦蟆だの鹿錦だのと言ふても賊過後の張弓て遲い〳〵、此僧の將に出てんとするに當りて、忽ち下座してしまへば好かつたにと結局都べての葛藤を勦絕し了つた。

第九十二則　世尊一日陞座

垂示　動絃別曲千載難逢見兎放鷹一時取俊總一切語言爲一句攝大千沙界爲一塵同坑同生七穿八穴還有證據者麽。試擧看。

絃を動すれば曲を別つとは能く音樂に精通した人てあつたならば、筆にもせよヴアイオリンにもせよ、只ピンとかペンとか機に一絃を動かすのを聞くと同時に、直にハヤ此れは何の曲を奏するのてあると云ふことの辨別がつくはずのものてある、其れが謂ゆる眞の知音と謂ふのて、千載にも逢ひ難し中々容易に其人を得がたい、又兎を見て鷹を放つと此れは兎狩をする話て、山中をあさつてあるく間にチラリと兎の姿が見える途端、間に髮を容れるすきまも無くズーッと鷹を放つてやる、其の機合の敏捷さは一時に俊を取る俊といふは俊發とか俊爽とか續いて鋭敏なる委先づ斯う二つの譬喩をあげて置て次に一切の語言を一句と爲す一切の語言と云ふは釋尊一代五十年間の說法謂ゆる八萬四千の法門、支那の唐代に於てハヤ漢譯の經典ばかりても五千四十八卷と稱した都べての言教を、唯だ一句に約めては四十九年一字不說と言はれたこともあれば更に一枝の金波羅華に托せられたこともあり、臨濟は一喝となし德山は一棒となしたけれども、皆ては維摩の一默となつたこともある、畢竟一默て說き足らぬても無ければ一切の語言を以て說き盡せそのても無い、更に大千沙界を攝して一塵と爲すと言ふたは前句に對を取て語を巧みにしたまてのこと、其の意味は全たく同じことて一切語言が多いても無く一言一句が少いても無いが如く、大千沙界が廣いても無ければ一微塵が小いても無いから、微塵を破りて大經卷を出だすこともあれば須彌山を芥子の中に納れる、

こともある、サテ是の如き境界に同死同生し手を携へて七穿八穴と自由自在に働けるに至りて始めて彼の絃を動すれば曲を別つの知音とも謂ふべきてあるが、這で證據の者ありや其れは世尊の陞座に文殊の白槌が誠に好い證據てあると云ふので試みに擧す看よと本則を提起した。

本則 擧世尊一日陞座（衆主俱失○不二是一向漏一逗二）文殊白槌云、諦觀法王法法王法如是（衆一人莫向二衆人一說上說ヨ向衆人一說ヨ殺人一○打レ鼓界二磁一證二相逢開一合一家）世尊便下座

世尊一日陞座この陞座といふことは登壇といふも同じことて、今日に於ても禪宗の師家は時々上堂といふ法式を行ふ、其時に自分が全く佛の地位に立つのてあるから、常には本尊の佛像を安置してある所の須彌壇の上に登つて法を說く、其れを常には上堂と云ひ又は陞座と云ふ、此の陞座と云ふこともあるのてある乃ち或日のことてあつたが釋尊が例の如くに陞座なされて將にお說法をお始めなさらうと云ふ所てあつた、着語に賓主俱に失す主といふは釋尊て賓といふは其の席に集まつて居たお弟子がたのことてある、一躰に眞實の法といふものは他に向つて說き得らるべきものでも無ければ、又他人から聞かせてもらうべきものても無い、然るに法を說からと云ふて陞座する者も失なれば、其れを聞かうと云ふて壇下に集つて居るものも失ては無いか、然かし是れ一回漏逗するのみにあらず此れは今度に限つたことては無い、是れまて四十九年三百餘會の說法まことにハヤ漏逗だらけの釋尊よと罵しる、文殊白槌して云く諦觀法王法法王法如是、世尊が上堂して說法の座にお就きなされたのを見るやいなや、文殊師利菩薩がスーッと進み出て直に白槌をしたと云ふのてある、此の白槌と云ふことは前にもあつたが、今ても禪林に於て大勢の坊さんたちが何ぞ報告をすることてもあれば彼の槌と申して木の短かくて太い柱を八角に削つたものを下に据えつけて置て、又別に小さくて手の平に握れるほどて其れと同じやうな形に削つた砧といふ木を手に持て、其の下の木をカチリと打ち鳴らして一同に注意を與へ、其れから何なりとも報告するのてある、其の事を秉も云ふのてある、サテ又此上堂陞座の時には必らず其の陞座する師家に勝るとも劣ないほどの高德の人が白槌師と云ふ名を以て謂ゆる白槌を勤めるのてあるが、

最初陞座して說法を始める時には白槌師が即ち槌を三聲打ち鳴らして、法筵龍象衆當觀第一義と言ふて更にカチリと一聲鳴らすのである、即ち其時の報告に法筵の龍象衆といふは其席に列なつて居る衆僧を龍や象に比するのは尊敬の意味で、將に第一義を觀ずべし佛法中の最上高尙なる第一義諦を觀念して是れから說かれる所の說を聽聞し、且つ疑ふ所もしくは研究を要する點があらば其れをお問ひ申すが好いぞと云ふのである、そこで愈々說法があり其れから各自に問答商量等があつてモー此れて法式が濟だと云ふ時になつて、更に白槌師が進み出て例の如くカチリ〳〵と槌を三聲鳴らして、今度は今こゝで文殊が言ふた通りの諦觀法王法、法王法如是と證明の辭を陳べるのである、即ち諦らかに法王の法を觀ずれば法王の法は是の如しと云ふのである、然るに今は世尊が陞座なされたばかりで此れから說法にお取り掛りなさらうと云ふのであるから、乃ち前に申した法筵龍象衆當觀第一義と云ふべき所を、文殊は其う言はないでモー說法及び問答の濟だ後に證明として言ふべきことを言ふてしまうたのである、此れは決して文殊が間違へたのではあるまい、戲れたのでもあるまい、畢竟何としたことであらうぞ、圜悟は一子親く得たりと評した、サスガに世尊の嫡子たる文殊だけあつて、不說の法を不聞に聞き了りて、ハヤ此れて上堂は濟んだぞと云ふたアンバイ如何にも感服の外は無いとの讃歎である、世尊便ち下座と世尊も亦た一言の說法も無しに、文殊の白槌を聞くやいなやスーッと下座してしまはれた、只此の陞座し且つ下座する間に百千無量の法輪を轉じ盡されたのである、吾々お互にも朝な夕なの起居動作皆悉く無盡の法を說きつゝあるのであるが、其れを自から知らずに居るから叱られるのである、圜悟は愁人は愁人に向て說くこと莫れ愁人に說向すれば人を愁殺す眞に知音と知音の消息は不言の間に在るので、其れと同じやうに苦辛した者でなくては其味ひは判らぬ、皷を打ち琵琶を弄し相逢ふ兩會家よく調子の合つた名人と名人の三曲を聞くやうであるとの讃歎である。

頌 列聖叢中作者知（莫謗釋迦老子好○還佗臨濟德山○千箇萬箇中難得一箇半箇）法王法令不如斯（隨他走底如麻似粟○三頭兩面○灼然能有幾人到這裏）會中若有仙陀客（就中難得伶俐人○文殊不是作家○闍黎定不是）何必文殊下一槌（更下二槌又何妨○第二第三槌總不要○當機一句作麼生道○嶮）

列聖遵守作者知らば、法王の法令斯の如くならざらん、此の頌は世尊未だ陞座せざる以前に向つての立ち場から見られたのである列聖と云ふは釋尊門下の大菩薩たち大羅漢だち八萬の大衆と云ふが其中にも常隨眷屬近の弟子千二百五十人と云ふ、若し其中に眞に作家たる衲僧が居てあつたならば世尊が陞座なされたり文殊が白槌してから又下座したりして居るやうな餘計なことをするにも及ばないのであるにと云ふのである、何でも法の本體の上から見れば皆この通りに違ひない、ワットが發明しない以前に於て蒸汽の力は宇宙間に充滿して居る、フランクリンが生れない前から電氣は世界に働いて居たに相違ない、此の法が無始劫來人々分上ゆたかに具つて居ることも勿論である、只それを自覺させやうと云ふために佛祖は百千萬言を費やして說法もすれば、未だ一言も發せざるに終結の白槌もするのである、程度には色々差違があつても念佛と云ひ題目と云ひ坐禪と云ひ觀法と云ふ、皆只魚兎を得るまでの筌蹄に過ぎぬのである、既に魚兎を得た上には其の筌蹄に用が無いと同樣に念佛も題目も坐禪も觀法も乃至陞座も白槌も皆去年の曆のやうなものである、着語は釋迦老子を謗すること莫くんは好し八萬の大衆の中に一人も作家の漢がないなどと言ふては其の師たる釋迦老人の恥辱にならうぞ、一躰に其の作者とか云ふものが何の用に立つのかと言ふたやうなアンバイ、其の眞に作家とも稱すべきものは他の臨濟德山に還へす彼等の棒喝が眞に法王の法令よ、然るに其の眞の作者たる者は千箇萬箇中に一箇半箇を得がたきものよと古今にかゝる他に隨て走る底は麻の如く粟に似たり昔も今も幾らもある、然かし列聖とも言はれる程のものならば法王の法令を知て居るはずであるに其れが知らぬと云ふは三頭兩面の妖怪ぞと抑へ灼然として能く幾人ありてか這裡に到ると此れは雪竇の言はれる通り實に其人は少いとの贊成である、會中に若し仙陀の客あらば此の仙陀と云ふことは具さに云へば仙陀婆と云ふ梵語て此の一語に四種の義がある、即ち鹽のことも仙陀婆と云ひ、器のことも水のことも馬のことも仙陀婆と云ふ、其事に就て涅槃經の菩薩品に面白い譬喩を說かれてある、或る國王の近臣に甚だ怜悧敏捷な人があつた、時々國王が仙陀婆を持てこいと言はれる時に、其の求められるのが鹽てあるか器てあるか水てあるか馬てあるか通常の人には判らないから、更に問ひ返さなければならぬのてあるが、其人だけは決して間違へた

ことが無いと云ふ話なので、眞に俊發の機鋒を具へた者であつたならば第二言を聞くには及ばぬ、一言一句一機一境の下に直に千萬重の要關をも飛び超えてしまふはずのものである、即ち今も其れほどの恰悧の漢が居てあつたならば何ぞ必ず文殊一槌を下さん文殊の點撿をうけない以前に、恰も前則の一僧が雪竇の機を奪ふて參堂し去れと言ふたやうな働きが無ければならんのであるぞと言ふ着語に中に就て恰悧の人を得がたしと云ふはモハヤ贅語である文殊も是れ作家にあらず世尊陞座の後に於ての白槌は遲い〳〵闍黎も定て不是ならん雪竇もやはり後れたぞ、更に一槌を下すも又何ぞ妨げんコヽて文殊の一槌は萬々已むを得ぬ所である然し第二第三槌は總に要せず此れは前句の注脚のやうて後人の妄添かと思ふ當機の一句作麼生か道はんと座下に拶着し、瞼わづかに擬議にわたれば喪身失命するぞと警誡せられた。

第九十三則　大光師作舞

本則　擧。僧問二大光一。長慶道。因齋慶讃意旨如何。大光作レ舞。雪竇頌出。若從前惣慶來。僧禮拜。又惣慶去也。是則是只恐錯會。光云。這野狐精。此恩報難。僧作レ舞。依レ樣畫二猫兒一。果然得二始終一。光云見箇什麼便禮拜。也好一抄。須二辨過一。

此の一則には垂示が無くて直に本則である、僧あり大光に向ふ大光といふは潭州大光山の居誨禪師と曰ふて石霜の法嗣であるから青原下に於ける達磨十二世の法孫である長慶道く齋に因て慶讃すと意旨如何と云ふの間である、長慶の話は前の第七十四則にあつたので、金牛和尚が毎日齋時になれば飯桶を舁で僧堂の前に至りて舞を作し菩薩子喫飯せよと言はれるのが常例であつたと云ふことに就て、後に長慶和尚が人に答へて大に齋に因て慶讃するに似たりと言はれたことがある其の意旨を如何心得ましやうぞと此僧が大光に問ふたのである、着語に重光かつて金牛に依て光を放つたのが今又重ねて光を放つ、這の漆桶と此僧の人に向て問ひまはるのを罵しる、然しながら妨けず疑着するを疑があつて決しられなければ致しかたも無い間はずんば知られずず人に問ふも亦た已むを得ぬかと筆に任せて抑揚する、大光は舞を作す彼の金牛と同道唱和の姿てある、此れ何の道理てあら

うぞ人の爲めに濟度の方便を廻らすことは千變萬化て皆之を神通妙用と名くるのてある、着語に人を瞞殺すること莫れ其のやうなことをして見せると虛頭な奴等が直に眞似をしますぞ酋に依て從前恁麼にし來る昔の金牛も今の大光も相變らず其のやうなことばかりして居るか僧禮拜す凡そ斯ういふ處て禮拜するといふのは何時ても其の答話に於て大悟徹底した場合に感謝の意を表するのてある、此僧は大光の舞を見て直に禮拜した果して何の所得があつたのであらうか、着語に又恁麼にし去るや何の機鋒もなく只禮拜するとは意氣地の無い仕方てある、是は則ち是なれども只恐くは錯て會せしならん場合に依て禮拜を以て他の機鋒を奪ふこともあるが其れならば面白いけれども其うてはあるまい光云く箇の什麼をか見て便ち禮拜すると穿鑿にかゝつた、也た好し一拶するに何うも打ち棄てゝは置けぬ、そこが大光の大光たる所てある、須く辨過して始て得べし彼の禮拜の眞僞を子細に勘檢して見なければなるまい僧舞を作すと果して大光の影を逐ふて人眞似をし始めた着語に、樣に依て猫兒を畫く透き寫して形を似せただけのことと、果然として錯て會すると云ひ光影を弄するの漢と云ひ重々に抑下した光云く這の野狐精只この一句を愛するために雪竇が此の公案を頌したのてあると云ふことてある、此の妖怪め人眞似をしやがつてと怒鳴りつけたアンバイ、此れは此の僧を褒めたのてあらうか、罵しつたのてあらうか、圖悟は評唱の中に只管に舞を作して遞相に恁麼ならば幾時に到てか休歇し去らん、大光いはく野狐精と此語金牛を截斷すと言ふてある、乃ち此の野狐精と言ふた一語て只此の僧の舞を截斷したばかりては無くて、最初に其の僞を作つた金牛までも截斷したのてあると云ふのてある、要は都べて如何なる事ても其れに住着しては皆悉く地獄の業因となる、況んや美食も飽人の喫に當らずて如何なる御馳走ても滿腹の人の口に要は無いに於てをやてある、着語に此恩報じ難し實に大光の斯う截斷せられた爲人の恩は廣大てあると言ふ。

頌　前箭猶輕後箭深　百發百中○向二什麼處一用　誰云黃葉是黃金　且作レ止レ啼○暗二得小兒一也無用一途一　曹溪波浪如相似　善二泥團一漢有二什麼限一○依レ樣畫二葫蘆一兒○放二行一路一　無限平人被陸沈　過ヲ着活底人ニ○當ル衆國一衆ニ頭不一得

前箭は猶ほ輕く後箭は深し大光が初めに舞を作した機鋒は未だ溫和であつたが、後に這の野狐精と叱りつけて金牛の脚跟までをも截斷したに至ては、實に其の活機の孤危峻峭さ景仰に堪えぬ、圓悟も百發百中いづれの箭にも空發は無いと稱揚した、什麼の處に向てか廻避せん斯う百發百中に射つゝけられては遁げ場が無い、誰か云ふ黃葉是れ黃金と此れは涅槃經の中に說かれてある譬喩で、小兒が啼き悲む時に父母が楊樹の葉の黃色になつたのを見せて、此れは黃金と云ふて賺かせば、其の黃葉を黃金てあるが之を與へるから啼くな啼くなと言ふて賺かせば、其の黃葉を黃金てあると思ふて啼き止むやうなものてあると、如來度生の方便を示されたことがある、今も其の通りのことで金牛が舞を作したも大光が又舞を作したも畢竟は兒啼を止るの黃葉に過ぎぬのてある、其れを黃金のやうに思ふて我も亦た舞を作さんと、舞を作すのが向上宗乘の事のやうになつては謬妄とも錯誤とも申しやうの無いことになる、尤も是れは舞には限らぬ都べての言句伎倆皆然りてある、圓悟は誰か云ふ黃葉是れ黃金と云ふに答へて且らく啼を止ることを作すと答へ、又小兒を瞞じ得るも也た用處なしと抑へる、曹溪の波浪如し相似たらば限り無き平人も陸沈せられん甲が舞へば乙も舞ふ丙が喝すれば丁も喝すと云ふやうに、若しも曹溪所傳の禪宗が同軌同轍て機變展轉の活用が無いやうなものてあつたならば、天下の參禪學道の人が皆平地て溺死してしまふてあらうと言ふ、着語に其の人眞似をする者を叱りて泥團を弄するの漢什麼の限りかあらんと云ひ、樣に依て猫兒を畫くと抑へ一路を放行す只一筋道の外に別路のあることを知らないかと彈呵する、又活底の人に遇着すとは雪竇の此の勘辨を稱揚し、天下の衲僧を帶累して摸索不着ならしむとは世に似せ者があるために多くの人が一言に雪竇の罵倒を受けるのてあると云ひ、遂に闍黎を帶累して出頭することを得ざらしむる雪竇御自分にも此れが爲めに迷惑するてあらうぞと言ふ。

第九十四則　楞嚴經若見不見

垂示　聲前一句千聖不傳面前一絲長時無間淨躶躶赤灑灑露地白牛眼卓朔耳卓朔金毛獅子則且置且道作麼生是露地白牛。

聲前の一句は千聖不傳、心に思ふことが其れが聲に發して語となり句となる、然るに今は未だ其の聲に發せざる以前の一句と云ふので、其の實は句と名くべきものでは無いのであるが、毎度申す如く禪宗は尤も詩作の盛んに行はれた唐朝の時代に當りて、詩句を以て宗乘を擧揚したものであるから、其の道の達人を作者と云ひ作家と云ひ、又其の理想をは那一句と云ふたりする所から、今も聲前の一句と云ふ言葉も起つたのであるけれども、其の實は謂ゆる向上宗乘の眞際を言ふのである、其れは本より千聖すなはち諸佛も諸祖も各自に開發するもので、他から傳はるべきでも無ければ他に傳へ得られるものでも無い、面前の一絲と云ふは吾人朝な夕な現實の上に於て仕ると作すと、皆一筋の絲に引かれるやうに眼に物を見るにつけ耳に聲を聞くにつけ直にチラリと一念心の動く姿、此の初一念は長時無間である、長時無間といふは無始劫來未來永劫暫時の間斷もなく、謂ゆる無限の時間を通貫して思量分別に渉らず花を見ては花と知り月を見ては月と知る、釋迦達磨に在ても其の通り吾人に於ても其の通り地獄の衆生に於ても其の通り、勝劣もなく增減もなく宇宙の大精神そのまゝの現成である、淨躶々赤灑々露地の白牛、淨躶々と云ひ赤灑々と云ふは皆宇宙の眞相が平等一相にして明鏡の一點の曇りなきに似たる姿、露地と云ふは平等一齊と云ふ意味の俗語であるけれども、今は都べての塵垢を掃ひ盡したる立ち場を謂ふので、或は常寂光土とも名け又は密嚴國土とも華藏世界とも或ひは極樂淨土とも名らるゝ處のことである、白牛と云ふは他の權方便の敎を羊や鹿に比して法華經の一乘實敎を牛に譬へ而も其の牛が無垢淸淨の白牛であると云ふのが、謂ゆる法身の佛陀の姿である、眼卓朔、耳卓朔、卓朔と云ふは卓立と云ふも同じ意味で、犬にせよ猫にせよ眼を逆か立て耳を聳やかす時に其の俊發敏活なる姿が見える、況んや今は金毛の獅子の眼卓朔耳卓朔したるが如き怜悧活達の機は則ち且く置く、其れは別問題として置て、且く道へ作麼生か是れ露地の白牛謂ゆる淨躶々赤灑々たる一乘圓頓の實相、而も敎家の所談のやうに淨土だの法身だのでは濟ませぬぞ、サー何う之を處分するぞ。

本則 擧楞嚴經云、吾不見時。何不見吾不見之處。（好箇消息○用見作什麼○釋迦老子漏逗不少）若見不見、自然非彼不見之相。（咄○有甚閑工夫○不可敎山僧作兩頭三面去也）若不見吾不

見之地（向升慶盛云去也○咄○自然非物（接云頭二字慶○爭奈古人不肯承當云即銀下自家看取○通合慶）云何非汝（說下說我總授也交下汝○打云道見云釋迦老子慶○爭奈古人不肯承當云即銀下自家看取○通合慶）

楞嚴經に云く、此の楞嚴經と云ふは經題を具さに云へは大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經と云ふ恐しい長い表題の經文て、唐の神龍元年に天竺の沙門般剌密帝といふ人が飜譯して十卷にしたのてあるが、其の文章は房融と云ふ儒者が手傳つたので、史記評林の惣評やらにも楞嚴と維摩とは文の鬼神なるものと評してあつたと思ふ、此の經の成立つた最初の原因は釋尊の俗緣ては從弟てあり法緣ては三十年間常隨昵近したと云ふお弟子の阿難尊者が摩登伽と云ふ婬婦の魔術に罹つて已に戒體を破らうとしたのを、釋尊が文殊に命じて之を救はせられた後に、眞實の修行が足らないからてあると云ふので、非常に御深切な御敎誡のあつたのが即ち此の楞嚴經てある、サテ今こゝへ雪竇が提起せられた文は其の第二卷にあるので、委しく之を講するには楞嚴經の肝要なる所を大略話さねばならぬことになるから、一朝一夕のわけには往かぬに依て心ざしのある人は之を緣にして

楞嚴經を研究して見るが宜しい、凡そ多くの經典の中にも楞嚴だの圓覺だの維摩だのと云ふ經文は昔から尤も多く世間の學者に歡迎せられたものてある、今こゝに引かれた文の前に釋尊が阿難に向はせられて、阿難よ是の諸の近遠の有らゆる物の性は復た差殊なりと雖も同く汝が見精の清淨にして竭る所なり、則ち諸の物類には自つから差別あるも見性は殊なること無し、此の精妙の明は誠に汝が見性なりとお敎訓があつて、要する所は吾々お互ひ誰にもせよ眼に物を見る、其見ると云ふ性の上に於て法性平等の眞理を示されるために、彼の客觀の見られる物は千差萬別てあつても、見ると云ふ主觀の方に於ては誰れ彼れの差別が無い、佛の見るのも衆生の見るのも平等一齊てある、其れが即ち汝の眞性てあるぞと云ふことを訓誨せられた、其の語につゞいて尙ほ若し見是れ物ならば則ち汝も亦た吾が見を見る可し、若し同く見る者を名けて吾を見ると爲さは、と云ふ語があつて其れから今の本則になつた文に續くのてある、然るに此の若し見是れ物ならば則ち汝亦吾の見を見る可しと云ふ語が頗る判りにくいのてあるが、此れは阿難が曾て見の性と云ふものも彼の見られる物の方に屬して、客觀の物に種々の差別があるやうに、

見の性にも各自差別があるてあらうと思ふて居る、其れを今釋尊が御證しなさるのてあるから、若しも其の見と云ふことをも亦た彼の見られる物に屬してあるとしたからは、佛が今何ぞ一つの物を見られる時に其方も同時に其物を見れば、其の物と一處に佛の見と云ふものをも其方が見ることが出來るてあらう、且つ又見が已に物に屬してあるとすれば其の反對の不見と云ふことも亦た物に屬して居るてあらう、若し同く見る者を名けて吾すなはち佛の見をも見るとするならば吾が不見の時に何ぞ吾の不見の處を見ざると詰り問はれたのてある、モー一つ前に溯ぼりて云へば一躰に此の見の性と云ふものは眼て見る見ないに拘はらず其の本性は誰にも何時ても具つて居るものてあるから、例へは盲人が何も見えないと云ふのは其れが肉眼て物を見ないと云ふだけのとて、其れて見の性が無いとは言はれぬ、そこて初めに阿難が釋尊に其方は見の性は如何なるものてあるぞと問はれて、ハイ暗い處は暗いと見る明るい處は明るいと見て居りますと言ふた、そこて釋尊は其れならば暗い處は暗いに還へし明るい處は明るいに還へしてしまふた時に何が見える、若しも其れては何も無いと云ふなら其れは虚空といふものてある、

其の虚空をも虚空に還へしてしまふたならば、モー還へすものはあるまい其のモハヤ何も他に還へすものの無くなつた處が即ち汝の眞性てあらうがと云ふ意味の御證しから、此の見の性の研究が此處に及んだのてある、着語に好箇の消息この用ひて什麼をか作さん已に永嘉大師も一法を見ざる即ち如來と言ふたのては無不見の處をナゼ見ないと佛の仰せられたのが嬉しいと云ふのてある、一躰に見をいかゞれども斯のやうに說き過ごされては釋迦老子漏逗少なからずと佛を咎める、若し不見を見るといはゞ自然に彼の不見の相に非ず、若しも見と云ふことが物に屬すと云ふならば物を見ると同時に其見と云ふことをも見るはずてあるのみならず其れと同じく不見と云ふことをも見られるわけてあるに其れはナゼ見えないぞと詰られたお言葉に續いて、若しも亦た其の不見の處を見ることが出來ると云ふたならば、ハヤ其れは不見の相と云はれぬてはないかと仰せられた、着語に咄と佛の饒舌を叱る、甚の閑工夫かあらん何を詰らんことを言ふて居るぞと重ねて抑へる、山僧をして兩頭三面と作し去らしむ可からず見ると云ふたり見ぬと云ふたり圓悟は其樣な御相談を眞平御免かふむると排斥する、若し吾が不見の處を見

ずんば自然に物に非ず、已に不見の處を見ることが出來ないとしたならば、見の性は物に屬したものて無いと云ふことが判るては無いかとの御教訓てある、着語に什麼の處に向てか去る斯う責めつけられては逃げ場が無からう、鐵橛に釘つに相似たり此の說きつけかたに少しも隙が無い咄と更に其の說法を排斥する、牛頭を按して草を喫せしむ此れは前にもあつたが殺された牛の頭ばかりのものに幾らが如何ほど御心配なされても阿難に悟れる者て無いと云ふのてあるが、風外老人は此の着語を取らぬと言はれてある、更に什麼の口頭の聲色をか說かん元來自悟自覺すべきことを何のために口を酸くして說き聞かせられるのぞと抑へる、どこのつまり云何ぞ汝に非ざらんと此の一語が實に肝要なので、雪竇が楞嚴經を引いて頌を作つたのも畢竟只此の一語が目的てあるのてある、汝と云ふは汝の自性と云ふことで謂ゆる眞我とか大我とか名けられ、或は佛性とか主人公とか這箇とか那一物とか呼ばれるものゝことてある、都べて見るにつけ聞くにつけ客觀の事物を逐ふて他鄉に流浪するのが常人の病てある、今其れを自己に反省して其の眞性を開悟させるのが佛の大慈悲てある、圓悟は、你と說き我と說く總に沒交涉元來自他を離れる處に於て我てあるのを汝てあるのと言ふは甚だつまらぬと抑へる、打て云く釋迦老子を見るや斯のやうな說法の言葉の上に於て眞の釋迦を見ることは出來ぬぞ、眞に釋迦老子たる所以を今我が打た端的に於て何う見たぞと一拶して、更に爭奈せん古人の肯て承當せざることを惜いことに阿難は此れても悟られなかつた、打て云く脚跟下自家に看取せよ昔の阿難のことばかり見て居てはならぬ、還て自ら見ずや諸人の脚跟下悉く是れ光明遍照十方世界ては無いか。

頌 全象全牛曾不殊、今要見黃頭老、從來作者共名模、刹刹塵塵在半途。

此の頌は圓悟が評唱の中に、雪竇敎眼を出てゝ頌す、亦た物をも頌せず亦た見と不見とをも頌せず、直に只見佛を頌すと言はれてある全象と云ふは涅槃經にある譬喩て、或る王が多くの盲人を集めて大象を摸らせた、各々象の一部分を摸つて見て、

牙に觸つて見た者は象は蔗蕨根の如くてあると言ひ、耳に觸つた者は箕のやうだと言ひ、頭に觸つた者は石のやうだと言ひ、鼻に觸つた者は杵のやうだと言ひ、脚に觸つた者は木臼のやうだと言ひ、脊に觸つた者は牀のやうだと言ひ、腹に觸つた者は甕のやうだと言ひ、尾に觸つた者は繩のやうだと言ふ、皆その象を離れて居ないけれども悉く全象を見ることが出來ぬ、一切衆生の全く佛性を見ることの出來ぬのも之と同じやうなものぞと云ふのである。全牛と云ふは莊子にある話で包丁といふ人は牛の料理をする名人て、刀を振つて牛を切り剖く時に只その心のまゝに豆腐を切るが如く大根を切るが如く眼中に全牛を見ないと云ふ話、其の全象を見ると云ふも都べて其の道の堂奥に達したことのやうてはあるが、其の見るの見ないのと言ふ所が即ち醫殊ならずてある、醫と云ふは眼病のことて眼病の人が有りもせぬのにチラ〳〵空中に花のやうなものを見たとか見ないとか言ふのと何の差別があるぞと抑へた、着語に半邊の瞎漢とあるが此の語は無いが好いと云ふことてある、次に半開半合已に見と云ひ不見と云ふからには設ひ全象も全牛も皆半分だけのことよ、扶羅摸壁して什麼をか作さん盲人が垣根に寄り添ふたり壁を撫てたりするやうなことをして何の證がある、然るに雪竇が醫不殊と、一刀兩段せられたは痛快てある、從來作者共に名摸す昔も今も見とか不見とか自とか他とか色々の名をつけたり樣々な形を想像したりして皷に詰らぬことぞと罵しる、其の從來名摸し來つた連中は西天の四七二十八代唐土の二三六代其他に天下の老和尚たる麻の如く粟に似たるほど多くある、イヤ猶ほ自ら少くこと在り雪竇御自身がぬけて居るぞ、如今黃頭老を見んと要せば黃頭老と云ふは釋尊のことて、有り難たそうに言ふときには金色だの金身だのといふが禪宗ては黃面の老子と云ふことが多い、其れを今は黃頭老と云ふのてある、即ち其の釋迦其人を見やうと云ふなら見の不見のと云ふやうな間にウロついて居て見られるものては無い、着語に咄それを見て何にする、這の老胡あの天竺の老耄を何のために見んと要するや、瞎漢你が脚跟下に在りウム盲目奴それ釋迦が貴樣の脚下に居るては無いか、どこを遠方さがして居るぞ、剎々塵々半途に在り、こゝて剎と云ふは三千大千世界のことて又は佛土と云ふも同じ意味てある、塵といふは多數の意味て今剎々塵々と云へば百千萬億無量無數の佛陀世尊無量無數の世界に百千萬億無量無數の佛陀世尊

が居られて、各々其の國土の衆生を濟度せられると云ふやうなことを聞けば、何やら眞の佛土佛身を見たやうに思ふかは知らんが、其れは皆報身應身の方便に過ぎぬのて未だ〳〵眞佛の邊に望むれば纔かに半途に在り、前途なほ遼遠てあるぞと言ふ、着語に脚跟下蹉過し了れり雪竇は恐ろしい遠方にしてしまふたが其れては人々各自脚跟下の佛土佛身を見認るてあらうぞと云ふ、更に山僧をして什麼をか說かしめん到る處佛土てあるものを強て半途に在りなどと云ふ者に對してモヽヤ說て聞かせる詮もない、其のやうなことては臘年にも還て曾て夢にも見んや、何時まて經ても眞佛を見ることは出來まいぞと、更に雪竇の上に超怒して本分の地を示すのてある、臘年と云ふは十二支のうちに無い年てある、つまり萬劫末代たつたとてもと云ふ意味に過ぎぬ。

第九十五則　長慶有三毒

垂示　有佛處不得住。住着頭角生。無佛處急走過。不走過草深一丈。直饒淨躶躶赤灑灑事外無機機外無事。未免守株待兎。且道總不恁麼。作麼生行履試擧看。

何事にもせよ此れと一つ取りつく處があれば皆本分に背く、迷に取りついて居るのが凡夫で、悟に取りついて居るのが聖者であるが凡夫だの聖者だのと云て居るのが皆本分の沙汰ては無い、火が物を焼くのが迷か悟か、水が物を濡らすのが凡夫の仕事か聖者の仕事か、總に沒交渉てある無關係てある、凡聖迷悟を離れて火は常に物を焼き水は常に物を濡らす、吾人も亦た復た然り、乃ち有佛の處にも住すると〇を得〇ず菩提とか涅槃とか云ふやうな佛法くさい所に住着すれば頭角生ず衆生濟度の方便として或は佛と說くことは無きにしも非ず、然れども暫時も住着することは許さぬ、其處に住着すれば其れが爲めに修行とか證悟とか云ふ所の高尚なる頭角を生じて、謂ゆる金鎖玄關の容易に療治の出來ない病氣に陷いる、然らば無佛の處が好いかと云ふに其處も亦た急に走過せねばならぬ、佛も法も無いと云ふやうな萬事を掃蕩し盡した處にウロついて居て、走過せざれば草深きこと一丈、其の掃蕩し盡くした邊に於て更に本分の自己を埋却する所の草漫々裡に落ち入ることになる、然らば一切すべて手のつかない凡聖迷悟悉く遠離した所が佛

祖の立ち場かと云ふに、直饒淨躶々赤灑々にして事外に機なく機外に事なきも未だ免れず株を守て兎を待つことを、コヽて事と云ひ機と云ふは機は心の作用すなはち主觀のと、事は即ち客觀の都べての境界と見るが早く判らう、即ち心の外に物が無く境の外に識が無い謂ゆる物心一如境智冥合または神人合一生佛不二などと云ふ所が本分の眞際かと云ふに、其のやうなことを思ふたり言ふたりして居るだけハヤ株を守りて兎を待つやうなもの、柳の下に何時ても泥鰌が居ると思ふて居る痴愚とゑらぶ所は無いことになるぞ、且く道へ總に不恁麼ならば何も彼も皆可んとした日には、サー何うしたものぞ作麼生か行履せん、試みに擧す看よ。

本則 擧長慶有一時云。寧說阿羅漢有二三毒一不レ說如來有二一種語一。保福云。作麼生是レ如來語。長慶云。寧人爭得レ聞。保福云。喫レ茶去。

長慶慧稜禪師のことは前の第二十二則にもあつた通り雪峰和尚の法嗣である、ある時保福と話して居る因みに阿羅漢に三毒ありと說くとも、如來に二種の語ありと說くべからずと云ふた、阿羅漢と云ふは小乘教の修行に依て得る所の四果と云ふて、四種の悟りの最上を阿羅漢果と云ふのである、阿羅漢は梵語であつて之を漢譯すれば無生と殺賊と應供との三義あると云ふ、無生と云ふは無始劫來生れかはり死かはりして來た謂ゆる生死輪廻の身であつたけれども、此度の悟りに依て生死の原因が盡きてしまふたから、モハヤ再び此世に生れてくると云ふことが無いと云ふ意味、又その殺賊と云ふは謂ゆる八萬四千の煩惱即ち生死輪廻の原因を賊に譬へて、今は其の都べての賊を殺し盡してしまふたと云ふ意味、又應供と云ふは凡そ出家沙門たる者は自ら織らず耕やさず一切衆生の供養を受て生活するのであるが、若しも己れの修行が眞實でなくて徒らに人の供養を受ることになつては、之を虛受信施と申して本統に人の供養に應ずるの資格が無いのみならず、極めて重き罪過を犯すことになるのである、然るに今此の阿羅漢の悟りを得たに就ては始めて其の如何なる供養にも應ずることが出來る身分になつたと云ふ意味である。

る、其中に於て今は其の殺賊の義に於て既に總べての煩惱を斷じ盡してしまふたのであるから、貪慾と瞋恚と愚痴との三毒は絶えてあるべきはずが無い、然るに其の絶えてあるべきはずの無い三毒が阿羅漢の身にあると言ふことは出來るとしても、決して如來に二種の語のあるべきはずは無いと云ふのである、二種の語といふは眞實の語とか方便の說とか云ふやうな表裏反對な語がないと云ふのである、然るに其の形式の上から云へば佛說ほど表裏反對の語の多いものは無い、或時は有と云ひ或時は無と云ひ、時には彌陀佛此を去ること遠からずと說れたやうな例が多い、然るに其の形式に於て種々無量の差別あるが、其儘に直に是れ一味平等の眞際に結飯するのであるから、唯一乘法のみありて二も無く亦た三とも無しとも云ひ麁言も細語も悉く薩婆若海に皈入すとも云へば、俗には狂言綺語も皆是れ讃佛乘の因緣であるとも云ふのである、着語に焦殼は芽を生ぜず此れは阿羅漢を叱つたので、羅漢は自分の修行ばかり如何ほどに進んでも、少しも他を愍れみて衆生を濟度するの慈悲心が無い、其れを焦殼に譬へたので焦殼と云ふは米にもせよ一旦燒きこがしてしまふた種は決して再び芽を生ずると云ふことの無いやうなもので、此の自調獨善おのれの快樂のみを主として利他の心のかげたものは決して眞實の佛道を成就することが出來ないと云ふのである、已に是れ釋迦老子を謗し了れり佛は元來一字不說である、然るに二種の語が無いなどと云ふだけハヤ謗佛の罪であるぞ、長慶は更に如來に語なしとは言はず只是れ二種の語なしと注釋を下した、着語に猶ほ自から顚頂其のやうなことを言へば言ふほど自己に背くことになるぞ、早く是れ七穿八穴言へば言ふほど如來の價値を散々に損害する之乎者也と云ふは誰も知る通り皆文章の助語であるが今語なしとは言はずとか二種の語なしとか言ふのが悉く之乎者也であるぞと抑へ更に什麼の第三第四とか說かんに已に二種の語さへ無いに何て第三第四があらう、然し此の着語の如きは削りすてるが好いと思ふ、長慶が斯く言ふに對して保福云く作麼生か是れ如來語と反問した、保福の從展禪師のことは第八則にも第二十三則にもあつた通り同く雪峰の弟子であるから長慶とは法の兄弟である、如來に二種の語も一種の語も無いは知れ切たことであるが、一躰に如來の語と云ふは何んな

ものであらう、果して其のやうなものが有るかナと、突込んだ着語に好一拶まことに好い咎め處じや、什麽と道ふぞ此の一拶に對して長慶は何と答へるやらと次の答話を豫想した、慶云く聾人いかでか聞くを得ん如來には如來の語があるけれども聾人では聞くことが出來ぬ、此れて保福が閉口すれば好いが斯んなことでは到底保福が承知しまい、圖悟は空を望で啓告ずサスガの長慶少々狼狽したナ、七花八裂脚下が亂れて來たぞ、ナゼかと云ふに聾人に聞こえないと云ふなら如來語は耳さへあれば聞えるのが、其のやうな言葉咎めの議論に渉るやうなことでは未だし未だし、保福曰く情に知る侘が第二頭に向て道ふことを、第一機には甚だ遠いぞと保福が抑へた着語に爭てか明眼の人を瞞し得ん中々保福ほどの人を容易に屈伏させることは出來ぬ、遂に長慶は保福の爲めに鼻孔を裂轉されてしまうた、何ぞ止た第二頭のみならんや第三第四に落ちて居るぞ、そこで今度は主客入り代りて慶云く作麽生が是れ如來語と保福に向つて反問した着語に錯先刻自分で聾人には聞くことが出來ぬと言ふたては無いか、其れを今度は自分から問ふと云ふは何事ぞと咎める、イヤ却て些子に較れりヤハリ問はれて見れば保福が困るてあらう、保福云く喫茶去お茶を召しあがれと言ふ、此れが即ち如來語の當躰であると見える、結局これは思量分別を以て知解すべきことては無い、着語に領とある、其れて能く領解が出來ましたと言ふ復云く還て會すやと此れは諸人への拶着て、只此の喫茶去と云ふの一言此れが一種の語と云ふものか二種の語と云ふものか審細に參究して見ねばなるまい、若しも果して此れが如來語てあるなぞと思量分別するものが有つたならば、早く是れ蹉過し了る、到底株を守りて兎を待つの誇りを免かるゝことは出來まい。

頌　頭兮第一第二（我王庭中無二如レ是事一○古今作二什麽一）臥龍不鑒止水（同道方知）無處有月

波澄（四海孤舟獨自行○徒勞下度二○財二什麽一）有處無風（ニハ）浪起（驀地設人二○還是二來七毛勿賊破家○關市譏而不レ征○其二由頭一○失二錢遣罪一）三月禹門遭點額（退レ已讓レ人萬中無レ一○只得二欲レ氣吞一レ聲）

とするのが抑も大間違ひであるぞと言はんが爲めに先づ此一句を提起して其の理由を次句に説明するのである、着語に我が王庫の中には是の如きの事なし王庫と云ふは法王すなはち如來のお手元には一だの二だのと云ふやうな數量に渉るものは無い、謂ゆる不可思議不可商量のものぞと言ふのである、其れを今雪竇が頭分第一第二と提起した勢ひは、恰かも物を抛げ打たんとする時に先づ高くさしあげたやふなアンバイで、誠に古今の榜樣であるとほめた、けれども邪に隨ひ惡を逐ふは什麼をか作さん長慶などが一種だの二種だのと言ふた邪惡を採りあげて彼れ此れ言ふには及ぶまい、臥龍は止水を鑑みず眞の如來語は臥龍の如き者で洪波浩渺白浪滔天の處に活動して神通妙用端倪すべからさるものである、然るに第一頭だの第二頭だのと云ふことは止水の如きもので孑孑が涌くより外に何の能もないやうなものである、何で臥龍が其のやうな處に居らうぞ、其れを保福が喫茶去とやつてのけた調子は殆ど活龍昇天の姿であると稱讃した、着語に同道まさに知るサスがに雪竇は保福の知音である、無處には月ありて波澄む無處と云ふは龍の居ない處即ち長慶の如き止水には月影ばかりで絶えて波瀾の活動が無い、着語に

四海孤舟獨り自ら行く誠に海上無事で舟を行るには安心であると此れは圓悟が止水を活用するの手段と見える、徒らに卜度を勞す止水裏に向つて活龍を求めるは徒勞である什麼の椀をか求めん設ひ有たからと云ふても食事の濟んだ後に膳椀の必要は無いやうなものよと掃蕩した、有處には風なきに浪起る此れは保福の喫茶去と道破した活機輪、即ち活龍の居る處には一點の風は無くとも自然に白浪滔天の活動があるとの讃歎である、着語に人を嚇殺す長慶も此には驚いたであらう、赫の字は玉篇に口を以て人を距ぐ之を赫と謂ふとあつて俗にオドスと云ふことである還て寒毛卓竪するを覺ふるやと座下へ一拶して何うじや諸人ゾッとする感じがあるか、其の感じも無いやうでは參禪の効はないぞ、打て云く來れり其れ氣をつけろ活龍がソコへ來たぞ諸人の脚下に蟠まつて居るでは無いか、稜禪客稜禪客と長慶の慧稜を呼び出した、着語に賊を勾して家を破る長慶が保福を釣らうとして還て保福に嚙みつかれたのは、賊を捕へたために身代限りを出したやうなものぞ、鬧市裡に出頭すること莫れ田舍の傖父は都市の賑やかな處へ出かけないが好い、失錢遭罪金錢を費した上に罪人にされるやうな目に遭ふぞと重ね〳〵長

慶の死句に落ちたを抑へて、保福の活句に光彩を添へる、三月禹門點額に遭ふ、此れは第七則の頌で委く言ふた通りのことで、支那の俗說に毎年三月三日に鯉が禹門三級の瀑布を登り遂げれば角が生えて龍になるけれども、若し途中で力が盡き流されて戻されるのを點額と云ふのである、今長慶がせつかく如來語の龍門を透過しやうと思ふて登りかけたのを、保福に突き戻されて點額に遭ふたは誠に氣の毒であつた着語に已を退いて人に讓るは萬中に一もなし然かし此れは長慶が保福に一歩を讓りて彼れに面をあげさせたのであらう、其れならば容易に出來ぬことぞと長慶を冷かす、只氣を飲み聲を呑むことを得たり左に右に閉口頓首の外はあるまいと、徹頭徹尾長慶の死句を抑へて保福の活句を稱揚し盡した、彼の喫茶去すなはちお茶あがれと云ふ一言に、何ゆゑ其れほどの價値があるのであらうぞ、只その思量分別に渉らざる一點に在るのみぞ。

第九十六則　趙州三轉語

本則 擧趙州示衆三轉語（道ニ什麼ニ〇三段不同）

此の一則には垂示が無くて頌が三首になつて居る所が全く他の則と違ふて居る趙州從諗禪師の示衆三轉語と云ふのであるが、其の三轉語の本文は謂ゆる三首の頌の第一句に置て在て此には提示してない、轉語と云ふことは宛轉投合の義で語句を宛轉し取り合せて學人の機に投合する意味である、其の語が一句なれば一轉語と云ひ三句なれば三轉語とも云ふのであるが、今此の三轉語とあるのは最初趙州が自から三轉として垂示せられたのでは無くて、或時上堂の法語に金佛不渡鑪、木佛不渡火、泥佛不渡水、眞佛內裡坐、菩提涅槃眞如佛性、盡是貼體衣服、亦名煩惱、實際理地、甚麼處着、一心不生、萬法無咎云々と云ふ文句があるのを、雪竇が其の最初の金佛と木佛と泥佛との三句だけ抄出して三轉語と名けて一首づゝの頌をつけたのである、趙州の意は却て第四句目の眞佛は內裡に坐すと云ふ句と後の一心生ぜざれば萬法咎なしと云ふ處に在るのであるけれども其れでは餘りに露骨で禪語とは思はれないほどであるから特に此の奇警なる三句の上に於て謂ゆる眞佛を示し且つ一心生ぜざれば萬法咎なき眞相を開發せしめたるの手段である、着語に什麼と道ふぞ元來一語もさしはさむべきで無い事を三轉の四轉のと何を言ふかと

抑へ、三段不同只此の一箇の天眞自性を三段不同に分別するは何故ぞと學人に疑着せしめる。

頌 泥佛不渡水（浸爛鼻孔○無風起浪）神光照天地（干他什麼事○見兎放鷹）立雪如未休（一人傳虛萬人傳實）（○將錯就錯○阿誰曾見爾來）何人不雕僞（入寺看額○二六時中走上走下是什麼○闍黎便是）金佛不渡鑪（燎却眉毛○天上天下唯我獨尊）人來訪紫胡（又恁麼去也○只恐喪身失命）牌中數箇字（不識字底貓兒也無話會處○天下衲僧揮觜不得○只恐喪身失命）清風何處無（又恁麼去也○頭上漫漫脚下漫漫○又云來也）木佛不渡火（燒却了也○唯我能知）常思破竈墮（東行西行有何不可○癩兒牽）杖子忽擊着（在山僧手裏○山僧不用在○阿誰手裏無）方知辜負我（似個相似○摸索不着○有什麼用處○若天若天○三十年後始得）

泥佛水を渡らず此れが三轉語の第一句である、其れを其儘に提起して頌の第一句とするのは雪竇頌古の常例である、泥佛と云ふは泥土で作つた佛像であるが、都べての土人形みな同じことである、然るに泥と聞けばハヤ水に蕩るであらうと思ひ、佛と聞けば直に凡夫に異なるの感念が起る、其れを凡夫の迷情と謂ふのである、泥佛が水を渡れば蕩けるは誰も知れきつたことである、水を渡つた後に始めて之を知るべきでは無い、着語に鼻孔を浸爛す既に泥佛と言ふ早く已に眼も鼻も蕩けてしまふた、且つ趙州が事あたらしく斯のやうなことを言ひ出したのは風なきに浪を起すと云ふものよ、神光天地を照す其の泥佛が水を渡つて蕩けてしまふて宇宙の本體に結皈し、其れから後に始めて一味平等の光明を放つのでは無い、泥佛水を渡らずに泥佛其儘に神妙不可思議の大光明を放ちて宇宙萬象を照して居る、其實は泥は泥その儘に、水は水その儘に、皆神光天地を照して居るのである、但この神光と云ふことに就ては二祖大師の故事がある、二祖と云へば初祖達磨大師の衣鉢を傳へて支那禪宗の第二祖となられた勅賜正宗普覺禪師のことである、此人は初めて生れた時に神光ありて室內を照らし其の光が霄漢を射るとあつて餘程不思議な瑞相があつたに依て、幼名を神光とつけられたのであつた、其後に出家修行して遂に達磨大師の弟子になり、少林山に於て頻りに參禪辨道して居られたが、大師は只本人に自から開發せしめるのを主とせられるのであるから、一言も敎へると云ふことを爲ず、只面壁坐禪して居るのみである、神光は益々煩悶して遂に死を決して道を求めるに至つた、時しも後魏の光明帝の太和十年十二月九日の夜のこと、雪は深々とふりつもる寒氣凛列骨髓に徹すると云ふ折から、其の雪の中に突立て、追

々と雪が腰を埋むるやうになつても頑として動かない、サスガの達磨大師も此れは本氣になつて道を求めるのであると云ふことを感れまれて、始めて聲をかけて汝は何の求むる所ありて其のやうに雪の中に立て居るぞと言はれた、神光は涙に咽びつゝ唯願はくは慈悲甘露門を開きて廣く群品を度したまへと願ふ、大師は更に勵まして諸佛の妙道は曠劫に精進して、行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ、豈小德小知輕心慢心を以てすべけんやと示された、此に於て神光は遂に窃かに携ふる所の利刀を以て左の臂を斷ちて大師の前に置き身を捨てゝ法を求むることを表明せられた、そこで大師が更に汝は雪に立て臂を斷ち其れて何うしやうと云ふのであると問ふ、其時に神光は某甲心未だ安からず乞ふ師安心せしめたまへと願ふ、大師は心を將ち來れ汝がために安んぜんと詰る、神光が心を求むるに不可得と言ふた途端に、大師は我汝がために安心し竟ると言はれたのが、達磨が二祖に法を傳へられた時の問答で、名も此時から神光を慧可と改められたのである、此の問答をモッと委く話せば面白いけれども、餘りに長くなるからお預かりにして置くが、要する所は心を求むるに不可得と云ふのが即ち大安心の端的である、語を換

えて言へば佛だの悟だのと云ふて外に向て求むべきては無い、人々各自本來具足の本心の靈光を放つことさへ出來れば好いのである、然るに其の心の光は修行の力を新たに外から得るのでは無い、元來具足のものであつて最初から寢ても起きても大光明を放つて居るのであると云ふことを示すために、二祖は達磨大師に遭はない前に於て既にオギャーと始めて產聲をあげた時から神光室內を照らして霄漢に至つたと云ふのでは無いか、即ち泥佛水を渡らす其儘に十方法界の大光明よと本年成佛の眞際を示されたのである、圓悟は他の什麼の事にか干からんと言ふ、泥佛なら泥佛で何の不足も無いに何のために二祖だの達磨だのを引出すのかと抑へた、然し泥佛不渡水を承けて直に神光照天地と言ふた調子は實に兎を見て鷹を放つの機合て寸分も隙がないとほめる、サテ第三句以下は前の神光に因みて雪竇大慈悲の垂誨てある、即ち二祖の安心は本來不可得の當躰であつて人々具足には相違ないけれども、雪に立て如し未だ休せずんば何うして其の本具の靈光を自覺して七通八達自由自在に宇宙を照すことが出來やうぞ、此事は前にも申してあつたと思ふが永平寺開山承陽大師のお示しにも此法は人々分上ゆたかに具は

れりと雖も修せざるには現はれず證せざるには得ることなしとあつて、幾ら本具の理性が悟れても實地の修證に現はれないては謂ゆる空想と云ふものになつてしまふ、さればとて修證に依て始めて理性が出來るのて無いと云ふことは無論である、コヽの樣子さへ能く得心がゆけば佛法の理論も事實も思ひ半に過ぐるのてある、今彼の二祖も慧聲と共に放つた神光を更に雪に立ち臂を斷ちて始めて大休歇の地に到つたのてある、然るに若し萬一にも只空想に走つて本來具足の自性のみを認め、更に實地の修證が欠けたことてあつたならば何人か雕僞せざらん誰も口眞似したり、摸擬したりして似せ悟りを振りまはすことは出來るてあらうぞと誡められたのてある、雕僞は詐はり飾ることてあるから實修眞證のない姿を形容したのてある、着語に一人虛を傳ふれば萬人實を傳ふ、此れは謂ゆる本分の上から言ふのて、二祖が雪に立て悟を開いたなどと云ふことを一人誤り傳へた者があつたために、老々大々たる雪竇までが斯のやうなことを言ふと抑へた、實に二祖の本分は雪に立つを待つべきては無い、即ち泥佛水を渡らすてある、將錯就錯大間違の道傳てあるぞ、阿誰か曾て傳を見來る二祖が雪に立ちて始て休したと云ふ實地

を誰ぞ見てきたものがあるかと詰る、寺に入て額を看る凡そ寺へ住たならは直にその門頭の額を見て、ハヽー此れは三緣山增上寺てある此れは萬年山靑松寺てあると云ふことが分るやうに、讖かに人を見る直に此れは實修眞證の人てある彼れは謂ゆる雕僞の似せ悟りてあると云ふことは歷々分明ぞと言ふ、二六時中走上走下、是れ什麽ぞ、吾々お互ひ朝な夕な寢たり起たりして居るのは果して是れ眞實か將た雕僞か人々各自に脚下を照顧せよと云ふアンバイ、闍黎便ち是その雕僞の典型は先づ雪竇お前じやナ、泥佛は泥佛てあつて即ち金鐵を鎔解する處てある、どゝ餘計なことを言ふたものだと、又本分に結歸せしめた。

◎次に第二頌は金佛鑪を渡らず鑪は鑪轆てあつて即ち金鐵を鎔解する處てある、此れも金佛には限らない銅人てゝも鐵牛てゝも鑪轆に入て鎔解してしまへば一味平等の眞際に歸入するに違ひない、然るに今は鎔解を待たず其儘てある、着語に眉毛を燎却す、既に金佛と言ふ早く已に眉目も口舌も爛れ盡して痕迹を留めない、然かし今は金佛その儘に天上天下唯我獨尊てある、銅人てゝも鐵牛てゝも皆同じことよ、人來て紫胡を訪ふ衞州紫胡巖傳燈錄には子胡と書てある子紫音通と見える)の利躓

禪師の事は前にもあつたが、南泉和尚の法嗣て一疋の猛犬を飼てある、門前に建札があつて紫胡に一狗あり上は人の頭を取り中は人の腰を取り下は人の脚を取る擬議すれば則ち喪身失命すと書てある、畢竟一狗とは人々本具の大智慧光明のことてある、今雪竇が泥佛のも相手に其の狗を呼び出してきた、此の狗は幾かに擬議に渉ればワングリと咬みついて如何なる人ても喪身失命の厄にあふと云ふことてあるが、此の金佛も亦た其の通り少しても擬議に渉れば其の眞際に辜負す、着語に又恁麼にし去るや此れは前にも神光などを引出して泥佛に疵をつけたが、其れにも懲りず又かと云ふの意けれども紫胡の犬が出て來ては只恐くは喪身失命せん人々用心しろよとの注意、牌中數箇の字すなはち前に申した紫胡嚴の門前に建てゝある牌に書てある文句、寸分も擬議に渉らない處然かし其れは其の文字が讀める人の話若し字を識らざる底ならば猫兒も也た話會の處無からん、字を識らない者は牌が讀めぬに依て、紫胡の狗はサテ置き猫のことも合點ゆくまい、結局此れは言語道斷の處てあるから天下の衲僧も皆を挿むこと得ず誰ても口出しは出來ぬ、此次の只恐くは喪身失命と云ふ着語は誤て重出したのてあらうと云ふことてある、サテ其の擬議に渉らず言詮を絕して觸處光明と云ふ風光は、敢て紫胡の門風に限つたことては無い、清風何の處にか無からん森羅萬象其儘に昔も今も清風匝地何の極まりか有らんてある、着語に又恁麼にし去るや此れも衍文てあらうと云ふことだ、頭上漫々脚下漫々天下到處皆清風瓢々の眞佛土てあるに依て、彼の紫胡の狗を牽きつれて優々と散歩するに好箇の大公園てある、來也ソレ紫胡の狗が口を開いてきたぞと學人を警醒する。

次に第三頌じや木佛火を渡らず人々具足箇々圓成の當躰てあることは全く前と同じことてある、着語に燒却し了れり木佛と言ひ出せばハヤ其時に灰になつてしまふた、而して其の火を渡らざる底の眞意は唯我能く知る其れは到底他の窺ひ知るべきては無い常に思ふ破竈墮此れも傳燈錄にある故事て、溈山に一人の高僧があつた即ち溈山慧安國師の弟子てあつたが、常に姓氏を人に言ふたことが無い、附近の村落に一つの竈を神に祭つた祠廟があつて、祭禮の度び毎に多くの犧牲を備へて祀るために夥多く殺生をする、少しても其れを怠たれば祟と云ふので村民が恐ろしがつて居る、其れを彼の高僧が惑んて直ちに其の廟中に入り拄杖を以て竈を

三たび敲き、咄汝本塼土合成、靈何くより來り聖何に從て起り恁麼に物の命を烹殺するやと言ふて、又擊つこと三下した途端に竈はグワラグワラと碎けてしまふた須臾たつ間に一人の青衣峩冠とある氣高い人が現はれて其の高僧を禮拜し、我は乃ち此の竈の神でありますが、久く業報を受て苦厄に沈んで居りましたのを、今日御濟度にあづかりまして有り難う御座いますと御禮を言ふた、其時に其の高僧が是れ汝が本有の性なり吾が強て言ふに非ずと言はれた、其後は此の高僧のことを誰言ふとなく破竈墮和尚と呼ぶやうになつたと云ふことである、此の一段の因緣に於て其の是れ汝の本性なり吾が強て言ふに非ずと云ふ一言が、今の木佛火を渡らずに尤も親しいので、乃ち雪竇が此へ引き來つた所以である、着語に東行西行何か不可か有らん此れは雪竇が常に破竈墮を思ふと言ふたのを咎めたので、破竈墮に限らず東でも西でも地獄でも極樂でも月でも花でも何を思ふても好いでは無いかと云ふ、然かし癩兒伴を牽くで雪竇と破竈墮は好い道づれよ、杖子忽ちに擊着す。即ち破竈墮和尚が廟中の竈を打ち碎いて其の眞性を現はさせた有樣、着語に山僧が手裡に在り其の拄杖ならば圓悟が持て居るぞと言ふ、敢て圓悟に限つたことでは無い、人々各自に持て居るのであるが只其の使ひかた一つである、山僧も用ひざること在り拄杖は打つに限つたものでは無い、誰が手裡に無き此れは註釋的で面白くない、方に知る我に辜負することを竈神が久しく業報を受けて眞箇の我に辜負て居たのを今や和尚に擊着せられて初めて今まで辜負して居たと云ふことが知れたと云ふのである、着語に儞に似て相似たり打つた拄杖と打たれた竈、誠に能く似て爪を二つじや、其はずよ元來同胞であるものを、木佛と火も亦た其の通りのことである、然るに若し辜負して居れば兄弟は他人の始りで摸索不着容易に廻り遭ふことが出來ぬ、尤も廻り遭ふても什麼の用處か有らんと掃ひ、テモ辜負したとは蒼天蒼天悲いことよ、然かし實參實究三十年の後には始て得てん、上げたり下げたり、拈弄して學人の工夫を助ける。

第九拾七則　金剛經輕賤

垂示 拈一放一。未是作家。擧一明三。猶乖宗旨。直得天地陡變。四方絕唱。雷奔電馳。雲行雨驟。傾湫倒嶽甕瀉盆傾也未提得

一半在。還有解轉天關能移地軸底麼。試擧看。

一を拈じ一を放つも未だ是れ作家にあらず、一と云ふは即ち第一義のことで、把住して拈提するにも第一義、又放行して自由に任せるにも第一義、寢ても起きても第二義には下らぬと云ふ處すなはち孤峯頂上に立て居たからと云ふても、未だ其れが必ずしも作家の衲僧とは言はれぬ、サテ又一を擧げて三を明らむる怜悧俊爽も猶ほ宗旨に乖く到底佛法は怜悧不怜悧の間には無い、又たとひ直に天地陡變し四方絶唱し雷奔り電馳せ雲行き雨驟き湫を傾け嶽を倒し甕を瀉ぎ盆を傾くることを得るも也た未だ一半を提げ得ざること在り、と此れは如何なる作略を以てしても到底作略を以て金剛不壞の般若を全提することの出來るものでは無いと云ふことを明かすので、陡變の陡の字は頓または遽の義であるから設ひ天地間の日月星辰等を遽に轉變させる力があり、四方絶唱とは世界中の人々にグーの音も出させないと云ふ働きを以て、雷奔電馳雲行雨驟と如何に嶮峻峭拔の機鋒を逞くし或は拂拳或ひは棒喝と本分の正令を行ずるやうでもあつても、又は傾湫倒嶽と大河を傾け大山を倒す勢ひを以て甕の水をこぼし盆の水をふりまくやうに雄辯を振つて演說說法しても、まだ〳〵金剛般若の一半をも提起し得られるものでは無い、サー是に至りて還て天關を轉することを解し能く地軸を移す底ありや、前に擧げたのは何ほど嶮峻でも怜悧でも皆天地間の事であるが、今は其の根本を拔いて天關を轉じ地軸を移す、即ち都べての迷悟も凡聖も超過し盡したる處に於て始めて眞箇金剛不壞の般若波羅密多を受用不盡ならしむるには何うしたものぞ試みに擧す看よと經文を提起せられた。

本則 擧金剛經云。若爲人輕賤（放一線道又且何妨）○是人先世罪業（驢駝馬載）應墮惡道（陷墮了也）以今世人輕賤故（酬木及末只得忍受）○先世罪業（向什麼處摸索種穀不生豆苗）○則爲消滅（雪上加霜又一重○如湯消氷）

金剛經に云く、委く云へば金剛般若波羅密多經と曰ふので、新譯の大般若波羅密多經六百卷の中では第五百七十七卷目の能斷金剛分と云ふのであるが、其れを是れよりズッと前に舊譯の方では一卷だけ抄譯して即ち金剛波羅密多經と名けたの

てある、此の經の全躰が專ら眞空の理を說いたものてある上に、禪宗の第六祖曹溪の慧能大師が此の經文の中の應無所住而生其心と云ふ語に感じて出家得道したと云ふ所から、禪宗に於ては各派とも此の經を日夜讀誦することになり、從がつて禪宗繁昌の唐宋時代に於ては、此の經を受持し讀誦すれば、實に不思議の功德靈驗があると云ふやうなことを信仰的に言ひはやしたものと見えて、其の靈驗の事蹟を書きあらはした書物なども澤山ある樣子てある、さて又例の敎家の側に於ては敎家相應な解釋のあることてあらうが、其れを今は雪竇が禪宗の見識を以て頌古の題を其の經文中から抄錄し來つたのが即ち本則てある、此の文句は昭明太子が此の經を三十二段に分解した中に於ては其の第十六の能淨業障分と名けられた處にあり、前に善男子善女人此の經を受持し讀誦してとあつて其次に今の本文の若し人の爲めに輕賤せられんは云々と續くのてある、即ち此の金剛經を受持讀誦する人てあつたならは、都べての災難禍害を悉く免かるべきはずてあるに、若し萬一にも此の經を受持讀誦しながら世間の人々の爲めに輕しめられたり賤しめられたりするやうなことがあると云ふならばと云ふ意味てある、着語に、一線道を、放てりとある、眞の金剛の正體には輕賤せられるとか尊重せられるとか云ふやうな二邊にわたるはずは無いのてあるが、暫らく利生の方便として一線の問道を開いたのてあらう、又且つ何ぞ妨げん況や作家の衲僧ならば輕賤せられたからと云ふて何の差支があらうぞ、元來毀譽褒貶の支配を受けべきものては無い、是の人先世の罪業ありて應に惡道に墮すべきに、其の輕賤せられるたげの罪を造つて置た其の業因があつて、遂には無間地獄の苦報を受くべきはずてある、着語にイヤハヤ其の罪業ならは驢、駝、馬、載かぎりも無く澤山ある、陷墮し了れり其のやうなことを言ふて居るのがハヤ惡道に落ちて居るのぞ、今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に現在目前世人の爲めに輕賤せられるのてあるから、罪業の差引がついて、地獄へは死刑に處せらるべき罪人が獄則を能く守つたために無罪放免になるやうなものぞと云ふのてある、着語に本に酬いて末に及ぼす因果顯面打てば響くやうなものてある、只忍受することを得たり如何ほどの毀謗ても侮辱ても平氣て受けるぞよと云ふ、先世の罪業則ち爲れ消滅す、此れはモハヤ講辯には及ぶまい、着語に什麼の處に向て模索せん其の先世の罪業とか云ふものが

何處にあつて其れを何うして探すことが出來るぞと奪ふ、然かし穀を種て豆苗を生せず茄の木に瓜は生らないやうなもの、因果の道理は昧ませない雪上に霜を加ふ、又一重罪〳〵と言ふさへ絵計なことであるに、更に其れが消滅したなどとは何たる贅言ぞ、然し湯の氷を消するが如し、孰れにしても同じ水の外は無い、一躰に此の一則を參究するには先づ其の金剛經と云ふは何のことであるかと云ふことを確かめて置かねばならぬのである、通常に經文と云へば無論紙上に文字を書いたもののことであるが、其の紙上に文字を書いたものを何ほど受持したからと云ふても讀誦したからと云ふても、何の靈驗功德があらうぞ、其事を評唱の中に你試みに一卷を將て閑處に放在して看よ、他に感應ありや也た無やと詰り、更に法眼文益禪師の語を擧げて、佛地を證する者を名けて此の經を持つと爲すと斷案を下して ある、其うして見れば、金剛經を受持讀誦するの功德靈驗と云ふことは、即ち佛地を證し阿耨菩提の悟りを得たと云ふこととは本より清淨圓滿の處であつて、罪禍だの幸福だの迷だの悟だのと云ふ二邊に涉つたことの絕えて無い處であつて見れば、先世の罪業も現世の消滅もあるべきは無い其れを且らく經文の上には繞路迂曲の語を以て言ひあらはしてあるのを、今雪竇は直截に裁斷して一首の頌を造つたのである。

頌 明珠在レ掌ニ胡漢不來ス全ク無二伎倆一既ニ無シ有レ功者賞ス波旬失途ス瞿曇瞿曇識我ヲ也無シ復云勘破了也

明珠掌に在りと此經を明珠に譬へて頌し出した、此れは法華經の安樂行品にある譬喩で、其の本據を擧ぐれば「譬へば强力の轉輪聖王ありて諸國を降伏するに、王は兵衆の戰功ある者を見て、功に隨て賞賜す、唯髻中の明珠のみは以て之を與へず、諸の兵衆の大功ある者を見て今これを與ふるが如し」とあるので、佛法の修行をする者も其の通り、小乘は小乘だけの功があり、金鵄勳章の功七級とか勳八等とか云ふ所から、追々と功二級もあり勳一等もあらうけれども、大勳位功一級と云ふ所の髻中の明珠すなはち金剛の正體は、謂ゆる唯佛與佛の以

心傳心に止まり、決して動一等の人でも功二級の人でも窺ひ知る所ではない、然るに今われ雪竇は已に其の明珠即ち金剛の正體を掌中に握つて居るぞと言ふのである、着語に上は霄漢に通し、下は黄泉に徹す其の明珠の光は無限の空間に充ち塞がつて居ると云ふ、吾も人も皆この光明裏に起臥して居るのであるが、ナゼに其の明珠を手に握らぬのであらうぞ、什麽と道ふぞ雪竇が其の明珠を掌に在るとか脚に在るとか云ふは惟しいぞと咎め四邊諸訛八面玲瓏どこもかしこも明珠ならぬ所は無いはずぞと指註する、功ある者は賞す若し能く佛地を證する者があれば此の金剛不壞の明珠を賞典に遣はすぞ、此の明珠は胡人來れば胡人現じ漢人來れば漢人現ず、森羅萬象歴々分明に一切諸法相照さずと云ふことは無い、着語に多少分明イヤ其の論功行賞の詮衡には決して誤りが無い、乃ち他に隨ひ去る功さへあれば必ず隨ひ來るのである、然し忽ち若し功なき時作麽生か賞せん其功の見えるのは賞することも出來やうが、無功の大功は見えまいぞ、胡漢來らざれば全く伎倆なし、然るに胡人も漢人も花も月も迷も悟も絶えて其の形象を見ざる本分の地に至りては、花來れば花を現じ月來れば月を現ずるの伎倆に用が無いに依て、亦た其の功動の論量すべきも無い、即ち眞の金剛經の上には先世の罪業もなければ現在の消滅も無い、其れが即ち本統に能く金剛經を受持し讀誦すると云ふものである着語に內、外、消、息を絶す內に照すべきの智もなければ外に照される境も無い、謂ゆる光境俱に忘じて亦た是れ何物ぞてある、と云ふも、尙ほ些子に較れりまでのことて未だ本分の全提とは言へぬ、展轉して沒交涉色々とお話が變つてきて到頭何の事とも分らなくなつた、什麽の處に向てか摸索せんサー斯ふなつた時には明珠の體用を何う參究したものぞと學人への一掇、漆桶を打破し來れ相見せん、都ての思量分別言句伎倆を棄切てしまはなければ、決して此の全く伎倆なき底の明珠を見ることは許さぬ、伎倆既に無し波旬途を失す、波旬と云ふは梵語であつて漢譯すれば惡魔と云ふことになるそうな、今は都べての煩惱妄想を代表させたので、吾に伎倆すなはち思量も分別も智解も作略もありさへせんければ、決して都べての煩悶惱苦に支配されると云ふことは無い、着語に休し去り歇し去る都べての思量分別を棄て切てしまふた委、阿誰か恁麽に道ふ既に伎倆を絶したとすれば其のやうなことを言ふて居るわけも無いがと雪竇にからかひ、這の外道魔王蹤跡を尋ぬるに

見えずイヤ其の波旬が途を失して行衛が知れなくなつた、外道と云ひ魔王と云ふも皆途中の話で本分の家郷には決して其やうな痕迹も無い、そこで雪竇は更に一段と地歩を進めて嬰曇嬰曇と釋迦老人を喚び出した、波旬はサテ置き佛と雖も是に至りては途を失するであらう、元來見るべきものでないから波旬に窺はれないばかりでは無い、佛にも窺かはれないのである、語をかへて更に通俗に云へば煩惱が無いばかりで無く菩提も亦た蹤跡を絶して居る、そこを圓悟は佛眼に覷れども見えずと言ふ、又咄と云ふは其の喚び出した嬰曇を叱りつけたのである、雪竇は嬰曇に向つて我を識るや也た無や、何うで御座る此の明珠を掌中に握つて居る雪竇を御存知であるかナと言ふ、久く別れて居た兄と弟が曾つて親から分けてもらうて置た割符を合せて見るやうなものである、着語に咄と雪竇の自點胸を叱りつけ、勘破了也と雪竇の先をこした、雪竇は我を識るやと言ふた上に更に復云く勘破了也と佛も魔も悉とく勘破し盡した各地歩を占めて十方法界を睥睨したアンバイ、着語に一棒一條の痕この勘破は骨に徹した恰かも打つた痕が鮮かに肌へ附いたやうである、然かし己に言前に在り其んなことは言はぬ先に判り切たことよと其の語脈を截りすてゝしまふた。

第九拾八則　天平和尚兩錯

垂示 一夏嘮嘮打葛藤。幾乎絆倒五湖僧。金剛寶劍當頭截。始覺從來百不能。且道作麼生是金剛寶劍。貶上眉毛。試請露鋒鋩看。

此の垂示は後の第百則の垂示と入れ違へてあると云ふことである、ナゼかと云ふに此の垂示は他の垂示とは全く體裁が違ふて、碧巖錄一百則の結局を告げられるための偈一首を提示せられたのであり、且つ其の垂示の意味が全く第百則の本則に適當して居るからである、其れのみならず後の第百則の垂示は亦た其れと反對に、全く此の第九十八則の本則に適當して居るのである、何うも此の碧巖錄といふものは長い間多くの人に寫し傳へられた爲めに、色々の錯簡やら誤脫やら少くないので着語の如きは殊に甚しく思はれるけれども、今度の講話は評唱にまでは及

びかねた爲めに、圓悟禪師の本則および頌に對する見かたを、着語に依て多少窺ふより外に致しかたが無いに依て、亂雜にも拘はらず着語を成るだけ助けて講話したのであつたが、斯ういふ事情であるから其處を能く含んで置いて讀てもらひたいのである、サテ一夏〻〻として葛藤を打す、此れが即ち碧巖百則提唱の終結を告げるために圓悟の唱へられた七言四句の偈の第一句で、十蒸の韵を踏てある、一夏といふは今さら申すまでも無いが、天竺の雨期安居の制度が支那へも日本へも傳はつて、毎年四月十五日から七月十五日までの九十日間僧衆一同に禁足靜養して專ら辨道修行をするのが規則になつてある、其れを或は結制とも云へば安居とも云ひ又曹洞宗などでは江湖會とも云ひ、此の九十日間のことを一夏と云ひ又法歲とも云うて、僧侶たる身の年齡は此の夏安居を經た數を以て算へるのであるから、法臘とか僧臘とか云ふ言葉も起つてくるので、世間の臘月は十二月であるけれども法歲の臘末は七月十五日であるのである、乃ち圓悟は或る年の一夏九十日間此の雪竇頌古を提唱して門下の衆僧の功夫を扶け導びかれたことであつたが、毎日〳〵〻〻と饒舌して色々の葛藤すなはち文字言句を弄し、幾んと絆倒す五湖の僧、四海のうち五湖のほとりから集り來つて居る雲水の僧だちに絆倒の迷惑を懸けたことであつたと、平生の語氣には似ない誠に卑下した謝辭をのべられたのである、サテ今日いよ〳〵終結といふ時に臨んで、金剛寶劒とも云ふべき本分の知見を以て從前のすべての葛藤を當頭に截りすてゝ見れば始て覺ふ從來百不能なりしことを、イヤもう都べての文字言句皆悉く何の用にも立たぬことよと、益々謙遜せられるやうに言ふて本分の地には都べての言句技倆を許さぬ樣子を示されたのである、且く道へ其れは其うとして置て作麼生が其の金剛寶劒と云ふは果して如何なるものであらうぞ、眉毛を脫上して試みに請ふ鋒鋩を露はす看よと即ち第百則の巴陵吹毛劒の公案を拈提せられたのである、脫の字は音サッて眼を活動させる意味であるそうな。

本則 擧天平和尙行脚時參西院。常云。莫道會佛法覓箇擧話人也無。漏一逗不レ少○道一渡是則是爭奈豐饒虫尾 一日西院遙見召云。從漪幾一向搭一了一也平擧頭箸○剛一盃公一案西院云。錯也須二是鐍一裏鍛過始得二○野腹龜一心○三一要印一開朱一點窄未レ容二擬議一主一賓分平行三兩步已是午前落一後○道一漢呢一盍洗二土塊一西

院又云、錯（好一腹劑心○人皆一喚作二兩一重公一案一殊不レ知似二水入一レ水如二金博一レ金）平近前、（依一前不レ知二落處一○辰一轉摸索不一着）西院云。適來這兩錯是西院錯。是上座錯（前箭箔一輕後箭深）平云。從漪錯（錯認二鏡一鞍橋喚作二鍫下一領○仍恁麼稱一僧打二殺千箇萬箇一有二什麼一頭）西院云。錯（譬上加レ霜）平休去。（錯認二定盤一星○果然不レ知二落一處一軒知個鼻孔在則人手裏）西院云且在這裏過レ夏。待共二上座一商量這兩錯了也（西院（常常容一梁硬似レ殿○常時何不二趕將出去一）平當時便行。（也似二稱一僧）（似則似是則未レ是）後住院謂レ衆云（貧兒思二酒債一○也須二是點過一）我當初行レ脚時。被二業風一吹到二思明長老處一。連下兩錯。更留我過レ夏。待共レ我商量。我不レ道恁麼時錯了也（爭奈這兩錯一何○千錯萬錯爭一奈沒交涉○轉見郎當慈殺人一）

天平和尚と云ふは相州天平山の從漪と曰ふて、青原下の法系に屬す地藏珪琛禪師の曾孫にあたり、達磨大師十六世の人てある。行脚の時に西院に參す、西院の思明禪師は臨濟大師の法嗣たる寶壽延沼の弟子てあるから南嶽下に於ける達磨大師十三世の法孫てある、然るに此の天平從漪と云ふ人は餘程自點胸な我慢の強い質て、自分は立派な悟りが開けたつもりてあるから、從がつて大方の宗匠だちをも輕蔑して居る、乃ち常に云ふ道ふこと莫れ佛法を會すと、箇の擧話の人を覓むるも也た無し、今の世の中に佛法を會した者は絕えて無い、古則公案を擧示することを知つた者さへ一人も無いと云ふ大氣焰てある、斯ういふ所て單に話とばかり云ふのは則ち古則公案のことてあつて、公案の參究ばかり主にして居る者のことを看話禪とも云ふのてある、着語に漏逗少なからずイヤハヤ疵だらけだナ、這の漢是は則ち是なれども靈龜曳尾を曳くを爭奈せん時弊を罵じるは好いけれども其う云ふ自分が未だ垢が拔けない、靈龜曳尾と云ふことは前に已に辨じてあつたと思ふ、つまり俗に頭かくして尻かくさずと云ふ意味てある、一日兩院遙かに見て召て云く從漪、從漪は即ち天平の名てある、着語に錢鉤搭索し了れりモー此れて天平の兜は西院の熊手に引かゝつてしまふた、平頭を擧ぐ、作家の漢ならば此て衲僧の機鋒をあらはさなければならぬのてあるに喚びつけられて平々凡々に頭を擧げるやうてはモー可けぬ、着語に着それ見ろ熊手に掛つてしまふたらうがナ、兩重の公案平生の廣言が一重の失策て今の擧頭が再度の失策じや、西院云く錯ォッと違つたぞ、此の一言て天平の胸板をグサリと突き透してしまふた、但この錯と云ふことを文字に

つきまとふては將錯就錯てある、喝とも咄とも呵々大笑とも三十棒とも參究して見なければならぬのてある、そこて着語に也た須く是れ鎚裡に鍛過して始て得べし西院の此の勘破は尋常容易に出來ることては無い、實に百煉の功を積だ上の機鋒てある、劈腹剜心西院老漢深切の蘊底を盡しての提携ぞ、三要印開して朱點窄し未だ擬議を容れずして主賓分る此れは臨濟大師が或時の上堂に、一人の僧が如何なるか是れ第一句と問ふたのに答へられた語て、臨濟錄には朱點側つとある、語意は宗乘の三玄三要を印判に暨へて、凡そ印判と云ふものは朱肉をつけて押しさへすれば、擬議に渉らず直に誰にもハッきりと判るものぞと云ふことて、今は西院の錯と云ふたのが實に能く臨濟大師の宗風を現はして居るとほめたのてある、然るに天平は未だ悟れない平行くこと三兩歩と活機輪を轉ずるやうな貌を見せた、着語に已に是れ半前落後てドチラへつかぬ曖昧の擧動てあるぞ、這の漢泥裏に土塊を洗ふ色々なことを仕れば仕るほどマヅクなる、西院又云く錯着語に益々劈腹剜心ぞと云ひ、又人皆喚て兩重公案と作す殊に知らず水を水に入るゝに似て金を金に博ゆるが如くなることを、前に錯と云ひ今亦た錯と云ふたのを兩重と思ふては

ならぬ、只是れ一等の錯て水を水に入れて前後の水を差別することの出來ないやうなものぞ、平近前す、此の和尚未だ目が覺めぬ、ヅカ〳〵と西院の前へ進んて往つた、着語に依然として落處を知らず何處までも錯と言はれた底意が解らぬ、展轉して摸索不着何うやつて見ても捉まへられぬ、西院云く適來の這の兩錯是れ西院の錯か是れ上座の錯かと深切に深切を盡して提携せられたけれども不咄嗶の天平まだ悟れない、着語に前箭は輕く後箭は深し此の一拶て天平は愈々首を打ち落されてしまふた、平云く從漪が錯なりイヤ其れは拙者の錯て御座ると何處までも自分免許の悟りを振り廻はすつもりてあるが、其れが皆眞箇のもので無いから致し方がない、圜悟は錯て驢鞍橋を認めて喚て爺の下頷と作す、此れほどの間違ひは無からう、驢馬の鞍の鞍骨は人間の骸骨の頷のやうな形をして居る、其れを見て此れが我が父の下頷てあると云ふたも同樣のことよ、怎麼の衲僧に似たらば千箇萬箇を打殺するも什麼の罪かあらん斯のやう瞎坊主打ち殺してしまへと罵る、西院云く錯何處までも普天率土只是れ一枚の錯てある、着語に雪上に霜を加ふ幾たび言ふても何の用にも立たぬぞと抑へる、平休し去る天平到頭西院の錯の落處を知ら

ずに退いてしまふた、着語に錯て定盤星を認む畢竟天平は已れに一つの僞見識があつて其れを杓子定規にして居るから、此て空く休し去るやうなことをするのである、果然として落處を知らず到頭合點がゆかぬのじや、軒かに知る儞が鼻孔別人の手裡に在り結局西院の捕虜になつてしまふたのであるから、殺さうとも活かさうとも西院の自由である、然るに西院の慈悲の甚だ深き西院云く且く這裡に在て夏を過して上座と共に這の兩錯を商量せんを待て、マー寛くりと此處て一夏安居して此兩錯の眞意を參究するが好いぞと涙のこぼれるほど有難いお諭してある、着語に西院尋常脊梁の硬きこと鐵の如くてあるに、當時何ぞ趕ひ將ち出し去らざる打ち擲つて逐ひ出せば好かつたにと云ふ、然るに此れほど西院の慈悲の深いにも感じがなくて平當時便ち行く、何の西院などがと云ふやうな我慢を逞しくして西院の座下を去てしまふた、着語に也た祇管に似たり其の便ち行くと云ふ姿が他人の後には附かないと云ふやうにも見えるけれども似たることは則ち似たり是なることは則ち未だ是ならず雪と鹽とのやうものよ、後に住院してと云ふは即ち天平山の山主になつた後に衆に謂て云く、天平が自分の門下に向つて昔話をしはじめた、着語に貧兒舊債を思ふ貧乏人が昔の借金を思ひ出したやうなアンバイであるが、也た須く是れ點過すべし審かに彼の兩錯を點檢して見るが好いぞと揶揄する、サテ其の天平の後悔話は我當初行脚の時に業風に吹かれて思明長老の處に到りて連りに兩錯を下さる更に我を留めて夏を過ぐし我と共に商量せんと待たしむ、我恁麼の時の錯と道はず我發足して南方に向て去りし時に早く知る錯と道ひ了れることを、此の話の大意を俗譯して見れば私が曾て西院に兩度まで錯と言はれた時に、此れは誰の錯ぞと西院が言ふたに依て、其れは私の錯てあると答へてあつたけれども、彼れは其時に始めての錯では無い私が最初行脚に出掛ける時にモー已に錯と言ひ了つてあつたので、我が錯は即ち盖天盖地の錯てあるぞと云ふアンバイに、門下の衆僧に對して昔の失策を失策とも思はず相變らず自點胸をやつて居たのてある、結局此の一則は徹頭徹尾失策を續けながら、自から失策とも知らずに似而非悟を振りまはして居る者の誡めとして雪竇がことさらに拈起して示されたるものと見える、着語に這の兩錯を爭奈何せん早く自ら知つたと云ふ自分の錯は且く置て、西院に兩度言はれた錯は何うてあるぞ、今以て合點がゆかぬの

てあらうがナと抑へ、兩錯のみか千錯、萬錯も沒交渉を爭奈せん天平自分免許の錯は設ひ千萬ありとも西院の兩錯とは千萬里の隔たりてあらうぞ、轉た見る郎當を、して人を愁殺せしむることを餘りに氣の毒て見て居れぬぞと排斥し盡してしまふた。

頭禪家流（漆桶一狀領過）愛輕薄（也有二些子一〇一跟一粗如一麻似一粟）滿肚參來用不着（只宜有二所處一〇方一木不レ逗二圓一孔一〇圈）與他（一作レ他同一音）堪悲堪笑天平老（天下納僧跳不出〇不拍二板一〇也得二入銕一圈）却謂當初悔行脚（去二行一脚已前錯）錯錯（是什麼〇雪竇已了一作レ何用二〇一字句下錯下二名言一了也）西院清風頓銷鑠（四院在二什麼處一〇何似生〇莫レ道四院三世諸佛天下老和尚亦須倒退三千始得二相見一〇於レ斯會得許レ個天下橫行）復云。忽有箇納僧出云錯（一狀領過猶較些子一）雪竇錯何（又出世〇據レ款結レ案〇總沒交涉〇且道舉レ竟如何〇打云錯）似天平錯（四院）禪家流輕薄を愛すと此れは三言二句てある、都べて何事ても誠實てなければならぬが、別して佛祖の大道を輕々に薄々に皮相觀て往けるものては無い、然るに唐宋の盛時に於ても已に此の彈呵があるので、禪家者流に限つたことてはあるまいけれども、今は別して禪僧に似而非悟を振りまはして居るのが多いとの歎息てある、着語に漆桶一狀に領過すイヤ誰も彼も同じやうな漆桶坊主ばかりぞ、一狀領過と云ふは衆人同罪と云ふ意味也、た些子ありる、佛を呵し祖を罵しる麻の如く粟に似たり大層な見識て釋迦も達磨も奴僕のやうに言ふて居るのが多いと、當時の虛僞の禪弊を誡められたのてあるが、今日はヤ其の弊さへに見聞することが稀れになつた滿肚參し來りて用不着、滿肚と云ふは俗に腹一杯と云ふこと、四方に行脚遊歷して飽くまて參禪し來つても皆輕薄て誠實が無いから、サー此處ぞと云ふ場合に臨んて何の用にも立たない、着語は只、宜く用處あるべし何處ぞて何かの用に立たなくては參じ來つた効が無いては無いか、げれども方木は圓孔に逗せず最初から輕薄な者は到底誠實の用には立たぬ、然かし閻黎も他と同參雪竇お前も其のお同伴かナとからかふ、悲むに堪えたり笑ふに堪えたり天平老と愈々天平の批評に取掛つた、彼の西院があれほど深切に提携してくれたものを何處までも我慢の角が折れないて失策に失策を重ねた有樣は、氣の毒でもあれば可笑もある、着語に天下の納僧も跳不出此れは天平に限つたて

とては無い、此の悲笑を免るゝ者は恐らくは少ないであらう、旁人の眉を攢むるを怕れず他人に厭やがられるのも知らずに自點胸を逞くして居る面憎くさよ、也た人の鈍悶を得たり只眉を攢むるばかりては無い、餘りの馬鹿〳〵しさに人が鈍悶するぞと云ふ、鈍悶と云ふは何となく心が悶えると云ふほどの意味と見える、人に其の通り笑はれたり悲まれたりするをも知らずに、却て謂ふ當初悔らくは行脚したるをと、此れは天平が最初發足の時に早く自ら錯と道ひ了つたのである、行脚の後に西院などから錯を聞いたのでは無いなどと馬鹿を言ふて居たことを言ふのである、着語に未だ行脚せざる已前に錯し了れりと天平の意を擧げ草鞋を踏破し一筆に勾下す此れは雪竇が只此の一句に天平を彈呵し盡した景況、そこで雪竇は別に錯々と言ひ出した此れは聲ほがらかに錯なるかな錯なるかなと諮ひ出したアンバイ、圜悟は評唱の中に這の兩錯は擊石火の如く閃電光に似たり、是れ他の向上の人の行履の處なり、劒に仗て人を斬るに直に人の咽喉を取て命根まさに斷ずるが如しと評してある、其の雪竇の機鋒亦た別段であることを知らねばならぬ、着

語に什麼と道ふぞ餘り聞きなれない變つた曲調であるぞと聞き咎め、更に雪竇、已に錯て名言を下し了れり元來言詮不及の境に向て錯々ても咄々ても苟くも言句を容れると云ふはハヤ間違つたことよと抑へる、西院の清風も頓に銷鑠す、西院が曾て兩錯を下したは如何にも清風颯々の佳境であるけれども、更に今この雪竇が錯々と諮ひ出したので、彼の颯々たる西院の清風も忽ちに吹き止んでしまふたぞと雪竇大層な大氣焰てある、何も此れが雪竇の自慢といふわけては無い、雪竇か彼の西院の兩錯を會して自分のものにして更に活動させた時には、十方法界の一切諸法皆悉く此の錯々となり盡して、頓に銷鑠せぬものは無いのである、楞嚴經には一人ありて眞を發して源に歸すれば十方虛空も銷殞すとあるも此の意味である着語に西院什麼の處にか在る西院は既に銷鑠して跡を絶てしまふたから行術が知れない、何似生その鎖鑠した有樣は何んなであらうかナ、道ふこと莫れ西院のみと三世の諸佛も天下の老和尚も此の錯々に遭ふては亦た須く倒退三千して始て得べし、斯に於て會得せば儞に許す天下に橫行することを此の雪竇の錯々が解れば宇宙萬象みな手の中じや復た云く忽ち箇の衲僧あり出て〳〵錯と云はん、此れは

雪竇の自問自答で先づ其の自問に、若しも此へ作家の衲僧が出て來て我が錯々と謠ふのを忽ちに奪ひ、更に我に向て錯と言ふものがあつたならば何うしたものぞと云ふのである、圜悟は、一狀に領過せん其れは同罪であるから同刑に處するぞと言ふ、又猶ほ些子に較れり、其の錯では未だ十分とは言はれまい、そこで雪竇自ら之に答へて云く雪竇の錯は天平の錯に何似、是れ同か是れ別かと參究を要する所である。圜悟は評唱中に更に參せよ三十年と言はれてある吾人豈猛省せざるべけんや、着語に西院又出世す雪竇の今の口つきは西院の思明禪師が再來したかと思はれるやうである、欵に據て案を結す先つ此れで裁判宣告が濟んだ、總に沒交渉結局何とも手がつかぬ、且く道へ畢竟如何と座下へ一拶して、打て云く錯とコヽで圜悟の一錯に雪竇も亦た銷鑠し、一切掃蕩し盡して始て天下泰平じや。

第九十九則　肅宗十身調御

垂示 龍吟霧起、虎嘯風生。出世宗猷金玉相振。通方作略箭鋒相拄。徧界不藏、遠近齊彰。古今明辨。且道是什麼人境界。試擧看。

龍吟ずれば霧起り虎嘯けば風生ずと云ふは、同氣相ひ求め同聲相ひ應ずる姿、即ち本則の肅宗皇帝と忠國師との機々投合の樣子を言ふたのである、出世の宗猷とは佛法と云ふこと、即ち忠國師の唱へられる所の宗乘は金石相ひ振ふ、如何にも陽春白雪の曲を聞くやうである、而も今肅宗皇帝を接せられる通方の作略は其の間に髮を容るゝ隙も無い樣子、恰かも彼の弓矢の名人と名人が互ひに放つた箭鋒と箭鋒が途中でカチリと相ひ拄ふたと云やうなアンバイ、此の活機輪は淨躶々赤灑々で徧界藏さず十方法界に其の光を輝がして居るから、遠近齊しく彰はれて何處に居ても能く見える、又古今明かに辨じて何時になつても判らぬと云ふことは無い、且く道へと前を承けて是れ什麼人の境界ぞ其の證據を試みに擧す看よと本則を提起する。

本則 擧肅宗皇帝問忠國師。如何是十身調御（作家君主大唐天子○也合知恁麼○頭上捲輪冠脚）

下無憂履國師云。檀越踏毗盧頂上行須彌那畔把手共行○猶有這箇在帝云寡人不會何不領話○可惜許○好彩不分付○帝當時便喝更用合作什麼國師云。莫認自己清淨法身雖然葛藤却有出身處○醉後即當愁殺人

肅宗帝と忠國師とのことは前の第十八則に大略申して置たことであつたが、肅宗は唐の玄宗皇帝の子で代宗の父である、國師の名は慧忠と申して六祖大師の法を嗣がれ肅宗代宗二代の帝師になられ、古今未曾有の優待を受けられた大德である肅宗帝は未だ皇太子で居られた頃から國師に參禪せられたので。モー此頃には自分が佛である自分の外に佛はないと云ふほどの程度に見識を据えて居られたかと思はれる、或時國師に問はれた如何なるか是れ十身調御、調御と云ふは佛陀の十號と申して德號が十種ある中の一つである、即ち此れは佛が一切衆生を自由自在に濟度なされるのを、調馬師が馬を調御するのに譬へたのであるが、今は單に佛と云ふも如來と云ふも同じことと見て宜しい、さて其の如來の身には大躰に於て法身と報身と應身との三身と云ふことも謂ひ、又は報身を更に自受用身と他受用身との二つに分けて謂ふこともある、自受用身は本より佛の自受用であるから、他の窺ひ得らるべき所では無いが、他受用と云ふは元來他の衆生を濟度するために現はす所の身であるに依て、只一合相の姿では千差萬別の機根に應ずるわけには往かぬから、乃ち十身と云ふ名も起るので更に應化の身に至りては千萬無量の身相をも現ずることになるのである、偖此の十身といふことは華嚴經に說かれたのが本據であつて、正覺佛と願佛と業報佛と住持佛と化佛と法界佛と心佛と三昧佛と性佛と如意佛との十である、斯ういふことは敎家に於ては中々むつかしい議論のあることそうなが、今この碧巖の上では無雜作に如何なるか是れ佛と問ふたも同樣に見て置て好いのである、着語に作家の君王いかにも御見識のほど感服の次第ぞと稱贊し、又大唐の天子也た合に恁麼なることを知るべし四百餘州の天子たるからには其の位な見識が無ければならぬはずじや、頭上の捲輪冠脚下の無憂履、左右の輪を卷きあげた冠を戴き一生不破穿の無憂履を踏むと云ふのは即ち天子の正裝を謂ふので、其の天子の正裝そのまゝに毘盧舍那如來の御姿とありがたく拜まれるぞと冷かす、國師云く檀越よ毘盧の頂上を踏で行きたまへ陛下とは言はず檀那と喚んで、御自分が十身調御の佛陀になつたと思し召すのであらうが、其のや

うな綴いことては可けませんぞナゼに其の十身の本躰たる毘盧舍那如來の頂上を踏て、モー一段其上を立ち塲になさらぬぞ、謂ゆる百尺竿頭さらに一歩を進めなされと言ふのてある、百尺竿頭さらに一歩を進めた處と云ふは如何なる處てあらうぞ、其處を立ち塲として活動せんければならぬのてある、檀越と云ひ又は檀那と云ふ皆梵語の陀那鉢底の訛略て、漢譯すれば施主の意味になる、唐朝以前に於ては出家の僧たる者が帝王に對して自から臣と稱したことが無いと同時に亦た帝王を陛下とも言はない、宋朝以後彼の僧史略を書いた贊寧と云ふ人などの頃から臣僧と言ひ始めて、契嵩などは殊に目立つほど臣僧臣僧と言ふて居る、日本ても弘法大師が少僧都を辭する表などにも貧道空海と稱して臣僧とは言はなかつた、毘盧は毘盧舍那といふ梵語を略したので漢譯すれば遍一切處すなはち無限の空間に充滿して居ると云ふ意味、謂ゆる宇宙平等の本躰に尊號をたてまつッた時に之を摩訶毘盧舍那如來と謂ふのてある、着語に須彌那畔に手を把て共に行く國はならぬぞと云ふのが國師の垂誡てある、今は其の如來とか佛とか云ふ處に腰を掛けて師が帝を導びいて更に向上せしむる樣子の形容、猶ほ這箇の在るあり、毘盧頂上を

通りぬけた處に猶ほ那一物がある、其處まて帝を引きあげて往くのじや、帝云く寡人不會、帝もサスガに國師に對しては睨と言はないて寡人と言ふた、其の毘盧頂上を蹈み越えて行くべき、其の歩きやうが未だ能く合點がゆかぬと言ふ、着語に何ぞ領話せざる解りそうなものてあるにナと云ふたやうなアンバイ、可惜許これが解らんては殘念なわけだ、好彩分付せず好彩といふは精細といふも同じことてコヽては委い意味てある、即ち國師がモッと委く言はれないては會せられぬのかナと云ふたのと見える、帝當時便ち喝すべかりしを、若し帝が本分の活機があつたならばコヽて大喝一聲國師を喝破すべきてあつたに、更に會を用ひて什麼か作さん毘盧頂上を蹈て行くと云ふ塲合に於て、會の不會のと云ふて居るべき所ては無い、國師云く自己清淨法身と認むること莫れ此れが即ち毘盧頂上の蹈み越えやうを指南せられたのてある、清淨法身と云ふは即ち毘盧舍那如來のことてあるが、肅宗は自分が即ち其の清淨法身てある、我の外に毘盧舍那如來は無いと云ふ見識てあるが國師は更に其の自身即佛と思ふのがハヤ大間違ひてある、自分に何の不足があつて更に毘盧舍那だの清淨法身だのと餘計な名をつけるのてあるぞ、其のやうな

ことを思ふて居るのが業く已に自己の外に佛といふものを認め法身と云ふものを認めて居るので、未だ眞實絶對の本分には契はないのである、一躰に此の本則の問答は傳燈錄の國師の章に出て居るのとは少々相違があるのであるけれども、雪竇は其れを斯う綴りて頌古の題にしたのであるから、本錄に立戻つて彼れ此れ云ふには及ばぬのである、着語に、然も葛藤なりと雖も却て出身の處あり、此の國師の答は餘りに老婆心切に過ぐるやうてあるけれども、サスガは國師てあるから、其間に自づから出身の要路がありて凜然犯すべからざるの機鋒が見えるとほめ、然しながら其の深切過ぎる所は醉後郎當と云ふ有樣て人を愁殺せしむ傍觀の吾々までが甚だ迷惑するぞと抑へた。

頌　一國之師亦強名（一箇半箇）　大唐扶得眞天子（上天下座作一生踏）　鐵鎚擊碎黃金骨（上天下作一生踏）　三千刹海夜沉沉（擔荷沙撒土）

一國の師と云ふも亦た強て名く、西京光宅寺の慧忠禪師ほどの高僧は一國四百餘州の天子の師てあるなどと云ふのも且らく假りに強て名けるまでのことて、其の實は至人に名なしと云ふわけて國師などと名けたからと云ふて、此人の名譽になるわけても何ても無いと諾ひ初めた、着語に、何ぞ必とせん實に國師と云ふ稱號などに必要はない、空花水月畢竟すべての名は空花の如く水月の如きものよ、然しながら風過ぎて樹頭搖くが如く其れだけの德があれば世人が自然に敬つて色々と尊號を奉つるまでのことぢや、南陽獨り許す嘉聲を振ふを南陽と云ふは國師所住の地名て、國師は南陽白崖山の黨子谷に住し四十餘年山門を下らずと傳に見える、即ち其の南陽の慧忠て嘉聲すなはち此上も無い名聲を天下に轟かして居られる、此れは今も昔も同じことて動もすれば人爵を重んじて國師とか大師とか云へば此上も無いことに思ふて、世間の富貴尊榮なる人々にヒョコ〳〵頭を下げる者の多いのを諷刺して、雪竇老人も序にお小言をいはれるのてある、果然として要津を

少不レ得○拈了也○還會麼○認二自己一已濟二淨法一身一

一國の師と云ふも亦た強て名く、西京光宅寺の慧忠禪師ほどの高僧は一國四百餘州の天子の師てあるなどと云ふのも且らく假りに強て名けるまでのことて、其の實は至人に名なしと云ふわけて國師などと名けたからと云ふて、此人の名譽になるわけても何ても無いと諾ひ初めた、着語に、何ぞ必とせん實に國師と云ふ稱號などに必要はない、空花水月畢竟すべての名は空花の如く水月の如きものよ、然しながら風過ぎて樹頭搖くが如く其れだけの德があれば世人が自然に敬つて色々と尊號を奉つるまでのことぢや、南陽獨り許す嘉聲を振ふを南陽と云ふは國師所住の地名て、國師は南陽白崖山の黨子谷に住し四十餘年山門を下らずと傳に見える、即ち其の南陽の慧忠て嘉聲すなはち此上も無い名聲を天下に轟かして居られる、此れは今も昔も同じことて動もすれば人爵を重んじて國師とか大師とか云へば此上も無いことに思ふて、世間の富貴尊榮なる人々にヒョコ〳〵頭を下げる者の多いのを諷刺して、雪竇老人も序にお小言をいはれるのてある、果然として要津を

一國之師亦強名（一箇半箇）　大唐扶得眞天子（上天下座作一生踏）　鐵鎚擊碎黃金骨（上天下作一生踏）　三千刹海夜沉沉（擔荷沙撒土）

頌

一國の師と云ふも亦た強て名く、西京光宅寺の慧忠禪師ほどの高僧は一國四百餘州の天子の師てあるなどと云ふのも且らく假りに強て名けるまでのことて、其の實は至人に名なしと云ふわけて國師などと名けたからと云ふて、此人の名譽になるわけても何ても無いと諾ひ初めた、着語に、何ぞ必とせん實に國師と云ふ稱號などに必要はない、空花水月畢竟すべての名は空花の如く水月の如きものよ、然しながら風過ぎて樹頭搖くが如く其れだけの德があれば世人が自然に敬つて色々と尊號を奉つるまでのことぢや、南陽獨り許す嘉聲を振ふを南陽と云ふは國師所住の地名て、國師は南陽白崖山の黨子谷に住し四十餘年山門を下らずと傳に見える、即ち其の南陽の慧忠て嘉聲すなはち此上も無い名聲を天下に轟かして居られる、此れは今も昔も同じことて動もすれば人爵を重んじて國師とか大師とか云へば此上も無いことに思ふて、世間の富貴尊榮なる人々にヒョコ〳〵頭を下げる者の多いのを諷刺して、雪竇老人も序にお小言をいはれるのてある、果然として要津を

南陽獨許振嘉聲（果然坐斷要津○千箇萬中難レ得ニ一箇半箇一）　曾踏毗盧頂上行（一切人何不ニ急一麼去○直得天一）　天地之間更何物（茫茫四海少ニ知音一○全身）　不知誰入蒼龍窟（三十一棒也）

南陽獨り許す嘉聲を振ふ（果然坐斷要津○千箇萬中難レ得ニ一箇半箇一）　曾て毗盧頂上を踏んで行く（一切人何不ニ急一麼去○直得天一）　天地の間更に何物ぞ（茫茫四海少ニ知音一○全身）　知らず誰か入る蒼龍窟（三十一棒也）

坐斷す實に國師の價値はコヽに在るのである、此の如き大德の高僧は千箇萬箇の中に一箇半箇を得難し、大唐扶け得たり眞の天子此の國師は唯に大唐四百餘州の國王の師といふばかりでは無い、實は十方法界無數の國土の大導師であるが、其の緒餘の仕事としては大唐の天子を二代までも扶け導いて唯に俗世界の仁君たらしめたばかりでない、眞諦門から見ての本統の天子即ち法王たらしめたこともある、着語に可憐生（カヽンセイ）國師に扶けられて眞の天子になつたとは其れは亦た意氣地のない氣の毒なことよ、接得して何の用をか作すに堪えん其んな人の扶けを受けるやうな者が何の役に立つと抑へる、曾て毘盧頂上を蹈んで行かしめたこともあつたと其の扶け得た樣子を言ふ、着語に一人の人何ぞ恁麼にし去らざる其れは大唐の天子に限つたことでは無い、誰でも毘盧頂上を蹈て行かねばならぬのであるぞ、其うさへ行けば直に得たり天上天下唯我獨尊であるが、上座作麼生か蹈まん貴公等は何（ど）うぢやナと座下への一拶、鐵鎚擊碎す黃金の骨と此れは肅宗が自身即佛と思ふて黃金佛を大切に抱いて居るのを、國師が自己清淨法身と認むる莫れと一擊して、其の黃金佛の骨までも微塵に打ち碎いてしまふた姿、着語に平生を暢快す其の打ち碎きやうの愉快さ言はんかたが無いコレで平生の欝憤がサラリと晴れたけれども己に言前に在り今更雪竇が其んなことを言ふのは遲い、天地之間更に何物かある、斯う國師に擊碎してしまはれた時には、宇宙茫々として一物も認むべきものは無い謂ゆる本來無一物の姿着語に茫々たる四海知音まれなりコヽに至りては霄漢に獨步するので前に釋迦なく後に彌勒（みろく）なし、全身擔荷只雪竇一人で脊負（せお）つて立つのかと揶揄する、然かし雪竇が其う彼れの此れのと言ふのがハヤ沙を撒し土を撒するので國師の本分を汚がすことになる、三千刹海夜沈々と其の宇宙茫々として一物も留めざる底の本地の風光を形容した、三千は謂ゆる三千大千世界の三千、刹は世界國土の義で其の刹が限りも無く多くある意味を海の字で示したのである、さて其の三千刹海が草木（くさき）も眠る丑滿時（うしみつどき）ともいふべき眞夜中（まよなか）で何の色も見えねば何の音も聞えない、コヽに至つては自身もなければ佛身もない頂上もなければ脚下も無い、着語に高く眼を着けよコヽ等閑に看過してはならぬぞと警醒し、封疆を把定す此の沈々たる夜景は決して他の犯すことの出來ぬ境界であると云ふ意味、儞が鬼窟裡に入り去らんを待つか若し此の夜沈々たる平等一相の處にば

かり住着してあつたならば、此れまた高等なる鬼窟裡に入ることになるが其れが雪竇の望みてあるかと言て、吾人に一轉路を開かせやうとするのである、知らず誰が蒼龍窟に入る此の蒼龍窟といふ語は時と場合に依て色々に使はれることがあるが今は全たく思量分別の深坑に陷いる形容てあつて、此の三千刹海夜沈々の靈境は決して思量分別を以て測り得べき處ては無い、苟くも思量分別智解情想をスッカリ奇麗に打ち棄てゝしまひさへすれば、自から此の本分の地に契當するのてある、然るに誰が蒼龍窟に入る者ぞと痛く誡めて、一切諸法を掃蕩し盡してしまふた、着語に三十棒一棒も也た少くこと得ず若しも其の蒼龍窟に入て思量分別に渉るやうな者があつたならば、三十棒を一棒も負かさずに打ちするぞと圓悟が蒼龍窟の門衛を勤める樣子じや、拈了也これて雪竇は此の公案を遺憾なく拈提し了つたが、還て會すや我が座下の面々には合點がゆいたかと拶着し、咄と蒼龍窟を咄散し、錯て自己清淨身と認むること莫れと更に學人を警醒せられた。

第百則　巴陵吹毛劍

垂示　收因結果盡始盡終對面無私元不曾說忽有箇出來道一夏請益爲什麼不曾說待你悟來向你道且道爲復是當面諱却爲復別有長處試擧看

此の垂示は前の第九十八則の垂示と入れ違つてあると云ふことは前に申した通りのことてある、然かし此れはヤハリ百則の提唱終結を告げる意味は同じことてあるけれども、本則の吹毛劍に親いことは前の第九十八則のがコヽに在れば適當てあるやうに思はれる、其れは左に右に因を收め果を結び始を盡し終を盡す、サテ雪竇頌古一百則の提唱も愈々此れて大團圓千秋樂と云ふことに成たが對面に私なく元曾て說かず座下の衆僧と相對して其間に一點の私情をさしはさます、已に千萬言は吐いた其儘に一語も其の說に住着しては居らぬ、唯一陣の清風颯々として大空を吹き去るが如きものてある、其風に觸れた草木人畜の側から見れば吹いた吹かぬと云ふことは有るてあらうが、清風其ものの方に於ては吹かうと云ふて吹くのては無い、觸れやうと云ふて觸れるのては無いやうなものぞ、然かしコヽへ

忽ち箇の一人ありて出で來り、一夏請益して什麼としてか曾て說かずと道ふあらば、此れは圜悟自ら問を設けたのである、一夏九十日の間多くの僧衆に請益を許して雪竇頌古一百則を種に、一代藏經も千七百則のすべての公案も悉く說き盡すほどに說て置きながら、元曾て說かずなどゝ云ふは其れは何う云ふわけかと問ふ者があつたならば、圜悟は其れに答へて你が悟り來るを待て你に向て道はんと答へるであらうぞと云ふ、到底此れは他人に敎へてもらうて會せられることでは無い、人々各々冷煖自知する時に到れば自づから此の曾て說かずと云ふ道理も會せられるであらう、且く道へ復た是れ當面に諱却すとせんか、復た別に長處ありとせんか、其の一夏の請益中に曾て說かずと云ふのは何ぞ說ては諱に觸れると云ふやうなわけで說かないのであるか、又は別に何ぞ說かない所に長處すなはち尊ぶべき點でもあると云ふのであるか、そこの處は本則の公案に參じて見ろと云ふので試みに擧す看よ、乃ち第九十八則の天平兩錯の話を提起せられたのである。

本則 擧僧問巴陵。如何是吹毛劍（斬咦）。陵云珊瑚枝枝撐着月（光呑萬象。四海九州）

僧あり巴陵に問ふ、岳州巴陵の新開院顯鑒禪師のことは前の第十三則にあつた通り、雲門大師の法嗣で當時屈指の大宗師である、如何なるか是れ吹毛の劍、此れは人々具足箇々圓成底の般若の智劍を世の吹毛の劍に譬へて問ふたのであるが、其の據り所は臨濟大師が吹毛用ひ了りて急に須く磨すべしと言はれたことがあるので、此のやうな問案も起つたのであらう、吹毛の故事は今委く言ふて居る暇は無い、つまり毛を吹きかければ其毛が直に切れてしまふほどの銳利なる名劍と云ふことである、吾人の心性も亦た其の通りに銳利なるものであるから智劍とも云ふのであるが、其の使ひやう一つで地獄の刀山劍樹にもなれば極樂の彌陀の利劍にもなる、然るに今此の僧は能く其の使ひやうを知ての上のことやら何うやら、とにかく巴陵の目の前へキラリと吹毛の劍を提出した、着語に斬それ斬られてしまふたぞ、咦ウフヽンと冷笑した氣味、陵云く珊瑚枝上月を撐着す、何とも手の着かぬ奇麗な一句で、彼の僧の振りかざして居る吹毛の劍をヒラリと打ち落してしまふた、佐々木岸柳とか宮本武藏とかやうな劍客が、三尺の秋水とも云ふべき大刀を以て、只一打ちにと切りつけてきたのを、美くしい少女が輕羅の小扇を以て流螢を打つや

うに其の利腕の急處を打つたやうなアンバイじや、元來此の句は禪月大師の詩の句てあるそうだが、今こゝては何の意味とも義理をつけて思量分別するわけには往かぬ、少しても分別に渉ればモー千里萬里の隔たりとなる、只々如何なるか是れ吹毛の劍、珊瑚枝上月を撐着すと參じ去り參じ來りて豁然啓發する時を待つの外は無い、着語に光、萬象を含むと月に就て劍光の斗牛を射る姿を讃歎する、四海九州照さぬ隈は無いぞと云ふ。

頌　要平不平（ソント）　天照雪（テラス）　大冶兮磨礱不下（ダヲ）　良工兮拂拭未歇（ヤマ）　珊瑚枝枝撐着月（ツクヲ）　或指或掌（ニモ）　倚（ヨル）

不平を平げんと要す、古人の語に劍は不平の爲めに寶匣を出づと云ふことがある、今巴陵は此の僧の心海未だ平かならざる所あるを見て取て、此に太平無事の快樂を與へやうが爲めに珊瑚枝上月を撐着すと平穩無事の妙藥すなはち少しも知解情量に渉ることの出來ない光景を示された、着語に細なること、蚊蝱の如し、蚊蝱と云ふは蝱蟻の頬て甚だ細小てありながら如何なる堅い土ても木ても穿つやうに、今此の巴陵の答話も甚だ優美柔和のやうてあるが其の斬れることは干將莫耶の寶劍も及ばぬぞとの讃歎、大丈夫の漢須く是れ恁麼なるべし苟も人の師たらん者は必らず巴陵のやうにありたいものてある、大巧は拙の若し此れは老子の語て大智は愚の如しだの大辯は訥の如しだのと云ふ句と並べられてあるのて、何れも皆極めて勝れたものは甚だ劣つたやうに見えるものぞと云ふことてある、今巴陵が吹毛の劍に對して珊瑚枝上月を撐着すと彼の僧の頭をスバッと斬り落した手際は餘りに美くて斬れたのか斬れないのか見分けが附かないから、全く劍術を知らないのてあるかと思はれるやうてあると極端に稱讃した、着語に、聲色を動せず巴陵の手際は少しも聲色に露はれないから見とめることも聞きわけることも出來ないのである、身を藏して影を露はす拙なやうな所に身を藏しても其の大巧の影は自然に見える、或は指に或は掌に凡そ劍術を能く使ふ人は其の劍を指の先て使ふこともあれば手の平て使ふこともあり自由自在に劍を活動

かせる、着語に看よ、今現に人々各自の劍は指の先に在るか手の平にあるか氣をつけて見ろ、果然として這箇不是、若しも指掌の間に劍を求めやうとしたならば已れの首が飛ぶであらうぞ、天に倚て雪を照らすと此れは巴陵の劍光のすさまじい有樣、さなきだに拔けば玉ちる氷の刃が朔風凜烈たる、寒さの空に降り積りたる白雪を照らすと來ては實に身の毛もよだつ倭館さては無いか、着語に斬それ斬れたぞと般若の智劍の活用を示す、然りながら覩着すれば則ち瞎す、若し此劍を見やうと思ふ分別が起つたならば直に盲目になるから恐ろしい、然らば此劍は如何やうに取扱ふたならば好いてあらうかと云ふに、大冶も磨礱し下ず、良工も拂拭し歇まず、大冶と云ふも良工と云ふも共に刀鍛冶の名人と云ふこと、日本て云ふたら三條の小鍛冶でも正宗でも、磨がうと云ふて磨げるものでも無ければ、拭ふと云ふても拭へるものでは無い、畢竟各自の心性は各自の磨鍊に依るの外は無い、謂ゆる冷煖自知てあるから釋迦に悟らせてもらふことも出來ねば、達磨に見性させてもらふはけにも往かぬ、着語に更に鍛煉を用ひて什麼かせん、本來明煌々たる寶劍ては無いか、且つ干將も能く來るなし設ひ干將ほどの大冶良工ても此の寶劍の前へ來ることは出來ぬ、人能く行くなし誰ても寄りつくことは出來ぬ、直饒干將出て來るもまた倒退三千、此の一語はモー餘計てある、そこて雪竇は別々と揚言する、實に巴陵の機鋒は全く他人と同轍ては無い、着語に咄と叱りつけて置て什麼の別處か有らん人々具足箇々圓成十方法界只此の寶劍ならぬ所は無いと尊び、更に讃歎するに分あり、然かし其の別々は中々面白いぞと贊成する、然らば其の別な所は何處に在るかと云ふに瑚珊枝上月を攀着す、此れが別ぢやと、再び巴陵の茶話を擧げて、雪竇自家の提唱とせられた着語に三更月落ちて影寒潭を照らすと此れは圓悟が別々の拈提ぢや、珊瑚枝上の月と三更寒潭の月と是れ同か是れ別かと參じて見ねばなるまい、且く道へ什麼の處に向てか去るサテ其の劍は今何處へ往てしまふたやら、直に得たり天下太平なることをモー誰も犯すことは出來ぬぞ、醉後郎當として人を愁殺す雪竇が巴陵に醉ふて餘計なことを言ひ過ぎる其の爲めに此の圓悟までが色々と餘計な心配がましたぞと、此の一語は衆ねて雪竇頌古一百則に對する惣着語の氣味がある。

さて雪竇頌古一百則、圜悟の垂示と着語を併せて、おぼつかなくも扶籬摸壁しつゝエイやらやつと終結に及んだが元來吾々の口や筆にかけ得らるべきものでは無いのであるから、必ず其人を待つて指示を受くべきはずであるけれども、如何にせん專門家の提唱は門外の人には容易に解らず、昔からある色々な解釋も專門家が專門家に對した提唱ばかりで、吾々の看るべきものは一つも無い、已むを得ずして請ふ隗より始めよと自から推薦して、素人講釋の皮きりをしたのであるから、一人なりとも之を幾分かの枝折にして更に益々寶の山の奥ふかく進みゆく人も出來てくれるやうであつたならば、己れは此の宗乘を攪亂した罪業を以て無間地獄の苦報を受けても、喜んで閻老の宣告に服さうと思ふ、衆慈久勞珍重、

明治三十九年七月六日夜半閣筆

藹々青巒

碧巖集講話終

附錄

普勸坐禪儀講話

藹々　大内青巒講述

此の普勸坐禪儀と申すものは、僅かに七百五十六字しか無い、甚だ短かな文章では有るけれども、曹洞宗の高祖承陽大師一生五十四年の御化導、正法眼藏九十五卷の御撰述も、叡山に建仁に育王に天童に多年支那日本の御修行も、興聖永平兩山の御創立も、皆唯この普勸坐禪儀を御實行なされた外は無いので、有らゆる曹洞宗の眞俗二諦の仕事は、皆この普勸坐禪儀を種々樣々の方面から種々樣々の姿を以て實行するまでの事と申して宜しい、若しも亦た此の普勸坐禪儀の精神に外れたことで有たならば、如何なる美擧でも善事でも其れは曹洞宗に要のないことであると申さねば成らぬほどのことである、ソコで今此の坐禪儀の大要を講述しやうと、いふに就ては、誰も一通りは知て居ることながら、承陽大師の御履歷をザッと申すのが順序であると思ふ、

サテ承陽大師の御履歴と申すは、御名を道元と云ひ又は希玄とも稱せられ、比叡山に居らせられた頃には、房號を佛法房と仰せられた御樣子で、後々までも餘處からは佛法房の上人などと申したこともあると見える、御實家は清華の公卿の隨一たる、今の侯爵久我家がまだ土御門家と申された頃、御父は即ち土御門内大臣通親公と申し、村上天皇八代の皇孫であるが、村上天皇の御子に中務卿具平親王といふ宮樣が在らせられ、其のお子に始めて源氏の姓を賜はつたのが、即ち村上源氏の惣本家で、此外にも嵯峨源氏だの清和源氏だのといふのが幾らもある中にも、源氏の長者といふ名譽の職は必らず久我家に於て勤められ、即ちサテ又承陽大師の母公は攝政太政大臣性寺入道前關白太政大臣藤原基房公のお娘てある、基房公といふは、法家督相續せられたので有るから此れは正しく藤原家の惣本家てある、即ち今の九條一條二條近衞鷹司などといふ藤原氏の諸公爵家も皆この基房公の御舍弟だちから分れた家筋てある、承陽大師は斯る御兩親の間に於て、土御門天皇の正治二年庚申の正月二日といふに、京都土御門のお邸にお生れなされた、恰かも此年は鎌倉の右大將

頼朝が薨去た前年で、ことし明治三十九年から遡に數ふれば七百零七年前のことてある、然るに御不仕合なことには三歳の年に父公がお薨去なされ八歳の時に母公にもお別れなされた、ソコて其後は兄公の堀川大納言通具卿の御育に預からせられたが、稍御成長の後には母公の兄御で時の關白職てあらせられた藤原師家公が、是非とも養子に貰ひたいと仰せられ、已に藤原家へ御入りといふことに成たけれども、大師は兼ねて母公の御遺言もあり、且つ御自身にも痛く無常を觀じて居らせられたことてあるから、攝政關白の職に就て現世のみの人民を撫育せるよりは、出家得道の身となりて、未來永劫の一切衆生を救濟しやうぞとの御發願は、月卿雲客の富貴榮華を願りみる御心なく、遂に御養家を遁げ出して比叡山に登り、公圓大僧正のお弟子に成らせられたのは、十四歳の時てあらせられた、其れから二三年の間は天台宗の遮那業止觀業などといふやうな御修行に、夜を日に繼いて御勉强あらせられたけれども、佛法第一の肝要たるべき、法身自性といふことに就て、當時比叡山の高僧知識だちも、大師の質問に應答を與へるものが一人もないので、更に三井寺へ往て尋ねられたが、公胤僧正のお指圖て建仁寺の榮西禪師の處へ往かれることになり、始めて大師の大疑團

を氷解させる端緒は開けたかと思ふうちに、其の榮西禪師も程なく入滅せられたので、己むを得ず兄弟子の明全和尚と共に支那に渡り、三四年御經歷の後に、始めて天童山景德寺の長翁如淨禪師に參見し、遂に廢詞迦葉尊者以來嫡々相承五十一代の法脈をお傳へなされて、後堀河天皇の安貞二年に御歸朝になり、暫らく建仁寺に御滯留の折から、先づ第一に佛祖單傳の正法たる只管打坐の正儀を勸められたのが、即ち此の普勸坐禪儀であるから、此の普勸坐禪儀は取も直さず我が國に於ける曹洞宗の立宗開敎を示させられた御本書と申さねば成らんのである、其れ故に大師一生五十四年間の御事業、殊に正法眼藏九十五卷も廣錄十冊も大清規も用心集も、皆悉く此の普勸坐禪儀の註解末疏と申しても宜いのである、ソコで先づ最初に題號を申して見れば、

普勸坐禪儀

の五字を一字づゝバラ〳〵にして見るのが早く分る、普の字はアマネクと訓む字で、出家も在家も僧も俗も智者も愚者も皆隔てなく、誰も彼も悉く坐禪を勸めよといふ意味をアマネクといふ普の字一字に含ませられた、次に勸の字は勸誘と續いてス、メ、ミチビクことである、一口に佛法とは申すものゝ、謂ゆる八萬四千の法門といふのて、種々樣々の修行の仕方を設けられてあるが、其の中で今は專らに坐禪を勸められるのてある、然らば坐禪といふは如何なることかといふに、此れは禪の字の方を先に話すのが便利てあると思ふ、禪の字は天竺の語て禪那といふのを略したので、禪那といふことを支那の語に直せば靜慮といふことになる、靜はシヅメル慮は思慮だの念慮だのといふ時の慮の字て、心の動き働らくこと、即ち惡いとか可愛いとか惜いとか欲いとかいふ心の作用、それを靜とシヅメて騷がないやうにするのが謂ゆる禪那てある、然るに此の心の作用といふものは、何から起るかといふに眼に物を見たり耳に音を聞たり鼻に香を嗅いたり舌に甘い辛いを味はふたりする所から起るのてある、から、要する所は五尺の身體があればこそ種々樣々の心の作用も起るのてある、去ればといふて心の作用が無いほどのことならば身體のある効もないので、其れては死人も同樣、木像の坊と何の異りもないことになる、ソコデ此の身體と心の作用との調和を計るのが、何をするに附けても一番に肝要なことゝなる、ソコデ心の作用を靜めて妄りに騷がさないやうにするには、是非とも先づ身體を落ち着けるといふことが肝

要になる、然らば如何して身體を落ち着けるかといふに、起て居ても歩行て居ても臥て居ても坐つて居ても、身體に落附が着いて心に騒がしい所が無くさへなれば其れて好いのであるから、行も亦た禪、坐も亦た禪、語默動靜體安然とは申すものゝ、十人が十人まで誰でも間違ひなく、殊に初心の人には尤とも大切なのは、謂ゆる坐てある、スルトいふことが一番に體安然になり易いのである、ソコて禪は概ね坐を以て行なふのが釋迦如來初め佛々祖々の正傳てあるから坐禪といふことが何より大切の行法となるのてある、仍て今承陽大師は其の佛々祖々正傳の行法なる坐禪を僧俗男女智愚利鈍を問はず、誰にも彼れにも法の如く修行せよと御勸めなさるのてあるから、即ち、普勸坐禪てある、サテ又儀の字は儀式とか威儀とか禮儀とか積く字て物事には皆それ〳〵に其の姿容の上に整頓する所がなければ成らぬ、其れを儀といふ、即ち坐禪するには坐禪をする規則が有て、其の規則に順はんければ、決して其の儀容すなはち坐禪の姿が立派に成立たない、其れが此の儀の字は天台四教儀などゝ云ふ例も有て、文書の名だけに用ゐられたものと見ても差支は無いけれども、今は其うてなく普ねく坐禪の儀を勸めるといふ意味に見た方が、普

ねく坐禪を勸めるの儀と見るよりも好いかと思ふ、先づ題號のことは此位のことにして置いて、次に本文てあるが此の普勸坐禪儀の本文を講ずるに就ては、先づ最初に其の文躰を知るのが肝要てある、サテ此の普勸坐禪儀は同じ漢文の中ても、謂ゆる四六文といふので、支那の六朝の頃から專ら世の中の流行に成た文躰であるから六朝文とも曰ひ、又その句作りが必らず字數を揃へて對句にする、即ち句と句とが二頭曳の馬車の馬のやうに、二つ宛並べて行く姿から謂ふたときには、之を駢儷躰とも曰ふ、駢は馬が二つ並んだ貌てある、かやうな文躰が六朝頃から大流行て、梁の武帝の子てあつた昭明太子などが骨を折て集めた文選といふものなどに載せられてあるのは大抵みな此の四六文てある、ソコて唐の世に成てからも白樂天などといふ人は、多く此の四六文ばかり書いたのて有たが、韓退之や柳宗元などが出てから、頻りに此の駢儷躰を排斥して、論語や孟子などのやうな文躰即ち古への散文を書き始めたので、其後支那の方ては苟くも文章に志ざす者は必らず古文を學ぶといふことに爲たけれども、我が日本ては韓退之や柳宗元などよりも先きに白樂天が大層に尊とばれたので弘法大師なども全たく白樂天流義の四六文ばかり書き、入

唐せられた頃には丁度韓退之や柳宗元の存命時代であつたけれども、遂に古文をば學ばれなかつたと見える、ソコて其後の昔相丞だの大江匡房だのといふ人だちも、やはり四六文ばかり書き、從がつて我が佛教界に於ても三國佛法傳通緣起だの八宗綱要だのを書いた凝然大德なども、大層に骨を折て四六文て書かれたやうなわけて、其の中て元亨釋書を著はした虎關和尙だけは春秋や左傳などを眞似て古文を書れたけれども、一般に行はれるわけには往かなかつたと見えて、今日に至るまても僧侶の文章といへば、必らず四六駢儷躰に限る樣てある、尤も品に依ては韓退之ても柳宗元ても四六文は書たのて強がちに四六文は惡いといふわけて無いのみならず、佛教界に常に必要な祭文とか歎德文とか號とか香語とかいふやうなものは、却て四六文の方が好いのてあるけれども實に此の坐禪儀のやうな即ち普勸を目的としたものなどは、古躰の散文て自由に書て下された方が好かつたと思ふ、去りながら承陽大師の時代には、日本て古文などを書く人は一人もなかつたのて有るから、非常に骨を折て四六躰にも書きなされたものと見える、大師が最初これを御書きなされたのが二十歲の時て、其後追々に改刪修正なされた御樣子て、現に永平寺に秘藏せられてある普勸坐禪儀の親筆の御草稿と、現行の文とは餘程の相違があるサテ何故に斯る文躰の事などを呶々と言ふて居るかといふに、都べて此の四六文といふものは、前に申した通り必らず句の字數を揃へ且つ必らず對句にするのてあるから、字數を揃へるために、無くても好い字を強て入れることもあれば、又無ければならぬ字を拔いて畧することもあり又對句にするために、言はずも好いことを強て言ふことも有るのてあるから、散文のやうに必要な文字ばかり並べたものとは大に其の樣子が違ふ、其れを心得ずに此の坐禪儀のやうなものを讀むと、文字のために其の意味を解し違へたり、又は餘計なことに冗勞を折ることが多くある、ソコて此の文躰論をするのが必要になつたのてある、且つ又序に若い人だちなどが文章の稽古をする上に就ても、大に心得べきことてあると思ふたに依て序ながら申したことてある、次に愈〻本文、

道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費功夫。

先づ本文の冒頭第一に佛〻の道本、祖〻の宗乘は天眞爛熳なものて、法然法爾天然自然に具はつたもの、決して作り拵らへられたものて無い、宇宙萬象天地萬物みな

其の有りのまゝが、佛々祖々の大光明てあるといふことを言ひ顯はされたのてある、世の中の多くの人々は此の道本の本の字をモトと虛字に訓て居るやうすてあるが、此れは次の宗乘といふ二字に對するのてあるから道本と音て訓むが好いと思ふ、尤も此本の字も次の宗乘の乘の字も、意味に於て、用の無い字て、用のあるのは道の字と宗の字とばかりてある、此れも道か宗か片方て好いのてあるが、ソコが四六文の癖て是非とも對句にせんければ成らぬに依て、同じことを二つ宛並べたものてある、就ては此の道の字と宗の字を別々に別けて言ふて見れば、道といふは天竺の語て菩提といふのを漢語に飜譯して道といふのて、委しく言へば阿耨多羅三藐三菩提といふのを、無上正等覺とも無上正偏智とも飜譯するのてあるが、其れを今は一字に約めて道といふた、本は本躰といふことて、此の謂ゆる道が宇宙萬象の本躰てあるに依て、之を道本と謂ふ、即ち十方三世の一切諸佛は皆この道本を得て、自分に用ゐて自由なるのみならず、能く一切衆生に施こして綽々として餘裕がある、然らば其の道本は諸佛に限つたことて有て、諸佛が何處からか得て來たのて有るかといふに、決して其うては無い、道本圓通て、宇宙萬象天地日月山川草木人畜等に至るまて、皆この道本の顯はれて働らく姿に非ざるはない、圓通といふことは長水和尚が楞嚴經の註に性躰周偏なるを圓と謂ひ、妙用無礙なるを通と云ふと云ふてある、性躰といふは天地萬物の本性本躰は周偏と申して、何處から何處までといふ限りなく、何時から何時までといふ限りなく、盡十方界に滿ち渡つて居るといふこと、例せば火の本性本躰は盡十方界に滿ち渡つて居るに依て、マッチを摺りさへすれば何所ても火が出る何時ても燃え上るといふやうなわけ、是れが圓の字の意味、次に通の字の妙用無礙といふは、妙は不可思議に名くといふて、何とも彼とも詞て言ひやうもなければ心て考がへやうも無いといふこと、用は作用といてハタラキといふこと、即ち天地萬物みな不思議な作用が有て、其の作用が無礙と申して、何所といふ限りなく、何時ても何處ても、其の作用を自由自在に顯はすといふので前に例に引た火の性躰が何處ても何時ても滿ち渡つて居ると同時に、其の作用も亦た何處ても何時ても自由自在に燃え廣がつて、九重の大奥の畏こき御あたりの埋火となつても富貴に誇るてもなく、賤が伏屋の風呂釜の下に塵塚から拾はれて來た古下駄に燃え附いても、貧賤を悲しむといふてもなく、妙

用無礙の光明に隔たりは無い、既に其の性躰は周偏て其の妙用は無礙なもの即ち圓通てあるに依て、諸佛に在ても増さず衆生に在ても減らず、宇宙萬象みな平等一味なものであるから、爭て修證を假らん、何も別段に修行をして其の修行の力に依て始めて此の道を證するといふわけの者てはない、人々各自天然自然に生れながらに具へてある所の阿耨多羅三藐三菩提の道本てあるぞよと仰せられた、修證の二字は常に言ひ習はして居るだけに分つたやうて確かに分らない字面てあるが修の字は伽藍の修復だの道路の修繕だのといふ時の修の字て、本々から其うあるべきはずのものが、破れたりしたのを取り繕らふて本の通りにすることを修といふのてある、證の字は證據だの證文だのといふ時の證の字て、タシカに其れに相違ないといふ所の見留めの附いた姿てある、即ち破れた家を修復して確かに本の通りに出來あがつたのが、即ち修證てあるが如く、今この佛法も吾々も互ひが法然法爾に具へてある所の本性本躰謂ゆる道本は本來圓通てあるに依て、即ち少しも破れた所のない家の如きもので何も不足が無いからには、修だの證だのといふ沙汰は要らぬことてあるといふのてある、サテ次の二句の宗乘自在何ぞ功夫を費さんやといふのは、前の二句と同じ意味を語を換へて繰り返してまでのことと、但し強て字義を申せば、宗の字は宗家と續いて本家といふ意味の字てある、本家といふは別家または末家といふのに對して、先祖の嫡流が相續して居る家といふことてあるから、其の意味が一轉して、何事にもせよ一番に敬ひ尊とぶ所といふ意味になり、其れが更に一轉して、達磨門下の教法を指す詞に成たのてある、尤も此の宗の字は外の流義ても天台宗とか華嚴宗とかいふやうに今ては何處ても使つて居り、昔ても禪宗に限つたわけても無く、殊に近來は宗教と續けて他教までも惣稱する語になつたけれども、宋朝頃から明時代頃までの書物などには、此の宗の字を教の字と並べて、教と云へば禪宗てない諸宗のこと、宗といへば必らず禪家のことに用ゐたことが多くあるので、例へば人の評判をするのも彼の人は教眼は開けて居るけれども、宗眼は未だ明らかて無いなどと云ふやうに申したので、宗といふ字を全たく禪家だけのこととしてあるのが多いから、其頃の本を讀む時に其の心得が無いと、ちよつと氣迷ふことがあるぞ、ソコデ今こゝに宗乘と言はれたのも、全たく達磨大師單傳の流義謂ゆる教外別傳不立文字直指人心見性成佛といふ所の正法

眼藏涅槃妙心を宗乘と謂はれたのである、然らば其の謂ゆる正法眼藏涅槃妙心といふのは、何ぞ別に達磨大師以來禪宗にだけ專賣特許の品てもあるのかといふに、決して其うては無い、前に謂ふ所の圓通なる道本之を祖師門下に於ては或は宗乘といふこともあるまでのこと、サテ又其の宗乘は如何にして之を得るかといふに、元來自在なもので、人々各自手に在てては執捉し足に在ては遲奔す眼ありて色を見る耳ありて聲を聞く、歷々分明すこしも他のお世話に與かるべきものては無い、謂ゆる自由自在なものであるから、何ぞ工夫を費やさん、別に工夫を費やして何うしたならば眼て物を見ることが出來るてあらうぞ、何うしたならば耳て聲を聞くことが出來やうぞと心配するにも及ばない、飢え來れば飯を喫し困じ來れば眠る、生來れば生に任せ死來れば死に任せ、花は花に任せ、月は月に任せ、天下泰平この上も無いぞといふのである、工夫といふことを世間て多く間違へて居るかと思ふ、此れは宋朝頃の俗語て、功は功勞なり、夫は扶助なりと古人が註したのも有て當節の語て勉強するとか骨を折るとかいふ意味てある、其れを何時の間に何處て間違へたやら、今ては工夫といふことを心の中て色々と考へて見ることのやうに思ふたものてあるから、遂に古則公案を工夫するといへば謎ても解くやうな氣になつて、あーだらうかこーだらうか、其うてもあるまい、どうしたら好からうなと思量分別することのやうに思ふた、是れが抑も禪宗の大弊の由て起る一大根源てあらうと思ふ、今は全たく勉強する意味または骨を折ることて宗乘は自在てあつて、歩かうとすれば足が自然に動く、今度は右の足を前へ出したから此次は左の足を出さなければ成るまいか、間違へないやうにしたいなどと、心配して歩くべきものては無い、實に妙用無礙に起つも坐るも行くも止まるも自在てある。

況乎。全體逈出塵埃分。誰信拂拭之手段。大都不離當處分。豈用修行之脚頭者乎。

此の兩對四句は、前の道本の圓通にして宗乘の自在なることを確かめる爲めに、古人の格言を證據に引いて、修證を假るべきても無ければ、工夫を費やすべきても無い天眞爛熳に宇宙萬象そのまゝ道本宗乘の圓通自在なる樣子を言はれたのてある、乃はち全體といふは宇宙萬象有情非情丸こかしに其儘清淨無垢なもので、迷ひ

だの煩惱だのといふことを離れた姿であるといふことを迥かに塵埃を出づと言はれた、此の塵埃といひ又これに續いて拂拭の手段と言はれたのは、誰も能く知つて居る曹溪の六祖大師が黃梅の五祖大師に傳法せられた時の故事である、五祖大師といふは達磨大師五代の法孫て、黃梅山といふ處に於て五百人の弟子を敎養して居られたことて有たが、其の中て誰れか一人を擇んて達磨大師六代の嫡孫たる祖師の位に即かしめたいものて有ると思はれ、一同の弟子だちに向ひ、誰なりとも偈を作りて己れの悟りを言ひ顯はしたのが、此の老僧の心に契ひ佛心印を傳ふるに堪ゆると認められた者が有たならば、其の者に達磨大師傳來の衣鉢すなはち袈裟と鐵鉢とを授けて、第六代の祖師位を繼がせることに仕やうと思ふ、誰も彼も其の積りて眞實に修行をするが好いぞと言ひ渡された、然るに此の五百人の弟子の中て常々から上座と仰がれて居る神秀と云ふ人が其の言ひ渡しを聞くと、直に一首の偈を作つて、之を直に五祖大師には御目に掛けないて、廊下の壁に張り附けて置いて、一同の人々に見せ且つ自然に五祖のお目にも留るやうに仕掛けて置いた、そこて誰も彼も皆その壁に張り附けてある偈を讀て見て、今度達磨大師の衣鉢を受けて第六祖と仰がれるのは、此の神秀上座の外は有るまいと云ふて評判して居たが、是れより先き嶺南の獵師あがりてあるといふ田舍男が一人、五祖のお弟子に成りたいと云ふて來たのを五祖が米搗を言ひ附けて碓部屋へ逐ひ込んて置いたのが有た、此の男は元來無學文盲てあるとの評判て誰も相手にする者も無かつたが、今度神秀上座が偈を作つて達磨の衣鉢を授かるそうてあると云ふ噂を聞いて、彼の廊下へ往て見ると其の神秀の偈といふのは『身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ』といふ五言四句の偈文が、今度神秀上座が偈を作つて達磨の衣鉢を授かるそうてあると云ふ噂を聞いて、彼の廊下へ往て見ると其の神秀の偈といふのは『身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ』といふ五言四句の偈文て有た、此の偈の意味をザッと講釋して見れば、吾人は互ひ此の五尺の身體は、此れが直に菩提すなはち佛の道を成就すべき所の道具てある、さて又此の心といふものは明らかなる鏡のやうなもので、元來公明無私なもので有るから花が來れは花が映り、紅葉が來れば紅葉が映り、歷々分明すべて穢れの無いものてある、然るに其れほど明らかなる鏡も塵埃が積み重なれば其の光を失なふ如く、吾人の心も煩惱妄想の塵埃に穢されて本來の光明を失なふて居るのてあるから、時々に勤めて拂拭せよ、拂拭はハラヒ、ヌグフので、鏡の塵埃を拂ふやうに心の煩惱を拂ひ拭ふこと

を怠たらずに決して塵埃の溜らないやうにせねば成らぬと云ふ意味、即ち前の二句は道本宗乘の圓通自在なことを言ひ、後の二句は其の圓通自在を失なはぬやうにとの修證工夫を示されたのてあるから、普通佛法の上に於ては此れて十分なのてあるけれども、五祖大師が之をお許しなさらぬばかりて無い、碓部屋の米搗男も中々許さない、其の米搗男が其處に見て居た小僧を頼んて、自分の作つた偈を書いて貰つて、彼の神秀上座の偈の傍へ張り附けて置いて、元の碓部屋へ歸つて相變らず、米を搗いて居た、然るに其の書役に頼まれた小僧が一同へ吹聽したものと見えて、此間までは嶺南の狩入て今は黄梅山の米搗男が五百人の上座たる神秀和尚の偈を馬鹿にして、其傍へ自己の偈を張り附けたといふので有るから、サアー吾も吾もと皆見物に出掛けた其内に其事が五祖大師のお耳にも入つて、大師も廊下へ出て御覧なさると、其の米搗の偈はコーだ『菩提もと樹に非ず、明鏡また臺に非ず、本來無一物何の處にか塵埃を惹ん』と書いてある此れてこそ眞實達磨の嫡孫たることを得るのてある、此の偈の意を略して言ふて見れば、身は菩提樹てあるの、心は明鏡臺てあるのと云ふけれども、元來その身だの心だのと云ふものを認めて居る

のが抑〳〵間違ひの根本てあると云ふ意を、菩提が樹てもなければ明鏡が臺てもも無いぞと神秀の語を以て鸚鵡返しに擲げ附けた、其の上に時々に勤めて拂ひ拭へとか塵埃の溜らないやうにしろとか云ふけれども、元來その塵埃などの溜るべき物が何もないのてあるぞと言ふのてある、五祖大師は此偈を御覧なされて、其夜ひそかに碓部屋へ往かれて、達磨大師より五代相承した袈裟と鐵鉢とを彼の米搗男に授け、即ち第六代の祖師となつて佛祖の眞風を擧揚すべきことを命ぜられた、其の米搗男が即ち曹溪山寶林寺の六祖慧能大師と仰がれたので、禪宗の五家七宗すべて達磨大師を初祖と仰ぎはするやうなものゝ、其の實は今の臨濟も曹洞も都べて此の曹溪六祖の家風を傳承したのてある、今承陽大師は其の故事を此處へ引いて御座つて、全體適かに塵埃を出づ、もと〳〵塵埃などが無いのてあるから、誰か拂拭の手段を信ぜん、拂ふの拭ふのといふ餘計なお指示を誰れが受けるものかと言はれたそこて次の二句はモー無くても好いのて有るけれども、例の斬釘截鉄てあるから、已むを得ずに、大都當處を離れず豈修行の脚頭を用ふる者ならんやと、前の二句に對を取られた、此の大都といふ字を昔からオホヨソと讀ませて盧字に取扱ふ

て居るけれども、其れては前の全躰といふ實字に對にならないから、此れは矢張大都と實字に讀まなければ成るまいと思ふ、然らば大都といふは如何なることかといふに左傳に先王の制たる大都は三國の一に過ぎずと云ふたり、史記の三王世家に雒陽は漢國の大都なりなどとあるので、即ち王城の地を云ふ、我國ならば東京とか京都とか云ふのが謂ゆる大都てある、今佛法の上に於て菩提とか涅槃とか淨土とか極樂とか云ふ所を、一天萬乘の君の御座なされる大都に譬へて、其の大都は當處を離れず別に遠方ては無いぞ、行住坐臥朝な夕なの立ち塲そのまゝが皆大都てある、別に修行の脚頭を用ふる者ならんや、何も遙々と脚を痛めて歩いて往かなければ大都に到れないと云ふわけては無いぞと言はれだのてある、此の事は孔子の教にも道は須臾も離るべからずと言はれたのも皆同じ意てあるべきは道に非ずと云ふ、三祖大師が至道無難らぬを杖つくばかり思ひけるかなある、近頃の行脚上人の歌に『玉鉾の道は往くにも限あると思ふ。

然而毫釐有差。天地懸隔。違順纔起。紛然失心。

さて前の處は皆謂ゆる圓通自在の道本宗乘が、天然自然に美くしい有樣を擧げられたので有るが、其れほどに美くしい天然自然の悟りが何故に凡夫迷妄の淺ましい姿となるのであるかといふに、譬へば元來曇りの無い明らかなる鏡に塵埃の積つたやうなものてあるから、其の本々の明らかな姿に立かへらせるには、是非ともに其の塵埃を拂ひ除かなければ成らぬ、其の樣子を正法眼藏には「此法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も、修せざるには顯はれず、證せざるには得ること無し」と仰せられたのてある、ソコて此の一節は其の塵垢の積る樣子を言はれたので、即ち迷ひの說明てある、さて此の四句の中て後の二句が分れば前の二句は自づから分る、さて其の後の二句に違順綫かに起れば紛然として心を失すとある、違順といふ二字を、極めて俗語に云ふて見れば、氣に入る氣に入らないといふことて、凡そ吾々がお互ひが眼があるに依て物が見える、耳があるに依て物が聞える、其の見えたものが笛の音てあるとか、花てあるとか紅葉てあるとかいふだけのことの分るのは、佛も菩薩も吾々も犬猫も、別に違ひの有るべきては無いが、サテ其の音か氣に入るとか氣に入らぬとか、其の色を見て心持が好いと

か惡いとか云ふことに成ては、十人十種て同じ花を見て泣くものも有れば笑ふものもあるやうなわけ此れは何故てあるかといふに人々の心の分別が違ふからてある、即ち天地萬物は本々無疵なものてあるのを、人々の分別に依て泣くやうに見たり笑ふやうにも聞いたりするので、天地萬物の眞實の姿は皆ことゝ〳〵く隱れて了ふ、茲に至りて吾々の心といふものは泣くも笑ふも皆本々の眞實の心てはない、都べて物に動かされて少しも當にならぬ煩惱妄想となりて了つたので謂ゆる圓通自在の道本宗乘の明らかなる鏡は、塵垢の積りたる眞黑なものと成るのてある、ソコの樣子を違順機かに起れば紛然として心を失す、違と己れの心に背き順と己れの心に契ふ、即ち俗に氣に入らないとか氣に入るとか云ふことが起ると同時に、心の作用が紛然と亂れて、ドレが己れの眞實の心やら分らなく氣違ひのやうになるから、其れを失心と言はれた、サテ斯ういふわけて最初のところは毫釐の差て實に毛筋ほどの差異から起るのてあるけれども、其の毫釐の差が遂に天地の隔たりとなつて、佛と衆生、極樂と地獄、樂と苦、悟と迷、謂ゆるお月さまと泥龍ほどの違ひになるのて有るぞと仰せられる、但し此の四句の文言は本々〳〵三祖僧璨大師の信心銘の中に出て居るのを、此へお引きに成つたのてある。

直饒誇會豐悟兮。獲瞥地之智通。得道明心兮。擧衝天之志氣。
雖逍遙於入頭之邊量。幾虧闕於出身之活路。

初めの四句隔對即ち會に誇り悟に豐かにして衝天の志氣を擧ぐるといふ一節は、世の中の一通り悟りを開いたとか見性したとか自分ても其う思ひ人にも其う許されて居る人だちの樣子を言はれたので、會に誇りとある會の字は、俗にいふ合點するといふほどのこと、一二則の公案などを工夫して、チラリと燐寸の光を見たやうな鹽梅のところ、悟に豐といふは其れよりもモ少し進んて蠟燭の火ても見た位のところ、孰れも皆瞥地の智通を獲たには相違ない、瞥といふは過目と註して物をチラリと見ること、地の字は助字て、智通は智悲通達の意味、即ちチラリと燐寸や蠟燭の火を見たほどのことても、無始劫來眞黑闇の處にばかり浮きつ沈みつして居たものが、少しても光を見たといふことは、瞥地の智通を獲たには違ひないけれども其れ位のことては、到底まだ〳〵圓通自在

の道本宗乘にお目に懸るといふわけには參らぬ、ザテ又道を得、心を明らむるといふに至りては、いよ〳〵悟りの頂上にても達したやうな心持になつて、衝天の志氣、即ち天をも衝き拔くべき勢ほひになり釋迦何人ぞ、吾何人ぞ、祖師ありや喚び來れ我が爲めに洗脚せしめんなどと、古人の假聲は面白く使ひ得るにもせよ其れは幾かに入頭の邊量に逍遙するといふまでのことで、幾んと出身の活路を虧闕す、決して眞實安心の塲合には及びも無いことぞと仰せられる、入頭といふはヤッと悟りの仲間入りが出來たといふまでのこと、其れも中までは未だ入れぬ、わづかに邊量といはれる入口近邊までのこと設ひ悠々と奥座敷まで這入たとした所て、其處に落着て居るやうなことては成らぬ、更に出身の活路と云つて、其の奥座敷をも通り拔けて、謂ゆる空手にして鄕に還るとか、佛地を跨跳するとか云ふ所に到らねば成らぬ、然るに彼の會に誇り悟に豐かにして道を得たの心を明らめたのと云ふ分際ては、中々まだ〳〵てあるぞと仰せられたのてある。

矧彼祇園之爲生知兮。端坐六年之蹤跡可見。少林之傳心印

是れから以下は全たく此の坐禪儀の本論とも云ふべき所て、先づ第一最初に佛祖の坐禪なされた儀子を擧げ示されたのて、祇園といふは釋尊のお寺のことて、中天竺の舍衞國の波斯匿王のお子に祇陀太子といふが有つて、其人が誠に靜かな好い地處を、持て居られたのを、須達多といふ長者が買受けて、寺を建てゝ釋尊に差上げたのを略して祇園精舍といふのを、更に今は祇園とばかり言はれたのてある、生知と云ふは、論語に生れながらにして之を知るは上なりと有て、即ち支那ては聖人のことを生知の人といふ、聖人といふものは天然自然に生れない前から智慧の勝れたもので、學問したり勉强したりしてから聖人に成たのては無いといふ意味てある、ソコて今こゝに祇園の生知たると言はれたのは、即ち釋尊のことて釋尊は本々〳〵無量劫來の御修行の末が、今の御出世と成たのてあるから、今さらに御修行なさるべき必要は無い、即ち生知の御方てあらせられるけれども、端坐六年の蹤跡見つ可し、十九の時の御出家から最初の六年間は色々と

外道のする難行苦行などを御試みなされて有たが、其れは正しい修行で無いと仰せられて、後の六年は全たく坐禪ばかり成されたとある、尤も此れにも異說が有て十九の御出家ては無い、二十五の御出家て最初から六年の間坐禪なされたのてあるとも言ふが何れにしても端坐六年には違ひない、さて又少林といふは、達磨大師のことて達磨大師は支那の五嶽の一つてある嵩山といふ山のふきて、少林山といふ處に九年が間坐禪ばかりして居られたといふ、其の坐禪の仕方は壁の方に向つて居るのてあるから之をれ面壁といふた、他がらは壁觀婆羅門などと言はれたこともある、心印といふは佛心印といふのを略したので、即ち佛の悟りの印證といふほどのこと、サテ釋尊が六年端坐なされたのも、本より生知のお方のことて有るから其の坐禪の力て悟りを開かれたといふわけては無い、又達磨大師は已に天竺に於て二十七祖般若多羅尊者の衣鉢を傳へられた後に、支那へ來られたのて、問ゆる佛の心印即ち釋尊から迦葉、迦葉から阿難と二十八代傳へ來つた以心傳心の印證を與へ得られるほどの弟子を求めるのが目的てあるから、何も今さらに面壁坐禪をして悟りを求めやうといふのては無い、即ち佛祖の坐禪といふものは悟りを求める爲めにするのてはなくて、凡そ佛たり祖たる者の日夜の行業として、是の如く坐禪するので有るといふのが、即ち承陽大師の坐禪の仕方てある、然るに世の中には之と反對に坐禪といふものは悟りを開くためにするのてあるから、悟を開いた後には坐禪するには及ばない、斯う心得て己れも坐禪を廢し、人にも其う敎へる向の者も多くある、其れ故に今その正しき坐禪の仕方をお敎へなさるに就て、先づ佛祖の坐禪は決して悟りを開く爲めては無くて、却つて悟りを開いた後の日夜の行業が斯の如きものてあるといふことを示されたのてある、古聖既に然り、釋迦も達磨も此の通りてあるに依て、今人盍ぞ辨せざる、吾々お互ひも皆斯の如くに修すべきては無いかとのお勸めてある。

所以須休尋言遂語之解行須學回光返照之退歩身心自然脫落本來面目現前欲得恁麼事急務恁麼事。

此の三對六句は、初の一對に坐禪の用心を示し次の一對に坐禪の功能を擧げ、後の一對に坐禪の實行を勸められた、言を尋ね語を遂ふの解行を休すべしといふは、坐

禪の妨げになるものを抑へ止められたので、即ち言を尋ねるといふは、經文や論釋などの言葉に執り着いて何經には斯う說いてあるとか、何論には其うて無いとか、都べて言葉の上だけで彼れの此れのと議論して居る謂ゆる敎家者流の弊害、之を華嚴經には他の寶を數へて自ら半錢の分なきが如く、法に於て修行せず多聞なるも亦た是の如しと誡しめられてあり、永嘉大師は吾早年よりこのかた學問を積みを算へ徒づらに困しみたりきと、其の著「證道歌」に言はれてある眞實に道に心ざすものは何ほど、博學多聞て有ても、其れは尊とぶには足らぬ、必らず實地に修行するのを肝要とすべきてある、又語を逐ふといふは同じやうなることながら、禪家の弊風として妄りに古則公案といふものを玩弄して、已れも分らず人にも分らないやうな奇警な語句などを考へて、其れを禪機と心得、甚はだしきは其の語句の扱かひぶりを以て、見性てあるとか大悟てあるとか思ふて居る向もある、是等のことも解悟禪師が言はれた通り、箇の佛の字を說くも拖泥帶水、箇の禪の字を道ふも滿面の慚惶となるのてあるから、實地を缺いての解行は皆須からく之を休すべきものぞと仰せられる、次の句に須からく回光返照の退歩を學すべし、回光返照といふは光を廻らし返し照らすと訓むので、凡そ吾々の心の作用が見るもの聞くものに移りゆく有樣を、光が物を照すのに譬へ、其の光すなはち心の作用を內の方へ廻らし返して己れの心の本體本性を明らかに照すやうにするのが、即ち回光返照といふのてある、例へば眼に美しい物を見れば直に心が其れに移つて往て、其の美しい物に使はれることになる、然るに之を回光返照して何物が斯のやうに彼の美しい物を戀ひ慕ふて、走り廻るのてあるぞ、先から釣り出されたのて有らうか、此方から迷ひ出したのて有らうか、畢竟何うしたわけかと內に顧りみれば、始めて安心の處に近くなる、退歩といふ字は即ち回光返照の狀を形容したので、承陽大師は常に屢々この語を使はれるが、手近く申せば前に言ふたやうなわけ、更に向上に見來れば謂ゆる圓通自在の道本宗乘は、元來依證を假らず迷悟凡聖を超絶したものてあるといふ處に到りて、百尺竿頭さらに一歩を進むる狀を、之を名けて退歩といふのてある、其處が即ち坐禪の目的てあるから須からく退歩を學すべしと仰せられた、サテ次

の對句に身心自然に脱落して本來の面目現前す。とある、即ち前の言を尋ねたり語を逐ふたりして居る浮きた學問を勤めた結果は身も心も自然に脱落することになる、自然といふは時節因緣純熟する有樣、脱は解脱の脱の字て、都べて束縛を離れて自由自在な樣子、落だのといふ時の落の字て、滯ふりなくサッパリとした姿、即ち身も心も奇麗サッパリと何事にも束縛されることがなく、自由自在に働けるやうに成るのを身心脱落といふ、是れは承陽大師が天童山に於て大悟せられた時に身心脱落脱落身心と折返された所が尤も肝要なので、即ち其の脱落した自由自在の働らきと言はれた問答があつたので、身心脱落といふことは前に申したやうなこと、次に、が更に身とも心とも働らくのが謂ゆる百尺竿頭更に一歩を進めた退歩の姿てある、斯うさへなれば本來の面目現前す、謂ゆる本々圓通自在なる所の姿容が其のまゝに行住坐臥の上に顯現れて出るといふのてある、本來の面目といふは本々の姿といふこと、本々の姿といふは、花は花のまゝに紅なゐに柳は柳のまゝに綠りなやうなわけ、我々人間も其の通りに親は親らしく子は子らしく、何の權利といふこともなく何の義務といふこともなく自然に脱落して家内安全天下太平になりさへすれば何も佛祖のお世話になるわけも無ければ、聖賢君子に彼れ此れと言はれるわけもない、サア其うなりたいと思ふなら、其うするが好いぞといふことを、後の二句に恁麽の事を得んと欲せば急に恁麽の事を勤めよと仰せられた恁麽といふは宋朝の俗語て、是の此くといふほどの意味てある。

夫參禪者。靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。豈拘坐臥乎。

以下まさしく坐禪の仕方を示させられる、先づ第一に坐禪をする場處は靜室が宜しい、尤も追々稽古の積んだ上には「坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木と見てなどといふことにも成らうけれども、初心のうちは是非とも靜かなる部屋を擇ぶが宜しい、又飲食節あり、食物に能く氣を付けて成るたけ多く食べないやうにする、諸緣を放捨し萬事を休息するといふことに就て、總持寺開山弘德圓明國師

が坐禪用心記に仰せられたには、「技藝術道醫方占相みな遠離すべし、況んや歌舞妓樂誼譁戲論名聞利養こと〳〵く之に近づく可からず、頌詩歌詠の類おのづから淨心の因緣たりと雖も、好んて營なむこと莫れ、文章筆硯も擲ちて用ゐざれ、美服と垢衣とは倶に着用すべからず、復た古敎の如きは照心の家訓なりと雖も、多く之を見、之を書し之を聞くべからず、多きときは即ち亂心の因緣なり、凡そ身心を疲勞するは發病の因緣なり、火難水難風難賊難おょび海邊酒肆婬房寡女處女妓樂の邊幷びに打坐すること勿れ、國王大臣權勢の家、多欲名聞戲論の人も亦た之に近つき住することなかれ、大佛事大造營は尤も善事なりと雖も、坐禪を專らにする人は之を修すべからず、說法敎化をも好むことを得ざれ、多衆を好樂し弟子を貪求することを得ざれ、多解多學することを得され、極明極暗極寒極熱乃至遊人戲女の處幷びに打坐すること莫れ、叢林の中善知識の處深山幽谷これに依止すべし、綠水青山これ經行の處溪邊樹下これ澄心の處なり無常を觀じて忘るべからず、是れ探道の心を勵ますせばなり云々」とある、是れまでの處は皆坐禪する人の身躰の調へ方を示されたほ其の心の調へ方に就て更に善惡を思はず是非を管すること莫れ、心意識の運轉

を停め念想觀の測量を止めて、作佛を圖ること莫れと仰せられた、これも古人の御敎訓を併せ考がへるが宜しい、達磨大師は常に二祖にお示しなされて「外に諸緣を息め內心喘ぐこと無く心牆壁の如く以て道に入るべし」と仰せられたとある、心喘ぐこと無くといふは誠に適切なお言葉てある、喘ぐといふは息ざしの荒いことて、非常に身地を勞するか又は大層な心配のあるときには、誰しも息ざしの荒くなるやうなわけて、彼れの此れのと氣を揉まないやうに心懸けるのが何より肝要てある、又六祖大師のお示しにも「汝若し心要を知らんと欲せば但一切善惡すべて思量すること莫れ、自然に淸淨の心躰に入ることを得ん」と言はれてある、又百丈禪師のお言葉にも「汝等先づ諸緣を歇め萬事を休息し、善と不善と世出世間の一切諸法みな記臆すること莫れ、緣念すること莫れ、身心を放捨して其をして自在ならしめよ、心木石の如く辨別する所なく、心に所行なく、心地若し空なれば慧日自づから現じ、雲開いて日の出るが如く相似ん」と言はれてある、此の中の身心を放捨して自在ならしめよとある一言は殊に味はうて見ねば成らぬ所てある、いかに木石の如くとか牆壁の如くとか言ふても、死人の如くなれといふことては無い、只彼れの此れの

善いの惡いの迷ひの悟りのといふ妄想を起すなといふことである、次に心意識の運轉といふことに就ては、之を序の如く第八識と第七識と六識とに配當して見る邊もあらうけれども、今は其の樣なことをして居る場合では無い、只々心の作用を逞ましくするなと云ふだけのことゝ見れば宜しい、念想觀といふも亦た其の通り、但心意識といふ方は吾人の迷の姿、念想觀といふは其の迷ひを對治する方の心の用ゐ方である、例へば肉躰の無常を念じて生老病死の苦惱を臆想し遂に人無我の觀に入るといふやうなわけ、然るに今は其の迷ひも悟りも皆放下して心の中に置かないやうにするのである、ソコで結局のところ作佛を圖ること莫れ、佛に作らうと思ふては成らぬぞとのことである、とかく坐禪をしても念佛を申しても其の苦德や利益を頼みにして、佛に作りたいと思ふものが多い樣子であるが、其れは決して眞實の坐禪の仕方では無い、淨土門でさへも眞宗などでは念佛を申して往生するとは言はぬ、念佛を申すのは只報謝の行であると云ふて居る、況んや單傳の宗乘に於て作佛の爲めに坐禪するやうな心得では、全たく二乘外道の坐禪と何の差別もないことになる、然らば何の爲めに坐禪するのかといふに其事は後で分るが、只

是れ安樂の法門なり菩提を窮盡するの修證なりと後に仰せられてある、斯やうなわけであるに依て、其の坐禪といふことは豈坐臥に拘はらんや、坐といふたからといふても世間の人の普通にいふ所の坐とか臥とかいふ時の坐とは大に其の樣子が違ふのであるから、永嘉大師は行も亦た禪、坐も亦た禪、語默動靜躰安然と言はれた寢てゞも起きてゞも皆こと〳〵く坐禪に妨たぐる所はない、さりながら先づ一往のところに於ては此れに定まつた規則があるのであるから、此の次に、

尋常坐處。厚敷坐物。上用蒲團。或結跏趺坐。或半跏趺坐。謂結跏趺坐。先以右足。安左脛上。左足安右脛上。半跏趺坐。但以左足壓右脛矣。寬繫衣帶。可令齊整。次右手安左足上。左掌安右掌上。兩大拇指。面相拄矣。

いよ〳〵坐禪の仕方を敎へられる、尋常とは常々とか平生とか言ふやうな言葉であるが、此の言葉のうちに自然に常々の正則は斯うであるが、別して變通あるときは此の限りで無いといふことを反顯してあるやうに思はれる、坐物といふは普通

の蓙などのことて蒲團といふは禪林にて常に坐蒲とばかり言ふて居る徑一尺二寸圍り三尺六寸の丸形に作り、中には「パンヤ」を入れる、此れは臀の下だけに敷くもので、是非ともに斯ういふ物を臀の下に敷かなくては誠に坐禪が仕にくいものてある、サテ結跏趺坐といふものは兩方の足を組み合せるので、即ち先づ右の足を右の脞の上に載せて、其れから左の足を右の脞の上にのせるだけてあるからして組み易い、ソコて寛く衣帶を繫けて齊整なら上の眞中の處へ仰向に置いて其の上へ左の手を同じやうに置き、兩方の大拇指とが向ひ合つて面を相拄へるやうにする、之を定印といふのてある。

乃正身端坐不得左側右傾前躬後仰要令耳與肩對鼻與臍對舌掛上腭脣齒相着目須常開鼻息微通身相既調欠氣一息左右搖振兀々坐定。

さて或は結跏趺坐または半跏趺坐を致して、坐相は出來たやうなものゝ、尚ほ是れが正身端坐に成らなければ、眞の坐相が調のはぬに依て、身を眞直にして左の方へ側たつたり、右の方へ傾むいたり、又は前の方へ躬んたり後の方へ仰のいたりしないやうにする、其の眞直さ加減は耳と肩とが眞直に對ひ合ひ、鼻の先と臍の處とが眞直に對ひ合つて出たり引込だりしないほどに身躰を眞直にすれば、自然に背骨が正しく立て腹の中の臟腑もチヤンと落ち着くべき所に落ち着き、胸も開いて食物の消化も好く身も安らかに心持も好くなる、さて又舌を上顎に着けて脣皮と齒とは相着けて離れないやうにするといふのは、即ち口を閉ぢて開かないやうにするといふこと、目は須らく常に開くべし、口は開いて居ないやうにするが、目は何時でも開いて居るのが好い、さもないと直に睡氣を催ふすようになる、そこて鼻息かすかに通して鼻息の荒くないように心懸け、かやうに身相すなはち坐禪の姿が調ふたならば、欠氣一息と一旦口を開いて溜息を吐くやうに、一度大きく息を吐き出し、又身躰を坐相の崩れないやうにしたまゝて、右の方と左の方へ、ゆらり〳〵と七八返振り搖かして、そこて始めて兀々として坐定す、兀々といふは太い杭などを深く固く打込んだやうな工合、如何なることに出合つても、決して動かないやうにチヤ

ンと落着の附いた樣子を坐定と仰ふせられた。

思量箇不思量底不思量底如何思量。曰非思量。此乃坐禪之要術也。

さて身軀の落着は前段で附いたが身軀ばかり如何ほどに落ち着いても心が散亂して居ては何の詮もない其のやうなのを古人は筒裡の蛇に譬へられてある、筒裡の蛇といふは、竹筒などのやうな眞直ぐなものゝ中へ蛇を入れたやうなものであるといふことである、身軀だけ竹筒のやうに眞直ぐな坐禪をして居るけれども、中の心は蛇のやうに一生懸命に出たい出たいと思ふばかりて、少しも落ち着いては居ないに依て、チョッと坐禪をやめると直に心が亂れて身も修まらないやうになる恰ど蛇が竹筒から出さへすれば直にグニャ〳〵と曲りくねつて歩くやうになると同じやうてある、そこて身相の調ふた上には、今度は心の調のへ方をお示しになる、即ち箇の不思量底を思量せよ、不思量底如何が思量せん、曰く非思量此れ乃ち坐禪の要術なりと仰せられる、此れは此の坐禪儀の第一最初に仰せられてある所の圓通自在の道本宗乘は修證も功夫も要せずに天然自然に迷もなければ悟りもなく、善惡だの邪正だの是非だの曲直だのといふ姿容の差別なく、一味平等にして一切万法の本躰たるものてあるから、之を吾人の心の中て彼れのと思ひ量ることも出來ず、口の先まて何うのと說き述べることも出來ぬ、そこの樣子を常には不思議とも不可說ともいふ、其れを今は不思量と仰せられた、約り心て彼れの此れのと考がへることも思ふことも出來ぬといふことてある、然るに其の萬物の本躰は一味平等てあるから思量することが出來ぬとしても既に萬物と成た上からには、皆それ〳〵の姿容に差別があつて見れば、其の姿容の上に於ても思ひ量ることが出來ぬといふわけては無い、乃て凡夫は其の差別の姿に執着して彼れの此れのと思ひ惑はせられて、差別の姿を思量することと仰せられるさりながら其の不思量底の平等なる本躰に腰を掛けて、却つて思量し得べき所の差別の萬物を忘れては、此れまた何の詮もないに依て不思量のまゝに思量せよ、即ち平等の悟りを差別の萬事萬物の上に働かせよといふのが、謂ゆる

不思量底の思量といふのである至つて通俗に手近いことで言ふて見れば本を忘れないやうに末に働らけといふやうなことである、此れを般若心經には色即是空々即是色と云ひ、承陽大師が身心脫落脫落身心と仰せられたのも皆こゝの道理である、然るに此の事に就て昔し支那の唐朝のころ、或る僧が藥山惟儼禪師に向ひ不思量底如何が思量せんと問ふた、既に是れ不思量といふなら到底思量すべからざるものでは無いが、其れを何うして思量しましやうぞと云ふのである、其の時に藥山禪師が非思量とお答へなされた、此の非思量といふことが尤も肝要なので、早く申さば思量だの不思量だのといふ度合を通りぬけて、平等も差別も見ない、眞如も諸法も跡を絕つた所が即ち非思量で、謂ゆる道本宗乘の圓通自在なる樣子を、今は且らく非思量と云はれたものである、これは本々「佛境界經」といふお經に文殊菩薩が佛に向つて無爲は是れ何の境界ぞと問はれた、其の時に佛が無爲は是れ非思量の境界なりと答へられたのを文殊が更に說明して、非思量の境界は是れ佛境界なり、何を以ての故に非思量の境界中には文字あること無し、文字なきが故に辯說すること無し、辯說なきが故に諸の言說を絕す、諸の言說を絕する者は是れ佛境界なり所なし、

と云はれてある、之を三祖道信禪師が「信心銘」の中に、非思量の處、情識測り難しと云はれた、其れを更に藥山禪師が或る僧の不思量底如何が思量せんと問ふたのに答へられたといふのが此のお話の系圖になる、それを承陽大師が拈提なされて「有心已に謝し無心未だ機ならず今生の活命は淸淨を上と爲す」と言はれたこともある、一々講釋して居ては限りが無いから、講釋は此等で止めるが、要する所は坐禪の身相の調ふた上には、心の中に彼れの此れのと種々雜多のことを思量分別することを止めて、無念無想の境界に入るやうにせんければ成らぬ、と云ふても枯木死灰の如く死人の如く人事不省の病人の如くに成れといふのでは無い、そこで不思量の思量といふことが肝要になるのである、其の方便として種々の沒趣味なる古則公案などの、情識を以て思量すべからざるものを拈提し來りて、都べての思量分別を其の不思量無分別の處に寄せるのが肝要になるのである、其の公案の拈提し方などは、大祖國師の「坐禪用心記」などを熟讀するが宜しい。

所謂坐禪非習禪唯是安樂之法門也。究盡菩提之修證也。

此の一節は初め一句は坐禪のことに就て世人の誤解して居るのを辯解し、後の二句は坐禪の眞の相を示させられた、其の中て初めの誤解といふのは、他宗の人や世間の者は大抵坐禪をして悟りを求めることのやうに思ふたり、又は且らく散亂心を治めるために坐禪するものゝやうに思ふて居る、其のやうな坐禪の仕方を名けて習禪といふのてあるが、昔し唐の南山道宣律師といふ律宗の高祖が「續高僧傳」といふものを作つて、其の中に習禪といふ一科を設け、古へから謂ゆる習禪流義の坐禪をして人々の列傳を書き達磨大師をも其の習禪者の中に加へた、其れを後に覺範の洪禪師といふ人が「石門林間錄」といふものを著はして、南山の妄謬を辯じ、菩提達磨初め、梁より魏に之きて、嵩山の下に經行し少林に倚仗して面壁燕坐するのみ、習禪には非ざるなり、久しうして世人其の故を測ることなし、因て達磨を以て習禪と爲す、夫れ禪那は諸行の一のみ、何ぞ以て聖人を盡すに足らんや、而るに當時の人これを以てし、史を爲くるもの又從がつて之を習禪の列に傳し、枯木死灰の徒と伍たらしむ、然りと雖も聖人は禪那に止まるに非ず、而かも禪那に違せず云々」と言はれた、承陽大師は「辨道話」の中にも、此の坐禪のことを論ぜられて、六度中の禪度には

非ず、三學中の定學にも非ず、諸佛の自受用三昧なり」と仰せられてある、然らは今此の祖師門下に謂ふ所の坐禪は如何なる法門かといふに唯是れ安樂の法門なり菩提を究盡するの修證なりとある、安樂といふことは、天台大師の「法華文句」に身に危險なし故に安なり、心に憂惱なし故に樂なりと言はれてあるが、今此の祖門單傳の坐禪は身心脫落脫落身心の法てあつて、脫落といふことは都べての束縛を離れ、自由自在に働けるといふことてあるから、即ち身も心も束縛を離れて自由自在になり、さらに其の自由自在の脫落を身とも心ともして、物に應じ事を感して往くのが脫落身心といふものであるから是れほど身に危險なく心に憂惱のない安樂なことは無いそこの樣子を唯これ安樂の法門なりと言はれた、又次に菩提を究盡するの修證なりとある、菩提といふは天竺の言葉、漢語にすれば道といふ字になる、道といふは履踐の義と申して、都べて何事ても其の目的とする所に到り得る樣にするのが即ち道てある、そこて今こゝて菩提といはれる所の道は謂ゆる佛の道て、世の中の都べての道といふ道の多い中にも、尤も勝れたる所の道てある、何かといふに佛の道といふは即ち天地萬物一切諸法の上に普ねく博く照り輝やきて居る所の

光てあるから此の佛の道に洩れるものは無いからてある、言葉を換えて申せば天地萬物すべての物事の眞の相があらはれ眞の作用のあらはれるのが即ち佛の道いはゆる菩提てある然るに其の菩提の道は已に萬物に普ねく及ばされて在るのてあるから、何事ても皆その物その事の有りのまゝに、其の物事の眞の作用をあらはすことになるそこて今祖師門下の出家沙門たる者は寢ても起きても坐禪三昧にして居るといふことが、即ち出家沙門の作用の上に其の眞とをあらはすのてある、これを他の事にあてゝ見れば「此に軍人がある國の爲め君のために身を忘れ命を棄てゝ戰爭三昧になる其の戰爭の外に天地もなければ萬物もない、身もなければ家もない、そこが即ち戰爭を以て菩提を究盡するのてある、他のことも推して知るが好い、修證といふことは修は方法て證は目的てある、都べての物事は皆それ〴れの目的があつて而して其の目的を達する方法がある、而るに凡そ其の目的といふものは必らず方法に依て達せられるもので、方法を離れて外に目的とが出來ぬとして見れば、方法が即ち目的てあるといふわけになる、目的と方法とを別に分けて見ることが出來ぬ、今此の佛法も佛といふのが目的てあるけれども

其の佛になる方法すなはち修行の外に別に佛といふものゝあるべきわけのものては無い、支那の聖人が先生の服を着て先王の心を以て先王の事を行なふ者が即ち先王てある聖人てあると言はれたが尤もの事てある、惡いことても同じわけて、盜をするといふ事柄と盜賊と別にあるわけては無い盜をするのが即ち盜賊てあるやうなもの、今も只管に佛祖の行持たる坐禪をする者が即ち佛祖てある、外に別に佛祖を求むるには及ばない故に承陽大師は修證を一つに非ずと思へるは外道の見てあるぞと呵らせられたこともある、よく〳〵味はひて見るが宜しい。

公案現成。羅籠未到。若得此意。如龍得水。似虎靠山。當知正法自現前。昏散先撲落。

此の一節は坐禪の効能を示されたので、文意は分り易い、此の中て、公案といふことを、當節ては只趙州の無字とか兜率の三關とかいふやうな、碧巖集や無門關などに出て居る、古人の問答逸話の如き言句だけを公案と覺えた者も多いやうてあるが、其うては無からうと思ふ、中峰和尚の「山房夜話」に、公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、法

の所在にして王道の治亂實に是に係ると云ふてある、其うして見れは公案の大切な所は、法の所在にして王道の治亂實に是に係るといふ所に在るので、之を佛法の上で申せば即ち道の所在にして佛法の通塞こゝに係るといふことになる、然るに若し佛法の所在通塞が只彼の古人の問答逸話の如き拍樹子だとか麻三斤だとかいふやうな事ばかりに限るやうに思ふては、大層な間違ひではあるまいか、天地日月山川艸木人天鬼畜蠢動含靈、有情非情森羅萬象の生滅起盡消長興廢、泣くも笑ふも寐るも起るも、何事も皆この道の所在ならざるは無く、都べて皆佛法の通塞に係はらぬものは無いのである、乃ち今佛祖正傳の家訓に於ては、一切諸法そのまゝに皆以て現成公案といふのである、承陽大師の仰せられたには「諸人直に須からく箇の現成公案を辨肯すべし、作麼生か是れ現成公案」便ち是れ十方諸佛古今諸祖是なり、而して今現成す、諸人見るや」と言はれてある、さりながら又此の諸佛とか諸祖とか言はれたお詞に着き廻るものが有るて有らうと思し召されて、更に仰せられたには「今や簾を掲げ牀に下り牀を下る是なり、好箇の現成公案諸人何として下り牀を下る是なり、好箇の現成公案諸人何として か不會なると言はれた、然るに今度は又その艸とか牀とか云ふことに着き廻るも

のも有るかも知れぬが、前に謂ふた通り寐るも起るも泣くも笑ふも皆公案である、さりながら其の寐る起るもと云ふだけては、誰も彼れも朝夕に寐起はして居るけれども其の誰も彼もする寐起が一たび坐禪の光明に照らされて、そこで始めて眞實の公案が現成するのである、此の次の句を昔から大抵羅籠未だ到らずと讀ませて居るが、面山和尚は「到るなし」と讀むが好いと言はれた、其れは論語の註に未は無なりと云ふたのがあるから、此も未の字ではなくて末の字を無なりの訓で、なしと讀ませるのて有らうと言はれた、一往は御尤のことで、其心持て見て置くのは好いけれども強て末の字を氣に掛けるにも及ぶまいから、いまだといはずに只到らずと讀て置いたら好からうと思ふ、羅籠の羅の字は鳥を捕る網のこと籠の字は鳥を入れて置くものゝことて有るから、今は煩惱妄想に縛られて自由の利かない樣を羅籠に譬へたので、其れが到らずてあるから、坐禪の効能て何事も皆自由になり、謂ゆる圓通自在の道本宗乘の顯はれた樣子を、公案現成羅籠到らずと仰せられた、已に圓通自在てあるから、之を譬へて見やうならば、龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たりてある、龍といふものは本々から雲に乘り空を翔るの力があるといふ

ことてあるげれども。水を得ないては小蛇にも劣るといふことてある。虎もまた其の通り生れ附いての猛威があるに相達ないけれども、人間などに生捕にされて公園の鐵檻の中などへ入れられた日には、猫も同樣てある。我々人間も其の通り本來本法性天然自性身て本々圓通自在の天眞佛には相違ないけれども、一たび本心本性を失なふて煩惱妄想の爲めに生捕にされては何の價直もない一種の下等動物同樣のものてある。然るに今は三昧中の王三昧たる坐禪の力に依りて、公案現成羅籠到らざる境界に成て見れば、始めて彼の龍が水を得て自由自在に雲を起し空に翔るやうなもの、又猛虎が嶮しき山の中を哮り廻るやうなもので、始めて萬物の靈長と言はれる人間の價直も顯はれると申すものてある。ソコて當に知るべし正法自づから現前し、昏散先づ撲落することを。此の二句の上て後の昏散撲落といふことは、今さらに言はずもがなと思ふけれども、これが其の對句の弊て已むを得ずに言はれたもので有らうと思ふ、正法現前は辨ずるまても無からう、公案現成が即ち正法眼藏涅槃妙心の現前したので、羅籠到らずが即ち昏沈散亂の心の病の無くなつたのてある。

若從坐起。徐々動身。安詳而起。不應卒暴。

此の四句は坐禪の牀から起つときの心得を示されたのてある、瑩山國師の「坐禪用心記」に此の事に就て若し定より起たんと欲せば、先づ兩の手を兩膝の上に仰ぎ安き、身を搖かすこと七八度、細より麁に至る（最初そろ〳〵と身を搖り出して追々に麁く搖るやうにして、其れから）口を開きて氣を吐き（と溜息を吐いて）兩手を伸べて地を捺へ、輕々と座を起ち、徐々として行歩し須からく順轉順行すべし」と仰せられてある順轉順行といふは右の方へ身をかはして、歩き出すやうにするといふやうなことてある、とにかく坐禪ても心懸けるものは、何事にも卒暴ては宜しくない、乃ち寢るも起きるも坐禪と心得れば百事みな安詳として卒暴ならぬやうになるのてある、安詳の二字を面山和尙は安穩保養の義と言はれてある。

嘗觀。超凡越聖。坐脫立亡。一任此力。況復拈指竿針鎚之轉機。擧拂拳棒喝之證契。未是思量分別之所能解也。豈爲神通修證之所能知也

此の一段は古人の例證を擧げて、定力の活用を示させられた、嘗つて觀るといふ二字は昔から其ういふ例が幾らもあるといふ意味を言ひ顯はし、超凡越聖といふは凡は六凡即ち地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六つは、皆煩惱生死の迷ひの境界で、六道とも六趣ともいふ、聖は四聖即ち聲聞と緣覺と菩薩と佛との四つ、これは煩惱生死を解脫した菩提涅槃の悟りの境界であるが、今この王三昧たる坐禪の上には、其の迷ひの境界が無いばかりでは無く、其の悟りといふことも無い、都べて善惡だの邪正だの迷悟だのといふ對待の法を通り拔けたのであるから、凡をも超え聖をも越えて居る、又坐脫立亡といふは、いよ〳〵今生の暇乞、いさ臨終といふ時になつて、或は坐禪したまゝて死んだり、又は立たまゝて亡なつたりした例も幾らもある、即ち達磨大師を始め四祖五祖六祖乃至この坐禪を示された承陽大師なども坐禪したまゝて示寂せられた、三祖大師は大木の樹の下で合掌したまゝて謂ゆる立往生せられ、靈山の通禪師といふ人などは、火焰の中に直立たまゝて終られたとある、箇樣なことが坐禪の目的といふわけでは無いけれども、人間の一大事たる死際になつて、戴れ同樣に働らくことの出來るといふは、尋常容易なことでは無い、然るに此等の事も亦た此の力に一任するのであるぞ、況んや復た指竿針鎚を拈ずるの轉機、拂拳棒喝を擧するの證契、これは皆古人が禪機を弄する上に就て、種々樣々なる樣子の有たことを列擧せられたので、指といふは俱胝和尙は人に何か問はれさへすれば、直に一指を立てゝ示され、臨終に至りて大衆に對ひ、我は天龍一指頭の禪を得て一生受用不盡なりきと言つて、乃ち一指を立てたまゝに死なれたとある、竿は南泉禪師に或る僧が百尺竿頭如何が進歩せんと問ふたとき、更に一歩を進めよと答へ、又は船子和尙が竿頭の絲線君が弄するに任かすと云ふたやうな類、針は龍樹菩薩が迦那提婆を接した時に、鉢に水を一杯汲で出したら、提婆が其の中へ針を一本入れたといふやうな類、又は神山の僧密禪師が縫物をして居る時に、洞山和尙が把針の事作麼生といふたら、僧密が針々相似たりと云ふたやうなこと、鎚は天竺時代の鳴物で何か報告てもするときにカチリと鳴らして東西〳〵と言ひ出すやうなものであるが、或時釋尊が堂に上りて說法の座にお着きなさると、直に文殊が起つて白鎚したとある、又は文殊が安居中に處々を歩いたといふて、迦葉が鎚を鳴らして擯斥の命令を下したといふやうな類、拂は石

頭和尙が始めて靑原禪師に參じた時に靑原が直に拂子を竪てゝ示したといふやうなこと、拳は黃檗禪師が或時に拳を擧げて天下の老和尙すべて這裏にありといふた類、棒は德山和尙が凡そ人が來さへすれば、直に棒を揮つて打たといふやうなこと、喝は臨濟大師の四喝の類かやうな種類の禪機に至りては、到底思量分別を以て何ういふ譯だとか斯ういふ道理だとかいふやうな分際の事では無い、神通を得たとか修證をしたとかいふやうなことが鼻の先に懸つて居る間は、決して此邊の消息が徹底することが出來ぬ、乃ち超凡越聖の處に至りて始めて此に至るのであるから都べて皆排斥せられたのである、約る所は次の二句に在る。

可爲聲色之外威儀。那非知見之前軌則者哉。

聲色といふは色聲香味觸法の六塵の中から、前の二つを擧げて他を省略し、知見といふも知識見解を略したのである、威儀といふは身の行爲、軌則といふは其の行爲に就ての定つた法のあること、要する所は此の坐禪といふものは、聲色と眼に見たり耳に聞いたりすることの出來る行爲で無く、知見と心の作用で彼れの此れのと思ふたり考へたりすることの出來る譯のものでは無い、全たく聲色外の威儀て有て知見の起らぬ以前の軌則を行なふのて有るぞと云ふのお示し、コレて先づ坐禪の法則も其の効能も說き盡されたに依て、是れから下は即ち普勸の意味て序正流通に當れば流通分になる。

然則不論上智下愚。莫簡利人鈍者。專一功夫。正是辨道。修證自不染汚。趣向更是平常者也。

さて前に段々に示された通りの次第てあるに依て、此の坐禪と申すものは、其の人の智愚利鈍に拘はることとては無い、如何ほどに愚鈍な人であつても、專一に功夫さへすれば、其れが即ち佛祖の圓通自在なる大道を辨ずるといふものてある、さて又如何ほど怜悧な智慧のある人て有ても、世間の智慧て間に合ふべき事では無いに依て、專一に功夫することは、他の愚鈍の人と何の異りのあるべきては無い、或は却つて怜悧な智慧の廻る人ほど、坐禪の道に掛けては劣ることに成るかも知れぬ、事ろ愚鈍て有たならば、只正直に守るに依て道に入り易いけれども、利口な者は已れ

の利口が邪魔になつて、正直に守ることの出來ぬのが十中の八九てある、其れ故に佛法の上に於ては世智辨聰を地獄や畜生と同樣に八難の中へ數へられてある、然るに動もすれば坐禪と念佛と比較して、坐禪は到底無智愚蒙の者の及ぶ所て無いなどと云ふ人があるけれども、其れは皆心得違ひてある、とにかく專一に工夫することが出來るか出來ぬかといふ所だけが肝要の點てある、上智下愚といふことは「論語」に唯上智と下愚は移らずとあるけれども、佛法ては然うて無い「大智度論」に是の門は利根の菩薩摩訶薩能く入る、鈍根の菩薩も亦た是の門に入るべし、是の門は無礙なり、一心に學ぶ者は皆是の門に入ると龍樹菩薩が仰せられてある、專一といふは餘事を雜えずに坐禪三昧になることて、觀無量壽經」に四修といふことがある、其の中の無餘修といふのが之に當る、工夫といふことは、前に言ふた通り、物を考へることては無い、法の如くに怠たらず修行することてある、修證自づから染汚せずと云ふことは、コレは昔し南岳懷讓禪師が初めて六祖大師に參見したとき、六祖が何の處よりか來ると問ひ掛けた、南岳が正直に潙嶽より來ると答へたのを六祖が更に何物か恁麼に來ると問ふた、其時に南岳が說いて一物に似たるも即ち中らず

と答へたとき、六祖が還つて修證すべきや否やと推したソコて南岳が修證は即ち無きに非ざるも染汚することは即ち得ずと言ふた、六祖が之を印可して、只此の不染汚、諸佛の護念したまふ所ぞと言はれたので、實に有り難い公案てあるが、今は委しく之を說いて居る暇は無いが、要する所前々から屢々申した通り、修といふは方法て證といふは目的てある、ソコて世間普通の物事て申せば、方法といふものは目的を達するまての道程て、目的を達した上には方法に用のないやうなわけてあるが、今この佛法の目的たる證すなはち悟りといふことは、其の方法すなはち修行の外に別に有るとは言はぬ、謂ゆる修證不二とも修證一如とも言ふのて、修の外に證を待つのては無い證の上の修てあるから、發心の最初から得道の後に至るまて、生々世々只實地の修行を勉めるのてあるから、修と云ひ證といふも且らく假りの名て其の修とか證とかいふことに住着凝滯する所なく、任運自在に活潑々なる樣子を修證といふことが無いては御座らぬけれども、其の修證といふことに、染汚されるやうなことは御座らぬと南岳が言ふたのを今こゝへ引て來て、箇樣に坐禪辨道するのが即ち修證不二の三昧てあるに依て、修行とか證悟とかいふことに滯こふ

りは無い只々兀々として是の如くに坐禪する、コレが其儘に佛祖正傳の行持現成ぞと仰せられたのである、サア又趣向更に平常といふことは、コレは昔し趙州和尚が南泉禪師に對つて如何なるが是れ道と問ふた、南泉これに答へて平常心是れ道と言ふた、趙州は更に還つて趣向すべき否やと問ふたときに、南泉が向はんと擬すれば即ち乖くと答へた、其の公案を以て來て前の公案の對に爲されたのである、趣向といふは道を歩くことである、已に是れ道といふからには歩くべきわけである、が別に異つたものゝあるでも無い、平常心が其儘に道であるといふなら、別段に何處から何處まで歩いて往くといふわけでは無いので御座るかと問ひ返したのに、向はんと擬すれば即ち乖く、別に何處ぞへ往かうと思ふたならば、其れは横道に入つたのぞと南泉が言はれた、衆生から佛陀に往く迷から悟に往くといふやうに、目的を遠方に立てゝ置いて、其處へ往き着かうといふために修行をするのでは無い、平常心すなはち朝な夕な造次顚沛そのまゝに諸佛の大道であるに依て、朝な夕なの仕ること作すこと、其のまゝに其れが修であり證であるぞといふのである。

凡夫自界他方。西天東地。等持佛印。一擅宗風。唯務打坐。被礙

兀地。雖謂萬別千差。祇管參禪辨道。

前の一節は人の機根の上から、如何なる人でも坐禪を勵むべきことを勸められ、此の一節は如何なる世界に於ても如何なる國土に於ても、悉く坐禪を勵み來れる樣子を言ふて、吾人に坐禪を勸められたのである、自界といふは此の釋迦牟尼佛の化土たる娑婆世界のこと、他方といふは此の娑婆を距ること十萬億佛土も隔たれりといふ所の、阿彌陀佛の極樂世界の如き、又は東方藥師如來の璃瑠光世界の如き、其他十方諸佛の報土化土等を言ふたので、如何なる世界の如何なる佛菩薩も、坐禪を棄てゝる佛菩薩のあるべきでは無い、況して西天の印度諸邦、東地の支那日本等、いづれも皆等しく諸佛の心印を持ちて、一はら坐禪の宗風を擅まゝにせぬ處は無い、佛印といふことは佛陀の印證といふことで、佛法の眞理は佛でなければ之を確かに證據立てることは出來ない語を換ゑて言ふて見れば眞實に佛と同樣の悟りが開けたか否かと云ふことは、已に佛と同樣の悟りを開いた人で無ければ、其の證據人に成ることは出來ぬ、ソコで眞實の悟りを開くといふほどのことを、佛印を持すると云はれたのである、宗風といふは即ち佛祖單傳の宗旨の風俗といふことで、其

れが即ち只打坐を務めて兀地に礙えられるのが宗風である、兀地といふは兀々地の畧言で、謂ゆる非思量の境界に安住する樣子を形容した詞、礙えられると云ふは外で餘り見ない詞であるが、承陽大師は時として使はれることがある、即ち學道用心集には道に礙えられて當處に明了と云ひ、又悟に礙えられて當人圓成と云はれたこともある、皆同じ意味て何事に限らず其事が充ち溢れて外の事を容れる場處の無い有樣を形容したのてある、今も即ち坐禪三昧に成て少しも餘事を雜えない樣子を兀地に礙えられると仰せられたのてある萬別千差は前に謂ゆる上智も下愚も利人も鈍者も其の機根には何程の差別があらうとも誰も皆祇管に參禪辨道するが宜しいぞとの御勸めてある。

何抛却自家之坐牀、謾去來他國之塵境、若誤一步當面蹉過。

前節に自界も他方も西天も東地も到る處に參禪辨道せよと勸められたのを、更に各自の脚下に引返し來りて、到る處に參禪辨道すべしとすれば、強がちに自界を棄てゝ他方に赴むくの必用なく、東地を離れて西天を慕ふべきても無い、即ち自家の坐牀を抛却とナゲウチ棄てゝ他國の塵境に去來するに及ばんやと誡められた、何をか自家の坐牀といふぞ、即ち圓通自在の大道が元來自家の腰を据えて起臥すべき處てある、其れを強ちに修證だの迷悟だの、甚だしきは苦樂だの昇沈だのと煩悶惱苦七顚八倒して塵境に去來すべきては無いぞ、まして況んや釋迦牟尼佛の化土たる娑婆を厭ふて十萬億土を隔てた他方淨土を願ふなどゝいふは、以ての外の心得違ひぞと叱られる譯子も見える、されば娑婆に着し釋迦に執して娑婆と極樂と釋迦と彌陀との間に別段の違ひてても有る樣に思ふたならば、其れも亦た圓通自在の大道に遠くして遠い、故に謂ふ若し一步を誤まらば當面に蹉過すと、此の二句は暗に最初の毫厘も差あれば天地懸かに隔たると言はれたのに照應する、人々各自即今果して能く步々實地を踐み得て居るや否や、時々刻々に脚下を照顧せねばならぬ。

既得人身之機要、莫虛度光陰、保任佛道之要機、誰浪樂石火、加以形質如草露、運命似電光、倏忽便空、須臾即失。

此の一節は人生の無常なることを諭されて、片時も怠たらず參禪辨道するやうにと勸められたのである。人身の機要とある機の字は機關の機の字で、要の字は肝要の要の字である、といふは一切萬物の多い中に、尤も肝要なる機關の具はつた人間の身に生れたのでは無いか、設ひ人間に生れても、佛祖の大道に遇ふことが出來なかつたならば、切角の機要も役に立たぬと云ふものであるが、今吾々お互ひは幸ひにも、其の佛道の教も大小頓漸八萬四千の法門と多くある中に、尤も肝要なる機關の、佛祖正傳たる參禪辨道の法門を保任して居る。保任といふは保護擔任の義で、全たく己れの物として自由に取扱ふことの出來る貌、然るに若しも虛く光陰を度りて大切なる人身の機要を卉木同樣に老朽ちさせては、如何にも殘念な次第では無いか、人生五十年七十年、短かくないやうに思ふても其の實は石と石とか打ち合てピカリと出た火の忽ちに消えるやうな瞬く間の命誠に人間の身體の脆いことは草の葉末の露の如く、一生の運命富貴てあるの威光があるのと云ふて見ても、電氣の光のやうなもので、倏忽に空しくなり、須臾の間に失せて仕まふものぞよと誠に御親切なる御諭してある。

冀其參學高流。久習模象。勿怪眞龍。精進直指端的之道。尊貴絕學無爲之人。合沓佛々之菩提。嫡嗣祖々之三昧。

以下は勸誡の結文で、冀がはくはドウゾ參禪學道に志ざす所の高流、高は敬まひの詞で流は流輩と續き、トモガラといふ意味、即ち地位の高い御連中といふこやうな詞、久しく摸象に習ふといふは「六度集經」といふお經にある故事で鏡面王といふ國王が多くの盲人を集めて大きな象を摸つて見させた、ソコて王が一同の盲人に向て誰も彼も象といふ獸は如何なるものといふことか分つたかと尋ねられた時に、盲人共は人々各自に自分の摸り得ただけの所を象てあると思つて居るから、象の足を摸つた者は象は漆桶のやうなものてあると云ひ、尻尾を摸つたものは掃箒のやうてあると云ひ、尻尾の本を摸つたものは杖のやうだと云ひ、背中を摸つたものは高丌のやうだと云ひ、耳を摸つたものは箕のやうだと云ひ、牙を摸つたものは角のやうだと云ふて、互ひに自分の摸つた所だけに執着して大議論を始めたと云ふことがある、今佛法の上に於て聖道だの淨土だの念佛だの題目だの坐禪だの觀法だ

のと、或る一部分だけのことに執着して宗旨の爭そひなどをして居るのは、ほとんど此の盲人共と同樣なわけであるが、とかく久しい間そのやうな事ばかりを佛法のやうに心得た習癖が附いて居るに依て、今此の佛祖正傳の圓通自在なる大道を聞て、却て眞龍を怪まないやうにせよと仰せられた眞龍を怪むといふことは、「串子」といふ本に、昔し葉公といふ人が大層に龍を好んで、座席の裝飾も衣服の摸樣も器械道具の印にも、何も彼も龍ばかり彫らせたり描せたり、非常に龍を愛するものだから、眞個の龍が其れを知て、彼れほどに我を愛してくれる葉公のことであれば、我が往て直に遇つたならば何程喜こぶかも知らぬに依て、平生愛してくれる禮かたがた烏渡お目にかゝらうと云ふので、眞個の龍が葉公の座席へニヨロリと頭を出すといふと、葉公が驚ろいたの驚ろかないのと云ふ沙汰ではない、到頭目を廻はして氣絕してしまふたと云ふことがある、コレは眞の龍を愛したのでは無くて、龍に似たやうな形のものを愛したといふだけの事である、今も其の通り眞實の佛法を聞いては却つて驚ろき怪しむやうなことでは知らずに佛法に似たやうなものを、大乘だの小乘だの顯教だの密教だのと幾ら議論をして居ても眞實正傳の佛法を聞いては却つて驚ろき怪しむやうなことでは成らぬぞよ、しからば其の眞龍たるべき正法とは如何なる事かといふに、直指端的の道である、直指といふは達磨大師が直指人心見性成佛と言はれたので、佛法といふものは別に難しいことでは無い、直に人心を指す、吾々お互ひに惡い可愛い惜い欲いと働らく心、此の心を其の儘に其の本性を見はしさへすれば、其れが即ち圓通自在の大道である端的といふは何事に限らず其處に現はれて居るまゝ、別に工夫も考がへも入らない其身其まゝのことで、其處が即ち參禪辨道に志ざす者の尤も勉強すべき所であるから、直指端的の道に精進せよと仰せられた絕學無爲の入といふは迷だの悟りだの佛だの衆生だの大乘だの小乘だの念佛だの題目だのと並べ散らして居るのは皆これ學問の分齊である、手本に附いて習ふて居るやうなものだ手本に附いて習つて居るうちは能く似たとか似ないとか能く書けたとか書けないとか皆捨らへ事てあるから有爲である、有爲といふは作つたもの捨らへたものといふことで作つたもの捨らへたものは晩かれ早かれ破れる時のあるものである、然るに今は絕學無爲て、手本を離れて自分の手が自分の字を自由に書くやうなもの似るも似ないも無い好いも惡いもない、作つたもの捨らへたものでな

いから無爲てある、無爲てあるから常住不變て破れるといふこともなく、變るといふこともない、何事も皆此處に至らなければ價値はない、今佛法修行の人も此に至りては、迷の厭ふべきも無ければ悟りの求むべきも無いに依て、永嘉大師は「證道歌」の發端に絕學無爲の閑道人、妄想を除かず眞をも求めずと言はれた、折角萬物の靈長と言はれる人身の機要を得て、最尊無上なる佛道の要機を保任したからには、かゝる人をこそ尊貴ばねば成らぬぞ、其れが即ち、佛々の菩提に合沓し祖々の三昧を嫡嗣するといふものてある、佛々の菩提といふたは十方三世の一切諸佛は、皆その菩提すなはち其の道が一つてある、我も亦た其の諸佛の一人として、其の道に合沓する、合沓といふは積重の義と古人が註したのもあるが、丁度こう箱などに蓋をしてキチリと際間なく能く折合の附くやうな姿とも見える、祖々の三昧といふも、語が換つたまてのこと、迦葉このかた代々の祖師だち、迦葉の三昧は阿難知らず、阿難の三昧は迦葉知らずとも云ふけれども、其の三昧は皆同道一如てある、我も亦た其の列祖の嫡嗣として其の三昧の家督相續人とならねば成らぬ、三昧といふは天竺の語これを演譯すれば正定となる、定といふは物事の能く落着の附いた姿其れに

正邪の二つがある、惡く落着の附くことも有るが、今は正しく落着の附いた姿を三昧といふ。

久爲恁麼須是恁麼寶藏自開受用如意

最初の處て頻りに坐禪の功能を述べられ、恁麼の事を得んと欲せば急に恁麼の事を務めよとの御勸めてあつたが、今また其のお詞に照應せしめて、久しく恁麼なることを爲さば須からく是れ恁麼なるべしと結ばせられた、恁麼といふことは前にも申して置た通り、支那の俗語て、是の如くとか此の通りとか云ふほどのことてある、然し此の語は祖承の典據があるのて、昔し雲居の道膺禪師が飛に示された語に、躰得底の人の心は臘月の扇の如く、口邊直に得たり饌の出づることを、是れ汝が强て爲すに非ず、任運に此の如し、恁麼の事を得んと欲せば須からく是れ恁麼の人なるべし、既に是れ恁麼の人、何ぞ恁麼の事を愁へんと言はれたことがある、其れを今承陽大師が此の坐禪儀に引き用ゐられたので、お話に一々典據のあることが此の一事ても能く分る、寶藏といふは即ち圓通自在の道本宗乘のこと、コレも大珠の慧

海禪師が「食道は江西和尚の汝が自家の寶藏に一切具足して使用自在なり、外に求むることを假らざれと言はれたるを聞きしより、我一時に休し去りて自己の財寶身に隨つて受用す」と言はれたことがある、受用といふことは、寶首大師の梵網經の疏に「毘盧舍那此に光明遍照と曰ふ、而して二義あり、一は內に智光を以て眞法界を照す、此れ自受用の義に約す、二は外に身光を以て大機に照應す、是れ他受用の義に約すと言ふてある、乃ち今こゝに受用如意と仰せられたのは、取も直さず其の自受用のことで、卽ち法身毘盧舍那如來の智慧の光明の耀やく姿である、譬へば自受用といふことは、水の濡るゝが如く火の燃るが如きもので、己れの本分本性を其の儘に現はすまでのこと、何のために濡らすといふわけも無ければ、誰れに頼まれて燃えるといふ理窟もない、唯々任運に是の如く濡れ是の如く燃ゆるまでのことである吾々お互ひの行住坐臥造次も顚沛も皆唯任運放曠に飢來りては飯を喫し困じては眠る、此間に一毫も罣礙なきことを得れば、此の五尺五十年の臭皮袋が直に是れ法身如來の自受用法樂である、昔し玄沙禪師に向つて或る僧が如何なるか是れ淸淨法身と問ふた、玄沙が之に答へて膿滴々地と言ふた、膿血の滴々と流れる其の儘に淸淨法身の毘盧舍那佛を認め、百尺竿頭さらに一歩を進めて、退身三歩することが有たら、始めて此の普勸坐禪儀を眞個に有り難く思ふ時も有るであらう、我れ之を善くすと言ふには非ず、願はくば學ばんと思ふまでのことである。

普勸坐禪儀講話 終

元來曙き沒鬢眉
百事一任身片皮
休是与地清查足

要看生角化說时

萬々有意題

明治三十九年十一月十日印刷
明治三十九年十一月十三日發行

不許述者 檢印 複製

講述者 大內青巒
發行者 今村延雄 東京市芝區露月町十八番地
印刷者 太田音次郎 東京京橋區四紺屋町廿六七番地
印刷所 株式會社 秀英舍 東京京橋區四紺屋町廿六七番地

碧巖集講話下卷奧附

和綴全四冊定價金四圓五十錢
洋綴全二冊定價金四圓

發行所 東京市芝區露月町 鴻盟社

電話新橋三〇二七番
振替貯金口座二九七九番

特約賣捌所

東京市神田區御茶水橋
仝 神田區表神保町
仝 京橋區中橋廣小路
京都市木屋町二條
大阪東區南本町四丁目

光融館
東京堂
前川文榮閣
貝葉書院
積文社

▲▲禪學唯一の珍書▼▼

▲▲大高評▼▼

忽滑谷快天先生著

禪學批判論

全一冊 第三版

●製本頗る美本●

▲定價金四十五錢 郵稅金八錢▼

禪とは何ぞや禪は佛敎の總府也禪を識り禪を悟て初めて佛敎の全躰と蘊奥とに造詣し得たりと云ふべし本書は著者が精透嶄新なる識見を以て劈頭先づ近代文明國民の要求する宗敎の如何なるべきかを喝破し禪を論しては**禪の倫理觀宇宙觀人生觀解脫觀**等を解決し人心の正に歸趣すべき所を知らしむ以て**禪の理論**を明むべく又**禪的活動の修養**に於て好箇の指南車たらん

▲▲大高評▼▼

▲▲禪學唯一の珍書▼▼

○子爵渡邊國武君題字

○荒木礒天君著

練膽 養腦 延壽

仙術

一名 ◀禪の實踐法▶

◀定價金卅錢●郵稅金四錢▶

○忽滑谷快天君序文

○梶川乾堂君跋

近來禪に關する著尠からざるも多くは先哲既得の境界を詩的に記述するのみにして**如何**にせばかゝる**境界**に**到達**すべきかの**問題**に至りては措いて論ぜず初學門外の禪に志すものをして茫然として不得要領に了らしむる著者玆に慨する所あり**先哲の遺訓**に則り**自家實驗**に照し**禪の實踐法**を最も簡明に最も平易に講述し如何なる初學門外の人も一度本書を播けば**業務**の間に**勉學**の傍**實修**し得べき方法を說明し餘蘊なし眞に是れ**無師獨習**の活書と云ふべし

發行所 東京 鴻盟社

鴻盟社出版圖書大賣捌所

東京麻布區	森江書店
同芝區	佛敎館
同	栗原書店
同	大村屋
東京神田區	光融館
同	東京堂
同	上田屋
同	勉強堂
同	有斐閣
同	修學堂
仝日本橋區	林平次郎
同	前川亦三郎
同	大倉書店
同	青野友三郎
同	東海堂
同	文林堂
仝京橋區	春祥堂
同	服部書店
同	目黑書店
同	山中井列堂
同	松山堂
同	須原屋
仝本郷區	森江分店
同	日本堂
同	田中書店
同	東亞堂
仝小石川區	淨土敎報社
同	鶏聲堂
淺草區	東光社
同	淺倉屋
京都	貝葉書院
同	出雲寺書店
同	澤田友五郎
同	永田長左衛門
同	法藏館
同	顯道書院
大坂東區	積文社
名古屋	川瀨代助
同	其中堂
同	文光堂
同	梶田勘助
熊本市	長崎次郎
筑前博多市	積善館支店
越後水原	西村六平
同長岡	目黑十郎
靜岡	末宮書店
横濱市辨天通	丸善書店
信州長野町	西澤書店
同松本町	水琴堂
同飯田町	西澤支店
同長野	朝陽堂
上州前橋	喚平堂
仙臺市大町	同事社
山形市	市村商店
羽後秋田市	成見清兵衛
越後三條	樋口屋

○●○大高評●○●○

宇宙論

加藤咄堂居士著

全一冊　製本美本　一三　定價金三十五錢　郵稅金六錢

宇宙とは何ぞや**人**は宇宙の一員也宇宙を明して始めて**人生**を明にすべし本書は宇宙の**原始天地の開闢**より其の**本體**並に其の**目的**を究め**人生**と相渉るの妙致に及び**國家の使命人類の歸趣**を論じ一讀人をして羽化登仙せしむるの感あり以て**精神の修養**に資すべくまた**傳道**の良材となすべし

發行所　東京芝露月町　**鴻盟社**

鴻盟社發賣

◎忽滑谷快天君新著　**禪學講話**　全一冊　定價金四十錢　郵稅金六

◎加藤咄堂學玄光著　**禪觀錄**　全一冊　定價金三十錢　郵稅金四

◎高田道見老師講述　**從容錄講話**　全四冊　定價金四拾入小包料金廿錢

◎高田道見老師著　**佛教人生論**　全一冊　定價金貳圓卅錢　小包料金十五錢

◎高田道見老師講述　通俗　**佛教便覽**　全一冊　定價金七十錢　郵稅金八

◎中村惠定師講述　安心比較　**禪と諸宗**　全一冊　定價金五　郵稅金二

◎仁科衛甘講述　**禪學のはなし**　全一冊　定價金十二錢　郵稅金二

◎田中仙樵先生著　**茶禪一味**　全一冊　定價金廿五錢　郵稅金四

◎原僧運師著　**一味の禪旨**　全一冊　定價金廿五錢　郵稅金四

◎加藤咄堂居士著　通俗講話　**佛教要義**　全一冊　定價金參圓卅五錢　郵稅金十

◎加藤咄堂居士著　增補　**死生觀**　全一冊　定價金四十錢　郵稅金八

◎加藤咄堂居士著　**運命觀**　全一冊　定價金三十五錢　郵稅金六